

自立した女と男を
人間らしい生活を
差別のない社会を
育み 創り出す

新しい家庭科

We

ウイ

逐次刊行物

平成元年 7.24 成

国立婦人教育館

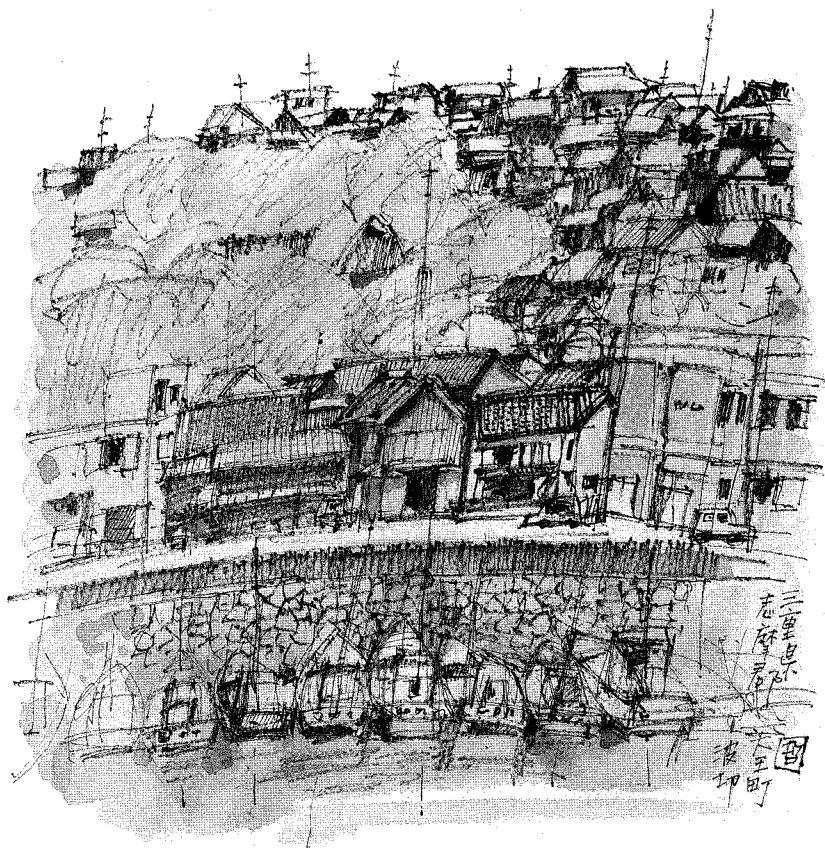
婦人教育情報センター



8.9
1989

特集 地球市民として生きる

風の日



風の地図

佐藤哲生

巻頭詩

野菜畑・いんげんは芽を出す

土にひびがはいる

ひびがはいった土が持ちあがる

光が土に走りこむ

「あ」

持ちあげた土を頭上にかざして

豆の皮の茶色の帽子をかぶって

黄緑のふたばで

「やあ」って

まず まわりの土の上の生きているみんなに

うれしくてたまらないあいさつをしたんだ

羽 生 槇 子

We

ウイ 1989.8.9月号

|特集| 地球市民として生きる

- インタビュー 楠原 彰さん（インタビューー 稲邑恭子） 4
—「いいんじゃないの、そのままです」—
- 地球規模で支え合う時代—西川 潤さんに聞く— ・稲邑恭子 12
- 「開発」と「援助」をめぐって ・北沢洋子 16
- 〈内国植民地〉北海道の住民から見たアイヌ報道 ・蓮池悦子 20
- 授業「国際結婚を考える」 ・大津和子 24

|発言|

- 私たちのフィリピン連帯は、一枚のカードから ・吉田和子 28
- 「ネグロス・キャンペーン」での出会い ・幕田恵美子 30
- バングラデシュと私 ・吉田志朗 32
- 地球で出会うすべては自分 ・成田正雄 34
- いつも問題意識を持ち、「なぜ？」と考えられる大人へ ・臼井香里 36
- アジアからの就学生の相談から ・酒井和子 38

|学習の主人公たち|

二つの国の学校に通って／建部和礼 三崎真穂子 小澤 淳 40

●新しい家庭科を創るために

- 小学校では／はたらく おかあさん ・入家君子 44
- 中学校では／家庭科教師の発想の転換を図るために ・土川礼子 49
- 高等学校では／消費者教育の試み（その2） ・田村より子 54

■連載

風の地図/風の日	佐藤哲生	
巻頭詩/野菜畑・いんげんは芽を出す	羽生楨子	1
家族と家庭科/'47年学習指導要領家庭科編(試案)と新旧家族観	酒井はるみ	62
親子論と心理学/心の数量化—心理テスト	小沢牧子	64
海の輝く日/多く朝の歌 その1	佐藤通雅	66
広がるネットワーク/<V>どんな相手とも対応していける力かもう少し欲しいな	平井雷太	68
あっちゃ、こっちゃ、フフフ/学校氏の欲望(2)	田中正彦	71
筐/革命二百年	村田直文	72
幼児クラブやってみる?/'こんな子どもに育ってね」	佐多和子	73
KNOW HOW共学家庭科/高遠高校での共学 その4	湯沢静江	74
私の朝鮮史/渤海(ぼっかい)と日本	岡百合子	75
食べもの文化史/みそとみそ汁	石川尚子	76
よそおい/パンツ大好き人間インタビュー(5)	内山裕子	77
コンピューターと暮らし/その5	碧海西葵	78
石けんコンサート通信/'僕は洗濯をしてふたりの暮らし」 よしだあきひろ		79
波/地球市民として生きる力	半田たつ子	80

●こだま 「評価」をめぐる 60 ●ひと 碧海西葵さん 61

○私のすすめる1冊 43 ○イキイキぐるうぶ 59 ○今月の読書から 82
 ○わたくしからあなたに 84 ○Weの読者会だより 86
 ○Weになんでも言おう なんでも聞こう 88 ○泉 90 ○十字路 92
 ○アンテナ 94 ○編集室からあなたに 58・85 ○WE EDITOR'S NOTE 96



Interview ● 楠原 彰 さん

「いいんじゃないの、そのままで」



「ヨーロッパの学者、思想家の『なぜ?』『どうなっているか?』の分析は、ますます微に入り細に入り鋭くなっていく。孤独にたえきれなくなった人間が、人間と人間、自然と人間をもう一度つなぎなおそうとする思想や芸術を生みだすため懸命に努力しながら、ますます人と人、人と自然を引き裂いていく。…ゆきつくところはさらなる孤独と絶望である。…幸か不幸か、アフリカの思想家や作家たちはまだ、そうした状況にはいない」——『アフリカは遠いか』より）
十年前、一年近いアフリカの旅で書かれたこの本の中で、楠原さんは、旅行中クラシック音楽と独りでいる時間を必死で求めた自分、西欧Ⅱ文明化されてしまった自分は何だろうと問いかける。「悪ガキだった」自分を風化させずに来た人なのか、「子供」を語ることが自分を語ることになる稀有な人。しなやかで囚われない。

インタビュー

稲邑 恭子

一九三八年、新潟県生まれ。
新潟大学教育学部・東京大学大学院教育学研究科を経て、現在、国学院大学文学部教授。

南アフリカ問題研究所代表。日本反アパルトヘイト委員会会員。

〈著書〉『自立と共存』『アフリカの飢えとアパルトヘイト』（垂紀書房）『アフリカは遠いか』（すずさわ書店）『教育は絶望か希望か』（白順社・共著）『共訳書』パウロ・フレイレ『被抑圧者の教育学』『伝達か対話か』（垂紀書房）

アフリカとの出会い

——アパルトヘイトの問題に二十年来取り組んでいらっしやるとうかがっていますが、どういふことがきっかけだったのでしょうか？

楠原 僕が大学院に入り上京した頃、60年代初めは、アフリカに独立の嵐が吹き荒れていました。僕は、新潟の百姓の出でしたから、「東京」に殺されそうに感じていて、なんとか「東京」に適応させられないで生きて行くにはどうしたらいいのか考えていました。その時、ヨーロッパとアフリカの關係が、東京と新潟との關係に重なってみえて、アフリカのことを考えてみたくなり、66年アフリカに行き、十月月ほど暮らしてきました。アパルトヘイトのことは、そのころからです。60年の3月21日にシャープビルの大虐殺というのがあって、パス法という身分証明書法に反対する黒人たちの集會に、軍隊と警官隊が発砲し六十九人が殺され、何百人もが負傷した。その事件が國際的な批判を浴び、ヨーロッパの資本が一時的に引き上げる、その後日本が南アと通商条約を結び、翌年「名譽白人」になるという状況があったものですから、僕の行った頃にはアフリカ中の知識人たちは日本のことを怒っていたし、アパルトヘイトのことをやらないで、何でアフリカに來たかと言われました。

——そのときは、どちらに行かれたのでしょうか。

楠原 ケニアを主に、タンザニア、ウガンダ、東アフリカを中心に十カ月ぐらいいました。旅行というか、村で暮らしていたのです。アフリカの村というのは、三日までは居候させてくれるのですが、四日目の朝には鋤をさしだす、つまり働けというのです。そうでなければ出て行けと。僕も村で働いていたのですが、そのうち、学校の教師に拾われまして、それが、まだ二十代の校長で、俺の家に來いと言う。行くと、代わりに授業やれと。それで、校長の授業を僕がやり、彼はそのあいだ僕のカメラを担いでどこかに消えてしまう。

——どんな授業をなさったのですか？

楠原 ケニアは英國の植民地でしたから英語は珍しくなく、校長の好みで一つだけ英語で教えるクラスがあった、それを僕が受け持ったわけです。最初の授業はかけ算で、参ったな、「かける」というのは何というのかなと思ひながら黒板に3×3と書くと、「3 times 3 makes 9」と子供が言う。そうか、というわけで、後はそれで何十時間もやっていましたよ。で、暇になると、子供にノートと鉛筆持たせて遠足のようなことをして、帰ってきて感想を書かせて、後は寝ている、と、スペルがわからないと言ってくる、それを辞書をひいて黒板に書いてやる、とそんな調子で。校長もいい加減なもんだったけど、今でも大体そんなもんですよ、アフリカの

田舎の学校は。だから、誰かが来ると喜んで授業をさせてしまふ。村を歩いていると呼ぶんですよね、分教場から。なんだろうと思って行くと、演説をさせられる。それは、楽しいですよ。

それで、アフリカから帰ってきて、南アのことをやらなきゃならんと思って。ところが、教育学専攻で、専門じゃないから、いい加減ずっこけそうになる、そうすると、アフリカでいろいろ事件が起こり、電報がきたり、日本が悪いことをしているから調査しろと言ってきたり。⁶⁰年代中頃なんて誰もほかにやっていないので僕たちが窓口になっていたので。

——そのころは何人ぐらいでやっていらしたのですか？

楠原 反アパルトヘイト運動は、今は亡くなられた野間寛二郎というかたが始めたのですが、最初は政党関係者や労働関係者と一緒はかなりおおげさに始まったのですが、中ソ論争で分裂しポシャッてしまった。党や大きな組織では駄目なのじゃないか、とにかく自分たちだけでもやろうと学習会を続けてきました。それが68年に、行動委員会を作ろうということになり若い連中が集まり、アフリカ行動委員会というのができました。

日本の反アパルトヘイト運動の今

——今は日本の反アパルトヘイト運動はどういう状況です

か？

楠原 一昨年あたりから、めざましい動きがありますね。全国に小さいグループができました。特に驚くのは、アパルトヘイトのことを怒り、そこで考える、若い中学生や高校生の子たちが出てきたということです。

——その子たちはどういうきっかけ？

楠原 アフリカから帰ってきたという子供もいます。もうひとつは、映画やロックから。ヨーロッパのロックシンガーたちはよくアパルトヘイト反対の歌など歌いますから。

運動に関わっているのは女の人数からいって多いですね。それだけ管理から少しは自由であることと、男よりは抑圧が多いってことと、その両方からでしょうね。それと、日本にいる外国人で、なんかやりたいけどそういうグループがないというので反アパルトヘイト委員会に来るのだけれど、日本語でやられちゃわからない、じゃあということインターナショナルセクションを作る、そういう動きがこの二、三年顕著です。助かっていますよ、翻訳も通訳もしてもらって。

アフリカの子供たちと日本の子供たち

——楠原さんはご本のなかで、アフリカの子供たちは子供としての権利をうばわれ、路上に投げ出され先頭にたって戦い、殺されたり拷問にかけられたり悲惨な目にあっているの

だけでも、彼らには希望がある、それと対照的に、家や学校によって「保護」されている日本の子供には敵が見えないし、希望がない、とおっしゃっているのですが……

楠原 日本の子供は、見えないと言うより、見えないようにさせられてきた。子供の時から見ちゃいけないと。知識としてアパルトヘイトは習って知っているが、例えば僕らが目の前でビラを配っていても受けとろうとしない、「何で受けとってくれないの、あなたたちと同じ世代の子のことなんだよ」っていうと、「学校で禁じられているから」と。

そのことは象徴的だと思うんです。知識としては（労働）や（差別）、（抑圧）や（貧困）、（障害）などを教えるが、実際に子供がそれらにさわたってみることはさせない。日本の子は小さいときから「保護」の名の下にそうさせられてきたのではないでしょうか。そうして、現実にはふれないで、テレビを見たり学校の教師の話の聞いて、何でも知っていて実際にも何かやったかのように錯覚してしまふ。

学校も家も、例えば飛び降り自殺があっても、子供たちに現場を隠してみせない。「死」を教えても、実際の死は見せない。そういうことを繰り返して、本当の現実を実際の当たりにしたりさわたりする機会を奪われていくなかで、体が硬直していく。自分で判断し決定する、自分で見る、考える、生きるということがすごく怖くなっていくのではないで

しょうか。学校に行って与えられたものをこなし、受け入れる、その面だけが育てられて行くことになるでしょう。その面では、かれらも「アパルトヘイト（隔離）」されているわけです。

アフリカからの留学生に「日本の子供のほめ言葉は何だ？」と聞かれたから「さあ、勉強ができる、とか、素直、とかじやないの？」と言うと、笑って、いま、世界で、ほめ言葉はただ一つ、「インディペンダント」（自立していること）だということです。日本では、親も、教師も、会社も、「ディペンダント」を、つまり帰属することを求めますからそうはなれない。でもそれで幸せかというと、そうではない。昨年の警察庁発表でも六百三人の子供が自殺し、その内、学校関係が原因とみられるものが百五十人もいますから。

第三世界の子供たちの姿をいくつか典型的に分けると、一つは、第三世界の農村地帯で見られる伝染病や飢餓で死んでいく子供たち。ユニセフの昨年の子供白書で千四百万人、一日三万八千人の子供たちが死ぬと言われています。飢餓というのは単なる自然災害ではなく、人災です。タイの東北地帯とか、ブラジルの北東部とか、アフリカでいうと、モザンビーク、アンゴラ、エチオピア、サハラ砂漠の周辺とか。それから、二番目は、いま問題になっているストリートチルドレン。――国際人道問題独立委員会の報告が『ストリートチルドレ

ン』という本になりましたね。

楠原 ええ、この前、シンポジウムがあつて参加しましたが、第三世界の開発は輸出用で、自国の食糧増産のための開発ではありませんから、開発が進めば進むほど小作農は村にいらなくなり、都市に流れる、それがストリートチルドレンを生んでいくのですが、これはもう、めっちゃ多いですよ。

フィリピンのスモークーマウンテンに、この間、行ったのですが、大都市マニラから出るゴミが、郊外のナボタスという地域に捨てられ、そこに、たくさんの人たちが住みついている。雨が降って、自然発火して、煙の中を、子供たちが裸足でゴミ拾いしている。それで、煙にまかれて、たくさん子供が死んじゃうんです。僕も、いろんなスラムに行きました、あそこは本当にすごかった。

ストリートチルドレンは、ユニセフレポートでは三千万人以上と推定されていますが、昨年暮れのシンポジウムにきたブラジルの専門家は、一億人いるのではないかと言っていました。アフリカでも当然多いのですが、南アでは、黒人蜂起の先頭に立ち、撃ち殺されているのはそういう子供たちなのです。こういう国内の弾圧の様子は『二匹の犬と自由』（現代企画社刊）という子供たちの作文集に書かれています、これを読むと、なぜ八歳の子が政治犯になり、十歳の子が電気ショックの拷問を受けなければならないのかわかります。

三つめは、まだ、開発や近代化が進んでない地域の子供たち。七歳ぐらいから親と一緒に仕事をし、学校なんか行かないけど、自然と一体となつて、たくましく生きていく子供たち、これは、見ていてさわかです。特に、遊牧民の子供たちがそうですね。でも、これらは段々少なくなり、近代化が進むにつれて一か二の風景に吸収されていきます。

飢餓や病気で死ぬ子供たち、ストリートチルドレン、先進工業国、とりわけ日本の自虐的ともいえる子供たち、これらはつながっていると思うんです。日本の子供たちはいろいろな矛盾から隔離されて、出口のない自分の苦しみや悲しみを中心に世界が回っているみたいになつてしまっている、だから自殺したりするんだけど。

日本の学校は、世界に冠たる就学率を誇っている、それは何で達成されてきたかという、効率と画一化のために様々なものを排除してきた。むしろ排除されてきたもののほうに大事なものがあるぐらいに。そうやって、同質なものだけ画一的に集めて異質なものは入れない。日本の子供たちが、何を自分たちは排除してきたのかに気づいていけば、第三世界が見えてきて、自分を苦しめてきた敵——日本の場合はシステムだと思ふんですが——も見えてくるでしょう。

日本の子供ばかり見ても、あまり出口は見えてこないです。チェルノブイリ以降、「死にたくない」と訴え始めた

ヨーロッパの子供たちと、どこかで死を受け入れてしまっている日本の子供たちと、どうにかして生きたいと思いつながら死んでいく第三世界の子供たちと、その関係をどうしていいのかということですね。

そのことは、ちょうど、チェルノブイリ以降の、放射能に汚染された食べ物、どんなに規制しても南に流れ込んでいつてしまっているということを、もう豊かな国の消費者運動だけではどうすることもできないのと同じです。たとえ汚染された肉でも、今は死なないと食ってしまう。薬もそう、いま日本で禁じられているような副作用の強い薬が、いつの間にかマニラの路上で売られている。

——合成洗剤も、粉ミルクも。北で売れなくなったものは全部。

楠原 そうですね、その意味では、今は、市民運動も国際的にやらないと、自分の国だけでやっても駄目ですね。

飢餓キャンペーンの限界

——日本の子供たちも、ほかの国の子供たちのことが見えてくると案になると思うんですが、ただ、日本では飢餓キャンペーンでもそうでしたが、ただかわいそうという目でみてしまいがち。それではマイナスのイメージを先行させてしまうのではないのでしょうか。以前読んだ松井やよりさんの開発教

育の記事にありました、オランダの子供向けの開発教育の雑誌の編集長の「哀れみでなく、興味を持つように編集に苦心している」という話やスウェーデンの担当者の「人々がどんなにけなげに生きているかなるべく肯定的な面を知らせ」自分たちの力で世界を変えられると子供たちに自信をもたせることが開発教育のポイント」と言う姿勢がとても印象的でした。

楠原 だから、飢餓キャンペーンのとき、日本にいたアフリカ人たちがすごく怒りましたね。あれで、アフリカの文化の独自性などずっとんでしまったと。顔を見ればすぐ、物や金をあげようか、ということになって。日本人は黒人たちの主食であるとうもろこしをアフリカ（南ア）から家畜の餌用に大量に輸入しながら、余った毛布、金をやろうかと言うんですから。私たちの生活の仕方を変え、生活の足元を見直さないような飢餓キャンペーンはインチキだと思っています。

僕はこういう表現をします。アフリカを紹介するときは、悲しみの大陸だけでも、怒りの大陸だけでも駄目、つまり、喜びと悲しみと怒りと三つ言ってくれなければ駄目と。だから「飢餓大陸アフリカ」なんて許せない。僕がいるとき黒柳徹子さんがタンザニアに来て、飢えてる飢えてるって言った。でも言われてる程悲惨な状況ではないんです。アフリカの人はあきれかえっていましたよ。アフリカの政治家はこれ

で金が入ってくるとほくそえんでいましたけどね。

なぜアフリカなのか

——若い人たちがそうであるように、歌や音楽を通じてアフリカに入っていくかたちのほうが自然なのでしょうね。

楠原 アフリカとの出会いかたというのは最初はいろいろあっていいでしょう。忙しい日本での僕たちの暮らしは何もかもが途中で、豊かな今はない。「今日という再び帰ることのできない時間は明日のためにあるのではない。今が豊かでなければ、明日が豊かなはずがない」という哲学は、アフリカのみならず第三世界の人々の暮らしの根っこにあると思うんですが。そのことだと思えますね、僕らが惹かれるのは。

僕はあまりアフリカを美化はしません。アフリカにあるものはすべて日本にあり、日本で起こっていることはすべてアフリカで起こっていると思っていますから。ただ対処の仕方が全然違いますね。画的に、みんなで一緒になってやっていくのではなく、それぞれの個性を大事にしながら。だから効率はあるんですよ。

日本の子供に関係の直接性と相互承認のネットワークがなくなってきたというのに気づいたのもアフリカに行ってきたからです。どんなに貧しくても、自分の位置が社会にしっかりとある子供って強いし、自分を受け入れてくれるネットワーク

クがたくさんある社会では子供はへこたれないですよ。それが日本の場合には受け入れる価値観が一つになってしまっているから、子供はきついです。むろん、親にとっても。

私たちに出来ること

——アパルトヘイトに対抗して、私たちが出来ることは？

楠原 そうですね、具体的には、南ア製品を買わないこと。アップルタイザー、缶詰、貴金属。ダイヤ、プラチナなんかはほとんど南ア産ですね。あとは、南アに進出している企業に、手紙を書くとか、電話をする。南アの政治犯や家族に手紙を書く。それから、反アパルトヘイト市民グループに電話をして、自分の空いている時間を登録して行ってみる、幾らでも仕事がありますから。そういうことって、とっても大切なことだと思っています。週一回だけでも自分の中に異質の世界が入って来ますから。

差別の呼び名

——話は変わりますが、「部族」などのアフリカに対する差別語も問題になりましたね。

楠原 「ブッシュマン」とか「ホッテントット」とかいふ呼び名はヨーロッパ人がつけたもので差別語なんです。前者は藪から出てきた男、の意味、後者は動物のようなヘンな発音

をする人間の意味です。「奴隸海岸」、「部族」、そんなことを言えば、たくさんあるんですよ。

特に広島市の市民運動のグループの人たちがこたわって調べていたのですが、教科書会社は居直っていた。それが、そのうち、教科書の執筆者たちが反対し始めた。それで、教科書会社も折れた。それでも、文部省は変える必要はないと言っていたのが急に今年二月、改めると通達を出してきたのです。でもまだいくらでもある。「新大陸の発見」もおかしい、「侵略」を「進出」と変えるのはもつてのほか。ことばってそんなものだと思うんですね。差別を感じるものが差別だと言えそれは差別だと思う。「部族」にたいしてもアフリカ人から声が上がりました。それはそうですね、自分たちのことは「部族」と呼ばないで、開発の遅れた地域の人のことはとりわけ、「部族」と呼ぶのですから。

いいんじゃないの、そのままで

——いま一番「大人」に伝えたいことは？

楠原 そうですね、自分のやりたくないことはやらないほうがいいんじゃないですか。人のことはどうだっていい。伊部純子さんというかたの書かれた『いいんだ朝子、そのままで』という本が径書房から出ているのですが、僕はあの言葉好きなんですよね。身障者のお子さんがいるお母さんが、一

生懸命健常者に近づけようとされてきた、それがあるとき、フツと、そのままでもいいんじゃないかと思われたという、あれはもうすごく大事なことだと思いますね。

自分自身であることをあるがままで受け入れていくこと、決して何かに変えようとしないうこと。つまり、教育とか学校とかいうものは自分自身以外のものに変えようとするのだけれども、それはもうほっといてくれと子供は言っていると僕は思いますよ。

それをアフリカの問題に引っかけると、それはそのまま虐殺された『遠い夜明け』の主人公スティーブ・ビコたちの合言葉なんです。それまで黒人たちは黒人であることをおびえていて、人間になるということは白人に近づくことだと思っていたし、そういう教育をうけてきた、それを、60年代後半から70年代中ごろにかけて、黒人意識運動を中心になって展開し、77年に、三十歳で殺されたスティーブ・ビコは「俺たちは黒人であることに居直って生きよう、人間になるということとは白人に近づくことじゃないんだ」と訴えたのです。あれは本当に肩の荷を軽くしたのでしょね。あれから黒人の子供たちは励まされたと思います。

国際社会というのは多様な人間の共存している社会だからいろいろな奴がいていいんじゃないかっていう、そのことが、日本の子供たちもまた救っていくんじゃないかと思います。

地球規模で支え合う時代

——西川 潤さんに聞く——

まとめ・ 稲 邑 恭 子



◆二重の貧困化

人類は、これまで、経済社会の発展は工業化によって進められると考えて工業化を推進してきたのだけれども、その結果、人間と自然との関係のバランスを大きく崩し、またそのことによって、一部の人間は空前の豊かな生活を享受してきたが、大部分は実は貧困化してきているという現状があります。この貧困化には二重の意味があって、一つは、生態系の破壊によって人間によって立つ基盤が破壊されているという問題、もう一つは、人間社会の間の関係が破壊され、人々が孤立化し貧困化するという問題です。

工業化は市場での交換行為を前提として成り立つのですが、市場での交換は全ての物を商品化する動きとして現われて来ました。人間の持っている生産手段を奪い、人間を商品にすることによって商品経済が発達してきた、それは言いか

えれば労働が賃労働化したということなのですが、他方では、商品市場では扱われないが、実は他者によって支配されるような非商品的な労働が作られてきます。これがいわゆるシャドーワークなのですが、賃労働社会が発達すると共に、シャドーワークや第三世界が近代社会を支えるものとして発達してきます。近代的な分業体制が発達するにつれて、他者から（人間からも、自然からも）収奪するのが当然という社会が出てきた、そういう仕組みの中で、自然の資源基盤がどんどん貧困化し、人間社会の中で貧困層がますます増えてくるのです。

◆分配の不平等

資源や食糧は絶対的に欠乏しているわけではありません。世界で十八億トンの穀物を生産していますから、一人が一年間生存するのに必要な食糧を百五十キロとすると、百億人以

上の人間を十分養えます。ところが地球人口が五十億になった今の時点で既に十億人ともいわれる膨大な飢えが存在しています。百億人を養える食糧があつて、五十億の人口のかなりの部分がなぜそのような状態なのかというと、それは食糧が公正に配分されていないからです。

一つには、豊かな社会になり肉食をするようになると、同じカロリーを取るのに、七、八倍もの穀物がいるようになる。北では、穀物の六割以上は家畜用、南でも一割がそうですが、そのような人間と家畜の間の分配関係の問題があります。

南の国も食糧を生産していないわけではない。非常に大きな農産物の輸出国なのですが、自分たちの食べない食糧や原料を輸出している。紅茶、コーヒ、綿花、ジュート、砂糖もそうですね、商品作物のために膨大な耕地が使われていて、肝心の人間の生存を支えるための食糧は生産しない、そういう分配関係がまた、ありますね。

もう一つは、豊かな人がどんどん豊かになり土地を集中する一方で、土地を持たない人が増えている。いま、発展途上国で、土地無し農民は三人に二人ですが、二十年後には、四人に三人になると言われています。こうした土地の不平等も加わって、膨大な人が飢えているわけです。

◆消え行く熱帯雨林

日本の耕地の二倍くらいの熱帯雨林が年々消えています。

一時、石油や鉱物などの枯渇性資源がなくなるのではと騒がれましたが、それよりも、再生可能なはずの、森林、魚、水などの非枯渇性資源の破壊のほうが問題です。熱帯雨林地域は貴重な生物種の宝庫なのですが、これを人間は破壊することによって、自分たちのよって立つ基盤を崩し自らを貧困化していくのです。

一番多い原因が焼き畑農業。森林を焼き払い、そのわずかな肥料成分で耕作を営む。結局、これも商品耕作のためが多いので、先進国との関係の中で見ていく必要があるでしょう。

もう一つは、森林伐採。これは、自分たちで使う分も輸出用もある。先進国に輸出する分は、やはり、樹齢二百年や三百年の立派な大木で、それを輸出するときに林道をつける、するとそれを通して、いろいろな人が中小木を伐採していく。最近では、東南アジアでも原木の輸出は禁じられるようになってきたので、合板の輸出が多くなっています。合板はチップにして作るので、以前は大きい木を切り倒していたのが、中小木を切り倒すようになった。ですから、先進国の商社などが大きな木を切り倒し、その後を地元の中小業者が合板を作るために伐採、最後に、貧しい人たちが、燃料にするために採る、という過程を経て森林がなくなっていくままです。

光合成作用は森林がため込んでいた水分を空中に発散させることによって同時に水の循環を保障する作用でもあるわけ

です。森林を伐採すると水を貯める機能がなくなり、雨が降ると土壌を洗い流してしまします。一センチの土壌を作るのに二百年かかるのが、一瞬の豪雨で洗い流され砂漠化してしまふ。ですから、発展途上国で非常に洪水と干魃が多いのは、森林が消失していることの一つの表現です。

もう一つは、光合成作用が出来なくなるので空気中の二酸化炭素が増えるということ。石油や石炭を燃やすことによって膨大に増える二酸化炭素が、本来ならそれを吸収するはずの森林がなくなっているので空气中に蓄積し、温室作用をもたらし、地球の温暖化を推進しているのではないかという懸念が非常にあります。二十一世紀になると、おそらく両極地帯の温度が十度ぐらいい上がり、氷が溶け出し、低地地方は水浸しになるだろうと、太平洋のいくつかの島では、その事態を見越して、生き残る道を真剣に議論しているのです。

このように、二酸化炭素の増大による温室作用という形で地球の環境は激変しています。工業化の作用によって、空气中にいろいろな重金属が蓄積し、酸性雨があちこちで発生、ヨーロッパでは森林の半分が酸性雨で枯死しました。このように、地球の資源がどんどん破壊されていくというのは明らかなのですが、これはわずかに人類の五分の一が豊かな生活に到達した段階で出てきたもののなのです。後の五分の四もみんなそれに追いつきたい、工業化に必死です。ですから、今の

資源の分配は二つの矛盾を抱えています。

◆空間的・時間的資源の分配の不均衡

一つは、空間的不均衡。日本などは膨大な量のエネルギーの輸入によって自らの消費を賄っていますが、一方、貧しい国々は、自分たちの生産したエネルギーを利用したいが出来ないので輸出し、それを元手に、将来工業化を進めようと考えています。みんな日本に追いつきたい、ところが、みんなが日本や米国なみの生活を追求しようとしたらいったいどうなるのか、地球環境がさらに悪化するのを目に見えています。

これは空間的な資源の不均衡の問題ですが、もう一つ、時間的な資源の不均衡問題があります。それはどういうことかという、われわれは「開発」に熱中していて、どんどん資源基盤を破壊している、たとえばメキシコは年間百億ドルの債務を返しているわけけれどもそれは石油の生産高に等しいのです。つまり自分の石油資源を掘り崩しながら借金を返している。これはメキシコに限らず世界的に言えることで、われわれは、今の繁栄の維持のために資源のストックを壊しながら将来の世代にツケを回しているのです。

原子力発電もそうです。一KW時十三円だから石油から出る電力の十六円より安い、という議論が出るのだけれども、その場合、廃棄物をどうするかという問題は入って来ない。原子力発電所は三、四十年で解体しますから、日本で第一号

の東海原子力発電所はそろそろ解体になりますが、それをどこに捨てるのか。言いかえれば、人類は処理の出来ないものをどんどん抱え込んでいるということなんです。それにも関わらずわれわれは原子力発電所を作っていて、そのコストを子供や孫たちの世代に押し付けている。つまり、今の豊かさというものは、いま言ったような、空間的、時間的な資源の分配の不均衡性に支えられているのです。

◆日本の農業

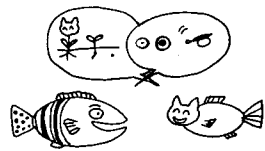
われわれが常に効率を求め、安い食糧を安い食糧をと追求する結果どういうことになるかというと、発展途上国で膨大な農業と安い労働力を使って生産されてきたものが、先進国に戻ってきているのですね。今、一番問題になっているのは、どの国でも、自分の国の農業の使用は規制しているが、外国に輸出する分、外国に投資してそこで作っているものに対しては国内では規制していないということです。だから、農業のブーメラン効果といわれる、国内では禁じられているような農業が先進国の多国籍企業によって海外で使われ、それが農産物にとり込まれて先進国にまた戻って来るといふ問題が出てきます。日本の農業はヘクタール当り世界でも莫大な農業を使っています。米の生産でいうと、ヘクタール当り五、六トンの生産高を上げるために、肥料を六百キロ投入し、農業を百キロ使っている。これはヨーロッパの五、六倍、アメリカ

カの十倍ぐらいの水準です。何でもこんなに使うかと言うと、それは結局、温室農業と兼業農業、手間をかけない農業だから。農協が時間を決め一律に農業を撤く、温室で作られた野菜が一年中食卓を賑わすが、われわれはそれに対して膨大なコストを払っている。投入財を多く使う型の農業になっているので、コストからいえば輸入品に太刀打ちできない。しかし、もし日本の農業が国民にとって安心な農業として発達すれば、自由化も実は全然恐れることはないのです。

農業が地域で発展していけば、農業も保存剤もいらない。地域産業を立て直すことによって、われわれが工業社会と共に作り上げてきた分業体制を見直すことができます。実は、それと共に初めて男女共同参加型の社会が可能になるのです。工業社会の中で女性の参加を謳っても、女性が工業社会の戦力として使われるだけで、その結果、新たな女性の間の差別をつくりだしていく。そうした工業社会の仕組みそのものを問い直していくことが必要です。そのためには、地域を中心とした利潤追求型でないような社会を作っていくということが、今までの近代工業社会に対するオルタナティブとなる。人間と自然のバランスを考えるゆとりのある社会で、男女の真の平等の条件が出来る。それは農業再建の道、環境保全の道であり、現代社会におけるさまざまな不均衡を解消していく道でもあるのです。(にしかわ・じゅん・早稲田大学)

「開発」と「援助」をめぐるって

北沢 洋子



「発展」途上国に対する援助が始まったのは三十年前の一六〇年であった。それ以前の援助は、ヨーロッパや日本の戦後復興に向けられていた。

途上国とは、地理的に、アジア、アフリカ、ラテンアメリカの三つの大陸を指すが、私は政治的な意味をこめて、「第三世界」と呼びたい。途上国は、長い間、ヨーロッパをはじめ、アメリカ、日本の植民地・従属国であった。第二次大戦後、これら植民地はやつと独立し始めたが、経済的には植民地時代と変わらない原料（一次産品）の輸出国、工業製品の輸入国である状態が続いた。

つまり、新しく独立した国々には、植民地時代のように、資源や人を暴力で奪われたりすることそなくなつたが、綿花、ゴム、砂糖、ボーキサイト、錫など、彼らの輸出している一次産品は安く、先進工業国から買う工業製品は高い。と

りも直さず、貿易という合法的な商行為を通して、途上国から先進工業国に富が流れるという仕組みになっているのである。途上国が地球の南側に位置し、先進工業国が北側ということから、これを「南北問題」と呼んでいる。

一九六〇年、最後の植民地大陸であったアフリカの大量独立が始まった。この年、国連は、「開発の十年」を設定した。十年間に、先進工業国が途上国の工業化を援助して、南北の格差をなくそうというものであった。ところが、十年たつても、南北格差は縮まらないどころか逆に開いてしまった。つまり、一九六〇年代、日本、西ドイツをはじめとして、工業先進国は高度成長を遂げ、その反面、インフレは進行し、工業製品は値上りした。一方、この間、石油を例外として、一次産品は大幅に値下りしたからであった。

これは、国連の「開発十年」計画に沿って、先進工業国が

途上国援助を始め、一方では、一九六〇年、パリに独自に「先進国クラブ」と呼ばれる経済協力開発機構（OECD）を設けて、途上国への政府開発援助（ODA）を供与し始めたにもかかわらずに、である。さらに、一九六四年には、ジュネーブで国連貿易開発会議（UNCTAD）が開かれた。ここでは、南北問題の解決のための処方箋として、一次産品の価格の安定、債務処理とともに、開発援助が三つの柱の一つとしてとりあげられた。

しかし、援助は解決の武器にはならなかったし、途上国にたまる一方の貿易赤字を解消することさえできなかった。その上、工業化するには、外国企業の投資に依存するのだが、そのためには、道路、ダム、発電所、港湾などの産業基盤の整備をしなければならず、そのための資金を、先進工業国からの政府開発援助に仰がねばならなかった。

この期間の援助は、低利だが有償が多かった。したがって、援助を受ければ受けるほど、返済する額も多くなる。ところが、産業基盤への投資はすぐに利益を生むものではないので、返済は思うままにならず、途上国の借金は増える一方であった。

やがて、一九七三年秋の石油ショック以降、先進工業国の高度成長期が終り、工業投資の伸びが鈍り始めた。その結果、国内での投資先を失った資金が国外に向かい、同時に、

石油ドルで潤った産油国も、西側の銀行に預金した。先進工業国の銀行は、このだぶついた資金を第三世界に貸し始めたのである。この場合は高利であった。国連貿易開発会議の事務局が調べたところでは、一九七七年当時、ロンドンの銀行間レートに一・一五%を上乗せした、十六%平均の金利。これに、この期間、途上国が輸出している一次産品の値下り分を加えると、約三十三%の高金利となり、元利合わせると三年で二倍の債務となった。今日巨額の累積債務を抱えている国が、資源が豊富な国や工業化がある程度進んだ国に集中しているのは、以上述べたような経緯による。そして信じられないことだが、この高利の銀行融資も、資本投資も、広い意味での経済協力に入っているのである。

一九七〇年代には、政府開発援助（ODA）の中身について、OECDなどでさまざまな国際的取り決めが行なわれた。たとえば、最終的にはODAの全額無償をめざし、この無償分（グラント・エレメント）をできるだけ多くするように努力すること、借款を供与する場合、自国の機械の購入を義務づけるといった「ひも」をつけてはいけないことなどが決まった。さらに、最も貧しい国に対し優先的に行なうことも了解事項となった。最も貧しい国とは、GNPが一人当たり百ドル以下で、当時、途上国人口の六割近くがこれに入っていた。

日本は援助に関しては後進国であった。まず、OECDに加盟したのが、設立四年後の一九六四年であった。さらに、日本の援助は、戦争賠償の延長、または肩代わりとして出発したという特別な経緯がある。しかも、この賠償支払いも、敗戦国が相手に戦争で与えた損害を償うべきもののなのに、逆に、日本の古い機械や船舶を税金を使ってアジアにはき捨てるために使われたといってもおかしくないほどだった。また一九六五年の日韓条約では、日本は賠償を支払う代わりに無償、有償の経済援助を約束した。インドネシアの例では、あまりにも賠償金が賄賂に使われたため、工事が完成できなかったもので、それを援助で尻ぬぐいをしたことさえある。

日本の援助は賠償の延長としてスタートしたところから、旧大東亜共栄圏に集中しているが、もう一つの特徴は、輸出や投資の地ならしに使われている点である。その仕組みは次のようになっていく。まず、現地には、援助のプロジェクトを立案するエンジニアリング会社のスタッフが日本から常駐していて、彼らは、日本企業が工場を建てる場合何が必要かを考え、ダム、道路などの青写真と見積り書を作成する。現地政府はこれを単純に集計し、その年の総額を出し、日本政府に要請する。大統領の訪日や日本の首相の訪問といったセレモニーを利用して、〇〇国にたいする〇〇の円借款は〇〇億円、などと発表されると、直ちに、日本の業者が現地でそ

のODA資金を使ったプロジェクトの建設にとりかかる。つまり、ODAは日本の企業進出の地ならしとして使われ、同時に日本の建設業者の利益となるのである。

私が調べた、インドネシアのアサハン・アルミ精錬工場の例を挙げよう。アサハンはスマトラ島に流れる水量の豊富な川である。この川下に、日本のアルミ精錬五社が一九七〇年代半ば工場進出することになった。石油ショックで電力のコストが昇り、国内では採算がとれなくなったためである。これは日本の民間投資であったが、日本政府が、そのために必要な発電所を無償でアサハン川に建設することになった。また精錬工場の建設資金の八十％以上を日本の政府資金の融資で賄うことになった。このように日本政府のODAが大量にこのプロジェクトに使われているが、すべて、民間のアルミ精錬会社とアルミの加工業者のビジネスのために使われる。一方、スマトラの農業開発は遅れていて、特に灌漑用の電力が不足しているのである。私はODAがアサハン川の電力開発に使われるのなら、その大部分は農業開発に充てられるべきだと思うが、実際にはそうっていない。

このような例は、いくらでも挙げることができる。最近の例では、フィリピンのパラワン島に日本はODA資金でワニ園を建設した。ところがこれは、フィリピンの政府の高官の強引な誘致工作で決まったのであって、ワニの養殖には適地

ではなく、したがってワニ園は放置されたままで、ODAはムダに使われてしまった。そもそもこれは、天然のワニの捕獲がワシントン条約で禁止されているため、最大のワニ皮の消費国である日本の業者が、フィリピンで繁殖して輸入しようとしたプロジェクトであった。日本人はカネ余りで高価なワニ皮のハンドバッグの需要があり、フィリピンは外貨稼ぎのためにワニ園を設けたいのだが、問題は、広大なワニ園建設のために土地を追われた現地の農民、それに食糧不足で苦しんでいる人びとである。日本のODAはこういう人びとの最低生活を保障するために役立たせなければならないのに、ここでも儲かるのは日本の業者、現地の役人、そしてワニ皮のハンドバッグを買い取る日本人である。

日本のODAは、二年前、アメリカを抜いて世界一の額となった。その理由は、円高になってドル換算すると二倍になったということと、一方では政府が防衛費と並びODAを聖域扱いしてひたすら増やしたからである。年間一兆四千億円という巨額の資金が、私たちの税金・郵便貯金・厚生年金などから支出されているにもかかわらず、誰もチェックすることができない仕組みになっている。一つのプロジェクトにいくら使われ、どの業者がいくらで請負っているかさえ知ることができない。政府が企業秘密と相手国に対する内政干渉をタテにとって明らかにしないからであり、私たちが監視の目

を厳しくしなければならぬことはいうまでもない。

では私たちに何ができるだろうか。ここに、インドのボンベイの路上生活者の間で活動している若いインド女性の話がある。路上生活者の最大の問題は今晩寝る所と仕事だが、女性の場合はこれに朝のトイレがあると語った彼女は、女性たちと共同で簡易トイレを設計し、モデルを試作した。やがて組織した女性グループが自力で製作していくことになったとき、彼女たちに資金を提供したのはオランダの女性グループで、必要な資金はわずか年間二十万円だったという。

オランダはインドに利権はない。ましてやオランダの女性たちとインドの路上生活者の女性との間に接点はない。オランダは日本と同じく国土が狭く、資源のない国である。にもかかわらず、遠いボンベイの路上生活者の女性という社会の最底辺の人びとの悩みを理解し、これを草の根から援助している。世界一といわれる日本政府のODAが人びとを逆に苦しめているのに比べて、いかにささやかな寄附金でどんなに役に立っていることだろう。

私たちが援助について考えるとき、まず第三世界の人びとの苦しみを知り、同時に、その苦しみを克服し自力で自立のために努力している人びとと連帯するところから出発すべきであろう。

(きたざわ ようこ・国際問題評論家)

〈内国植民地〉北海道の住民から

見たアイヌ報道

蓮池 悦子

一九八九年五月二十八日（日）、「平成元年度 社団法人北海道ウタリ協会総会」が札幌市で開かれました。

北海道ウタリ協会の性格は「会員の向上発展と福利厚生を目的として」定款に定められた事業を行う、いわば北海道や国のアイヌ対策の受け皿的機能をはたしている〈福祉団体〉です。社団法人であっても会員は世帯加入で、一九八九年四月一日現在、三、九二三世帯、一五、五二八人。会員の資格は、定款により、「ウタリまたはその家族」となっています。〈ウタリ〉とはアイヌ語で、本来文脈によつて〈同胞、仲間、親類、くたち、くども〉などの意味を持つ言葉ですが、〈アイヌ〉が差別的語感をもつて使われるという理由から、協会名を〈ウタリ〉に変更した経緯があります。訳せば〈同胞協会〉ということになるわけですが、いかにも〈福祉団体〉らしい名称ではありません。

ニホン国は、北海道の土地をあらかた〈拓殖〉しつつした後の一八九九（明治三十二）年に、「北海道旧土人保護法」を制定し、今日いうところの〈アイヌ福祉対策〉を行ってきました。農耕民から見れば、土地を与え、種子や農具を貸し与え、学校を作つてやったわけですが、狩猟・漁労の民から見れば、農耕不適地に縛りつけられ、農業以外の職業への福祉政策は皆無、学校教育は皇民化教育に他ならず、コタン（集落）は、ニホンの行政区画に組み込まれ、固有の言語・文化・経済活動は禁止されたわけでした。この「北海道旧土人保護法」は、その後幾度か改定されたものの、戦後のどさくさに顧みられることなく今日まで存続しています。一度全国市町村長会議で廃止決議がなされたこともあるのですが、北海道ウタリ協会の総会では〈アイヌ福祉予算要求〉の拠り所として、むしろ存続派が多数でした。

「民族意識」が高揚していた一九七三年の総会では、協会名を戦後発足した当初の「アイヌ協会」にせよと若手から激しいつきあがりがあったが、翌年の総会で否決され、現在まで改称には至っていません。今日、「アイヌ」は民族名として安易に使われています。「アイヌ」とは、アイヌ語で、本来文脈によって、〈人、男、父〉などを意味する言葉です。

北海道ウタリ協会は、一九八四年の総会で、「旧土人保護法」に代わる「アイヌ新法（仮称）」制定を決議し、ニホン国政府にアイヌを民族として認めよという要求をつきつけ、理事長や幹部などが国連の関連機関に出席して世界にアピールしたり、道民や国民のコンセンサスを得るために講演会などを開いたり、政府や政党への陳情運動を展開したりしています。しかし、ニホン国政府外務省は、いまだ「文化・宗教・言語・習俗の保有については、憲法の下において、すべての国民に平等に認められている」として、国内におけるアイヌの存在は認めるが「ニホン国内の少数民族」とは公式に認めていません。今年度のウ協会総会の席上、会場の代議員から新法制定推進強化策を問われた理事長は、「現時点では、責任政党である自民党に的をしぼらざるを得ない」と答えました。しかし、昨年十月の陳情における自民党の回答を見ると、文部大臣経験者の某衆議院議員は「文部大臣時代に初めてアイヌ問題を知ったが、旧土人保護法というような差別法が存

在していることは知らなかった」のであり、前北海道開発庁政務次官で北海道選出某参議院議員は「正直いって、私もアイヌ問題はよく知らない」と答えているありさまです。

一九八九年九月二十二日の自民党全国研修会で、中曽根元首相が「単一民族国家の日本には、米国のように黒人やヒスパニック系の知的水準云々」と差別発言して、内外のジャーナリズムにたたかれ、アイヌからの抗議行動も新聞紙上に取り上げられたはずなのに、今年三月十四日、外務省の古川駐道大使が、北方四島を臨む国境の町根室市で、またまた「日本は単一民族国家なり」の発言をして、ウ協会の抗議を受け、当時の宇野外務大臣が「外務大臣として発言を撤回し、陳謝する」との回答を寄せる騒ぎがあったばかりでした。

これまで国会や道議会で国や道のアイヌに対する見解を引き出したのは野党議員の質問によってでした。ちなみに、アイヌ新法制定問題については、昨年八月、北海道知事・道議会・北海道ウタリ協会の三者が一体となって政府に陳情しています。目新しい動きも見られません。

先住民族の権利主張は世界の趨勢ですが、これによって「民族」の定義を見直さなければならなくなりました。いま手元にある三省堂『大辞林』の「みんぞく」の項を引いてみると、ニホン語で普通使う「民族」の意味は「言語・文化を共有する人間の集団」となっています。

これをニホン国〈アイヌ〉にあてはめて見ると、確かにニホン人（アイヌからいえば和人、アイヌ語でいえばシサム、軽蔑の意をこめればシャモ）がアイヌ社会を侵略征服し、崩壊させるまでは、固有の「言語・文化を共有する」社会が存在しました（歴史的にどの段階を「固有の社会」と想定するかは議論のあるところですが、少なくとも前近代であることは確かでしょう）。

しかし、北海道の〈拓殖・開拓〉の成功は、とりもなおさずアイヌのニホン化成功つまり同化政策の成功を意味したことは、いまだ述べざるまでもありません。ですから、最新の国語辞書で定義するところの、固有の「言語・文化を共有する人間集団」である〈アイヌ民族社会〉は現在存在しないことになってしまいました。言葉を換えれば〈アイヌ〉であるという帰属意識は存在していても、〈民族〉として成り立つべき、その集団が文化・言語・生産活動を存続でき得る固有の社会および自然環境が存在していません（長らく部族社会を形成し、基本的には自給自足経済と交易を生産基盤にしていたアイヌ社会における民族意識成立の歴史的社会的過程については、当面触れないことにします）。

ですから、〈アイヌ民族〉が〈民族〉として存在するためには、〈文化・言語・生産活動を存続でき得る固有の社会および自然環境〉＝領土権の主張、つまり独立あるいは自治圏

獲得へ運動の方向が向かわなければならぬはずですが、現在のウ協会は、あくまでアイヌはニホン国の国民であることを前提として、ニホン国の社会・経済・文化は受け入れたまま、〈少数民族〉としての存在を公式に認めさせ、〈先住民〉としての特権を「アイヌ新法」によって獲得しようという運動を展開しているのです。

そうした矛盾は〈内国植民地〉（注・国外領土ではなく、国内にいまだ存在する植民地を意味する筆者の造語）北海道住民のコンセンサスを得られないひとつの理由となるでしょう。アッテンボロー監督の『遠い夜明け』で、家族も生命の危機にさらされるのを覚悟して政府の政策に反対の論陣を張った正義感あふれる新聞記者の妻が、その結果国を脱出せざるを得なくなったときの科白「私はもちろん南ア政府のアパルトヘイト政策には反対だわ。でも私や家族にとってはここは故郷なのよ。何代も前から、私の祖父母や曾祖父母もこの国で生まれて死んでいったのよ」は、内国植民地北海道の住民にとってはひとつではないのです。

また、〈アイヌ対策費〉つまり総会で事業報告された費用のほとんどが、自分たちの税金から支出されていることを意識している住民、とくに生活の場でアイヌとしての帰属意識を持った人たちと隣人付き合い合っている地域の、累進課税の矛盾をモロに実感しながら額に汗して働いている自営業者に

とっては、先人が冒した過去のツケをなぜ今自分たちが払わなければならないか納得できないところです。

「民族」の定義が曖昧なままに、「アイヌ民族」という言葉が使われていますが、その多くは、社会的構造的存在としての「アイヌ」ではなく、遺伝的・形質人類学的な「アイヌ」つまり「血」を指しているか社会抜きの言語・文化・習俗といった文化要素に基づく「アイヌ」として語られています。

歴史的に古くから和人社会と接していたアイヌは、和人の混血過程のどこかで和人社会とその文化を選択したとしたら、その時点で「アイヌ」が消え「和人」として存続してしまいます。だから今日、たとえば一口にアイヌ人口といっても、遺伝的、文化的、社会的な意味での「アイヌ」人口とは違う状況にあるのです。

冒頭で述べたウタリ協会会員の数の中には、遺伝的には和人の配偶者も入っていますし、会員としての資格を「支部および支部連合会を経て理事長に承認された」和人カッパルの家族も入っています。行政上の必要から北海道が調査発表した約二万五千人という数字もありますが、これは「本人および周囲の人たちが遺伝的に「アイヌ」と認めている」人の限定された地域における目安の数にすぎません。

以上のような観点から多面的に捉えてみると、新聞やテレビで報道されるアイヌ関係の記事や番組構成が、いかに一方

的あるいは一面的であるかが見えてきます。一部の有名コメントーターの意見が必ずしも「アイヌ」の総意ではありません。その人自身もその家族もハイテク時代の恩恵を十分被った経済生活を営んでいるのです。ウ協会理事・監事二十九名のうち十数人は、その地域の資産家と目されており、中には年間億単位のお金を動かしている事業家もいますし、また、「福祉の世話になる必要はない」あるいは「体質に賛同できない」という理由で、協会に加入しない人々もたくさんいます。

アイヌ報道に接したとき、今ある「自分」を報道されている対象に置き換えて判断すればいいのです。ジャーナリストなどが持っているデータも間接的に主観的なものであることを十分踏まえた上で、批判力を養っていくことが、ニホンに住む「地球市民」の共働努力ではないかと思っています。

また、これからアイヌに言及するジャーナリストや学者のかたには、少なくともウタリ協会が一九八八年と八九年に刊行している『アイヌ史 資料編1・2・4』（A5判、一、一〇〇〜一、三六〇ページ、定価九、〇〇〇〜一二、〇〇〇円）、特に4の新聞記事資料目録には目を通し、八八年から毎年一冊ずつ刊行している『アイヌ年誌』（B5判、二〇〇頁前後、定価二、〇〇〇円、同刊行会発行）で前年のアイヌの動静を踏まえた上で発言していただきたいと願っています。

（はすいけ えつこ・ユウカラ翻訳者）

授業 「国際結婚を考える」

大津 和子



ヒトの国際化

最近、海外に出かける日本人が増えたが、逆に日本にやってくる外国人も多くなった。とりわけここ二三年、新聞紙上をにぎわしているのが、アジアからの労働者と花嫁である。就職機会の乏しい地域から、よりよい条件を求めて移動するのは自然のなりゆきであり、ヨーロッパやアメリカでは、すでに多くの労働者が国境を越えている。たとえば、この移動が受け入れ国でいくつもの問題をひきおこすとしても、完全に移動を阻止することは難しい。国際化時代に、モノの移動だけでなくヒトの移動もまた活発になることは、むしろ必然であろう。

しかし、「経済大国日本」は今のところ、単純労働者の受

け入れを排除している。外国人労働者の排除を積極的に支持している労働組合もある。日本の労働問題の深刻化を避けるために、外国人労働者は排除されるべきなのか。それとも、地球的視野に立って受け入れるべきなのか。どのような条件のもとで受け入れるべきなのか。

結婚となると、問題はさらに複雑になる。「国際結婚」は国際化時代の流れにそうものであり、「見合い結婚」は日本に古くからある結婚のスタイルで、今日なお結婚仲介業は盛んである。けれども、個人的な幸福を求めて、日本人男性と「国際見合い結婚」をするアジアの女性が増えていることは、喜ばしいことなのか、どうか。

このような問題を、どう考えればいいのか。私たち日本人は、これらのアジアからやってくる人々をどのように受けと

め、どのように付き合っていこうとしているのか。

まず、私自身がいくつものわからなさを残していた。そこで、新聞や雑誌などから情報を集め、市民集会にも出かけていき、アジアからの花嫁をはじめ、この問題にかかわっている人たちから直接実情を聞いた。

こうした経過を経て、「アジアからの花嫁たち」を題材とした、次のような授業をつくってみた。

増える国際結婚

日本人の国際結婚は長い間、夫が外国人で妻が日本人というカップルが主流であったが、一九七〇年代半ばに逆転し、夫が日本人で妻が外国人というカップルが主流になった。そして、その数は一九八〇年代になって急激に増えはじめた。外国から妻を迎える日本人男性が増えてきた、ということである。

花嫁は、どこの国からやってくるのだろうか。

嫁はどこから？

ヒントは、国際結婚斡旋の広告。こうした広告が男性週刊誌だけでなく、一般の新聞やNTT電話帳にも登場するようになった。「田舎も町も結婚難、男洪水、嫁ひでり」、そこで「結婚難男性」に、「大和撫子の心根の純情な花嫁さん

国 際 結 婚

★これで、よいのか皆の衆!!

田舎も町も結婚難、男洪水、嫁ひでり、お嫁来なけりやお家が絶える、先祖供養は誰がする？

★憂い給うなご同輩!!

男だったら、未婚をすてろ、親がかり純国根性じゃもう夜は明けぬ、ぐずぐずするな明日では遅い、世界は広いぞ国際時代、潮の向うに夢がある、親に孝、優し娘、君を待つ。

★輝く21世紀、君の人生を拓く者は誰か!!

それは、失礼ながら、御両親でも親戚でもない。唯一人勇気ある君自身しかない。
I. B. A国際は10年の実績を踏まえて今こそ勇気ある男だけに、そのラストチャンスをお贈りしたい。サア！共に々々頑張ろう、花嫁獲得。

結婚難男性に大朗報!!

★身元確実、特に昔の大和撫子の心根の純情な花嫁さんを、短期間で確実にお世話しています。サア、時は今！迷わず安心して、おまかせ下さい。

★資格条件…身長・学歴・職業一切不問(生活力あり誠実な方)

★三	★三	★三	★三	★三	★三
大特	1. 略、全無成婚	★費用	★礼	★国	150万円
長	2. 良心的低コスト	★台	★台	★台	170万円
	3. アフターケア充実				190万円

国際 協会 ☎(03)

所長

新橋駅 6 分

短期間で確実に「お世話」するものである。

いまどきの「大和撫子」は、日本ではなく「海の方こう」にいるらしい。費用は、韓国一五〇万円、フィリピン一七〇万円、台湾一九〇万円。日本国内の結婚費用の平均が六五〇万円だから、これは格安である。男性の資格条件は、「身長・学歴・職業一切不問」。

いったいどのような女性が花嫁になるのだろうか。

花嫁の条件

フィリピン女性を選ぶ場合の必要条件の中に、次のような項目がある（徳島県東祖谷山村国際友好協会の場合）。

a ハイスクールを卒業していること。

（英語が話せる。中流家庭である。教養がある）

b 国外に出たこともマニラで仕事をしたこともない。

（売春婦でないことの証拠）

c 年齢は十八〜二十五歳くらいまでの女性であること。

（素直で順応性が高く日本語を覚えるのも早い）

d 結婚後仕送りの必要が一切ない女性。

日本人男性に対しては、精神異常者やアルコール中毒患者でないこと、暴力団に関係していないこと、無職でないこと、などが要求されているにすぎない。日本国内での見合い結婚であれば、必ず問われる職業・収入・学歴・身長などは、一

切問われない。

花嫁の厳しい条件とは対照的に、花婿の条件はまるで条件ともいえないようなものである。それにもかかわらず、なぜ花嫁志願者が多いのか。彼女たちはどのようなプロセスを経て、日本にやってくるのだろうか。

見合いから結婚まで

海外に出かけた日本人と個人的に知り合って、結婚して来日したというケースもあるが、近年増えているのが見合い結婚である。

長野県上田市の国際結婚斡旋業者は、スリランカ女性との見合いを次のようにならしている。日本人男性五人が待つ応接室に、九人の花嫁候補者が入ってきて、窓を背に横一列にならぶ。「いいですか。左からナンバーワンの娘が二十三歳、ツーの娘が二十五歳……」と、業者がナンバーと年齢を紹介する。男性たちが気に入った女性のナンバーを指名し、あとで業者を介して一対一の面談をする。女性がOKすれば結婚が成立、ということになる。

山形県大蔵村の男性五人の場合は、フィリピンに着いたその日に集団見合いをし、選んだ女性と翌日に通訳付きデート、翌々日に家族と会い、四日目に結婚式を挙げた。

見合いから結婚までの期間が非常に短く、日本人男性のほ

うに選択権がある。

日本男性の結婚難

いま、農村とりわけ過疎農村では、男性の結婚難が深刻である。徳島県東祖谷山村では、二十五〜三十九歳の独身男性百二十人に対して、独身女性は三十一人（八九年四月現在、役場調べ）、他の過疎農村でも似たような男女比である。若い人たちが都会へ流出し、農家の後継ぎが村に残っても、農家に嫁入りする女性が少なくなってきた。このままでは村の存亡にかかわる、という危機感さえある。「お嫁来なけりやお家が絶える、先祖供養は誰がする？」という先の広告は、まさにこの点についている。

しかし、アジアからの花嫁を求める男性は都市部でも増えつつある。日本で最近、非婚の女性がわずかながら増えているのに対し、男性は相変わらず結婚願望が強く、あるいは結婚しないでは生活していけないという意識に囚われているあらわれであろうか。

国際結婚の背後にあるもの

結婚とはきわめてプライベートなものであり、その動機やプロセスがどうであれ、他人がとやかく言う筋あいものではないだろう。「苦労は多いけれどもいまは幸せ」というアジア

人女性もいるし、「生活習慣や言葉の違い、夫の暴力などでトラブルが絶えず、生活に絶望した」女性もいる。「年老いた親の面倒を見、農家存続のために子供を産む。日本女性が行きたがらないからアジアの女性を、というのは納得できない」という批判も聞こえてくる。国際結婚を機に人生観が変わり、将来はフィリピンで商売をしようと考えている男性もいる。結婚とくに国際結婚の背後には社会的な要因が強く働いている。なぜ、日本の女性が農村に嫁入りするのを嫌うのか。なぜ、アジア人女性が日本に嫁いでくるのか。結婚のありようを通して、日本の農村と都市、アジアと日本の「二重構造」が見えてくる。

高校「現代社会」の授業では、国際結婚に関する統計資料を用い、花嫁・花婿・国際結婚斡旋業者・過疎農村の自治体・フィリピンの世論など、立場の異なる多様な考え方を知った上で、ディスカッションを通じて各自の思考を深め、価値観を成長させることをねらいとしている。

「自立した女と男を 人間らしい生活を 差別のない社会を 育み 創りだす」新しい家庭科では、国際結婚は教材としてどのように料理される（されている）のであろうか。

参考文献 宿谷京子「アジアから来た花嫁」明石書店

一九八八年

（おおつ かずこ・兵庫県立東灘高校社会科教師）

発

言

私たちのフィリピン連帯は、

一枚のカードから

吉田 和子



フィリピンの底辺民衆と連帯する会を発足させて二年。名
称を「フィリピン強制移住区三地区支援草の根貿易の会」と
いう。活動の中身は読んで字のごとくだが、会の名をたずね
られる機会が多くなると、言いにくい名前を付けたものだ
と後悔する。最近「草の根貿易の会」と略すようにしている。
私たちは、マニラのスラムから山間僻地に強制移住させられ
た人々が手作りする、グリーティング・カードや手芸作品を
日本に紹介し販売している。

私たちは、八七年三月初めて訪ねたフィリピンで、強制移
住区の人々と出会った。部落問題を自らの課題として取り組
んできたので、底辺民衆に対する思いは強い。飢餓のニュー
スが度々伝えられるフィリピンの厳しい現状をこの目で確か
め、今日を生きるために頑張っている人たちの姿を、過去の

私たちの生活と重ねて憤りを覚えた。彼らは自分を養うこと
さえ困難な状況の中で、仲間の米びつを気遣い、共に生きる
共同体を作ろうとしていた。力をあわせて自立のための試み
に挑戦していた。それが刺しゅうや押し花をあしらったカー
ドだった。私たちは、彼らの熱意につき動かされて、日本で
彼らの作品を紹介・販売する会を発足させた。

首都マニラのスラムは、農村で食べられない人々が流れこ
んで形成されている。土地制度に問題があり、一部のフィリ
ピン人に農地が独占されていて、米国の食糧戦略のもとにア
グリビジネスが暗躍し、他国のテザート生産に大半の土地を
奪われている。バナナに代表されるモノ・カルチャーは、機
械化農業で、農民の土地を奪うだけでなく職をも取り上げて
しまう。六千万人の国で七百万人がマニラに集中するという

状況の背景は土地問題だ。

職もなく住居もない民衆は、遅く生きるために格闘している。ゴミの山で再生可能な金属等を拾い集め、路上に飲食店を出し、行き交う車を縫うようにして新聞やたばこを売り歩く。空き地を見つけては廃材で小屋をつくり、川岸や海岸までが居住地となる。マニラでは、スラム住民はスクアッター（不法占拠者）と呼ばれている。

マルコス時代からすすめられてきた政府の都市美化対策は、スラム解体がねらいである。土地制度の不平等や失業者の救済などの課題はそっちのけで、首都の美観を回復するという低次元な発想である。でも、やることはすさまじく、武力で住民を脅し強制移住区に追いやる。ブルドーザーが人の住処を壊し、トラックが住民を乗せて走り去る。

強制移住区のほとんどは、マニラから数時間もの辺鄙な所で、電気や水道なども備わっていない。もちろん働く場所などない。わたしたちが案内された所では、ただトイレだけが作られていて、「トイレット・ビレッジだ」と紹介されあきれた。水道もないのにトイレだけが設備されていたからだ。

日本政府の援助で建てられた近代的なビルが、マニラ湾沿いに並んでいる。その周辺には、ストリートチルドレンと呼ばれ路上生活する子どもたちがたくさんいる。彼らは生活を背負ってたばこやガムや飴玉を売り歩く。交差点で車が止ま

る度に、窓越しに少年の疲れた顔とやせ細った腕を見せつけられ、日本政府の援助はいったい誰のためのものかと考えさせられる。開発や援助の実態は日本の建設会社が仕事を請け負い、利益は日本とフィリピンの特権階層に転がり込む仕組みで、援助が必要な民衆には届かない。

私たちは、こうした実態を目の当たりにして、今必要なのは援助ではなく、民衆同士の「連帯」だと考えた。一枚のカードを通してフィリピンと日本を考えようと思った。五枚のカードを買取る事で、生産者は一匁の米を買える。産地直送の「草の根貿易」は、民衆の手から手へ。人の手のぬくもりが伝わる製品は、日本の人々にこれを作り出す人たちへの共感を与え、日本のあり様まで考えさせてくれる。豊かな国の、あり余った施しではなく、生産者は誇らしく自ら手作りした品物を売り、買手は品物の価値を認めて買う対等な関係だ。私達の会は多くの人々の支持に支えられて、二年間に二百六十万円の売り上げをフィリピンに届けることができた。ささやかな試みは、全国に広がって二つの国の民衆をつなぎ友情を育てる事ができた。草の根のフィリピン連帯は、一枚七十円から百五十円のカードを通して実現できる楽しい連帯だ。

連絡先 フィリピン強制移住区三地区支援「草の根貿易の会」

〒581 八尾市桂町二一七五

☎ 〇七二九一九六一八二七一

発

言

「ネグロス・キャンペーン」での出会い



幕田恵美子

一九八六年二月、フィリピンのネグロス島の子どもたちが飢餓に瀕しているという情報に、「ネグロス島の子どもたちが生きる力を！」というキャンペーン活動が始まり、ネグロス現地に対しては、地元の市民団体であるネグロス救援復興センター（NRRCC）と協力関係を結び、最初は緊急援助として米や医薬品の配布に取り組みました。ところが、ネグロスの人びとから、「今日の米をもらっても、明日はどうしたらいいのだ。明日から自分たちで食べられるような支援をして欲しい」と訴えられ、始まったのが復興プロジェクト。これは、自分たちの食べる物を自分たちで生産し、生活必需品や子どもたちの教育費も自分たちで稼ぎ出していこうというもの、共同耕作、共同家畜の飼育等さまざまなプロジェクトが試みられています。そしてさらに、これまで砂糖労働者として働いてきた人びとは、緑豊かなネグロスの地で農民と

して生きたいと、農業研修センターの設立を願い、日本と協力して研修センターづくりにとりこんでいます。

こうした対ネグロスへの支援を支えている日本国内でのキャンペーン活動がまた非常にユニークなもので、日本全国で十七のネットワーク、小さなグループや教会での活動も含めれば実に多くの地域での独自の活動が繰り広げられています。実際にかかわっている人びとも、主婦が中心のグループ、学生が中心のグループ、あるいはヤング・パワーに対抗して自称「おじさんパワー」で頑張るグループ、とさまざまです。こうした背景のもとに、自分たちの感覚を实にみごとに反映したキャンペーン活動が行われているのです。

同じ絵画展やコンサートをやるにしても、主婦が中心になつていところでは、デパートでやろうという発想が飛び出してきました。「ギャラリィでやると、見に行く意志を持った

人しか行かないでしょ。デパートなら単に買い物に来た人にも見てもらえるじゃない」。あるいは、美容院の自分の担当の美容師さんとの話の中にネグロスの話が出てきて、いつのまにか「じゃ、チャリティ・カットをやってみよう」ということになったり、その美容師さんは、仲間の美容師さんと呼ばかけて、これもデパートでやってしまったのです。そこに髪を切ってもらいに来たのは、たまたま面白い物に来た人、お気にいりの美容師さんがお目当ての人、そうした人に髪をカットしてもらいながらネグロスを知ってもらう。もちろん、ネグロスの話を聞いて、きのう刈ったばかりの頭をまた刈りにきてくれたおじさんもいたそうです。

学生が中心のヤング・パワーのところでは、大きなホールを持つ大学を説得して、そこでチャリティ・コンサートを開きました。フィリピンから歌手を呼びましたので、その旅費を稼ぐためにも、必死で電話をかけまくり、コンサートに来てくれる人を募ったそうです。メンバーの間では、しばらく電話恐怖症という病が流行ったとか。ホールを貸すことになった某大学の学生・職員は、もちろんチケットを売りつけられていました。しかし、ネグロスの状況をみごとに織り込んだそのコンサートの後、会場を埋めた四百人以上の人びとの心に何かが響いたようです。

ネグロス・キャンペーン活動に参加しているある教会は町

の繁華街の中にあって、夜になると教会の敷地の中に無断駐車をする車が絶えないそうです。そこで神父さん、巡回して無断駐車車には「警告、ここでは駐車料金はとりませんが、ネグロスへの募金をお願いします」という張紙とネグロス・キャンペーン・ニュースをせつせと張りつけています。

こうした活動は、それぞれの人びとが生活している場で、そこにある条件をフルに生かしてのキャンペーン活動です。何の無理もなく、今までネグロスを知らなかった人にネグロスの現状が、そしてネグロスの人びとのメッセージが伝わっているのです。

そして何よりも貴重なのは、この活動をやっているネットワークの人々自身からの「何かする時は忙しくてシンドイけど、楽しいし、新しい仲間が増えていくのは嬉しい」「始めた時は、かわいそうなネグロスの子どもたちのためと思って頑張っていたけど、あの子どもたちをかわいそうにしているのは大人であり、そして日本の私たちにも責任があるのがわかりました」「日本で私たちが忘れかけていた人間らしさというものをネグロスの人びとに教えられました」という感想でした。

「開発」とか「援助」とかいうことばを使わなくとも、自然に自分の生活と結びついたところで、他の何よりも確かな自然他共の「開発」「国際化」が生まれているのだと思います。

発

言

バン格拉デシュと私

私が南インドの若い国バン格拉デシュ（71年にパキスタンから独立）に出会ったのは、74年の春ごろだったと思う。当時、私は大学の三年を休学し、東南アジア、南アジア、中近東への旅に出、その途中、北インドの乗り合いバスの中で初めて出会ったのである。ちょうど二十歳の誕生日をネパールで過ごし、インドへ出た直後の私は、見るもの聞くものすべてが驚きの対象だった。ヒンドウーの教えに導かれる人々の多様な生活、貧富の格差、薄汚れた乞食、不可思議な修道者（サドゥ）の存在、等々。そういったインド世界の中、バスの中での「貧しいバン格拉デシュの人民へ支援の手を」というアピールがその出会いだった。乗客は決して豊かとは思えなかったが、数人の人が1パイサ、1パイサ（1パイサは1ルピーの100分の1）と差し出す光景を見ながら、「なぜこんなに貧しい人々、乞食を多く抱えるこの社会で……」といっ

吉田 志朗

た想いを胸に、困惑した事を今でも鮮明に憶えている。

こういう形で始まった私とバン格拉デシュのつき合いは、当時は考えてもみなかったことだが、その後十数年の今でも続いている。実は約半年の旅が終わった後、75年の春にシャブラニール——市民による海外協力の会（当時はヘルプ・バン格拉デシュ・コミティが名称）に関わり始めたからだ。

訪バ十数回、現地駐在員として約四年数カ月を現地で暮らした私の、バン格拉デシュとのつき合いは様々だけれど、十数年の長きにわたって私を支えてきたひとつの経験を紹介したいと思う。

—アミナ、村の婦人との出会い—

76年の春、大学の卒業式を前に、私は初めて現地に渡った。東京事務所と現地事務所の間の調整というのが、訪バの目的だったが、私にとっては初めての事ばかりで実際は研修



だった。当時、この会は、74年に始めた農村開発協力プロジェクトを首都ダッカから北西約八十キロのところに位置するポイラ村で実施していたのである。現地駐在ボランティアについて村に入った私は、厳しい村人たちの生活、豊かな自然、駐在員の生活、実施中のプログラムのいくつかにつぶさに触れることができた。

夫に捨てられ嫁ぎ先から小さな子供を連れ帰村したアミナに会ったのは、この時である。この社会は男性上位の世界であり、イスラムの規律によって女たちの行動範囲は家の中、庭先とその周辺に限られている。しかし、人口の増加、社会不安などにより、村では食うにも困る人々が増え、貧農や土地無し農民と呼ばれる人々が確実に増えている。そういう生活の貧困化が進む中であって、女たちは、なす術もない状態だった。そこで実施されたのが、ジュート（麻）手工芸品生産協同組合活動なのだが、アミナは技術指導の世話役として積極的に活動していた。

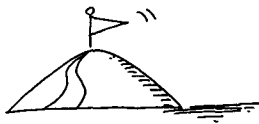
だが、それ以前は、「捨てられた女」アミナは村の女たちからもさげすまれる身だったという。なぜなら、イスラムの世界では、男に帰属しない女は社会の一員としての地位を与えられないからだ。さらに、口減らしのような形で嫁に行ったアミナに暖かく迎えてくれる実家もなかったからだ。しかし、今、彼女は明るく、たくましく生きている。「彼女は、

それまでの境遇に負けず、この、自分が社会に開かれ生かされている機会を得ることで立ち上がり、今では、組合の女たちの精神的な支柱ですらある」という駐在員の説明は印象的だった。

夜、灯油ランプの光でメモをとりつつ、社会の開発とか、人が協力する事の意味を、私はこの経験を通して心に刻んだ。その事が、十数年たった今でも鮮やかである。

初めてのこの訪バで「共感」する事に出会った私は好運であったと、つくづく思う。

（シャブラニール——市民による海外協力の会）



発

言

地球で会おうすべては自分

成田正雄



●タイの障害児絵画展

88年八月。タイ、バンコク。国立ラトウシン病院。

彼は骨にほんの少し肉をつけた身体で横たわっていた。膝の間に褥瘡^{じよくそう}よけのスポンジ。尿は留置^{りゅうちゅう}カテーテルをつけて垂れ流し。手は動かない。――まぎれもなく「頸髄損傷^{けいずいしんしょう}」だ。

少し軽いが同じ障害を持つ私は、受傷直後の自分の状況を思い出し震えた。四肢マヒ。発汗機能なし。便尿のコントロール不能の頸損では、医療状況の厳しい灼熱の国では生存できないと思っていた。彼は澄んだ瞳で私を見た。私も彼を見つめた。私たちは生死の間を歩いてきた仲間だ。言葉や国はいらない。私は経済と医療に恵まれた地域に住み、海を渡ってここにいる。彼は寝たきりの状態で五年目を迎えた。

僅かに残る生命力が辛うじて彼を支えている。私が彼であつたかもしれない。彼の冷たい手を握りながら、生存の場の少しの違いが「いのち」を決める不条理に、私は泣いた。

南の国の暑さの中で、朦朧^{もうろう}としながらタイとの出会いを思い出していた。一年前に見た数枚の写真がきっかけだった。

タイの障害児が描いた絵を写したもので、その色彩感覚と濃やかな筆使いが心に染みた。絵を紹介してくれたのは、大阪の養護学校のIさん。彼は数年間にわたりタイの障害児の施設を訪ね歩き、今回絵を送ってくれた。「F・H・C（障害児のための財団）」との出会い。彼の熱意と子供たちの絵に込められた力に動かされ、私たちは絵画展の準備を始めた。

ノウハウはなにも無かった。やるからには、素晴らしいものにしたかった。場所の確保、広報、パンフレット、資金集め、ボランティアの確保等、課題はたくさんあった。手当たり次第、人に声をかけ、知恵を借り、身体を借り、頼み込んだ。力のある人だったら楽々こなせることだが、私たちには力が無く、熱意だけで必死だった。が、ふたを開けてみると、連日、新聞は五段抜き。入場者は七千名に達し、大きな

反響を巻き起こした。私にとっては、アジアとの劇的な出会い。何十人もの新しい友人との出会い。自分の人生の核に、「人とのつながり」と「行動」という大きな二本柱がズシンと打ち込まれた、生涯忘れられない出来事になった。

●北ア・立山車イス登山

同じく'88年八月。5歳から76歳まで、米中豪日、全盲、松葉杖、車イスと多様なメンバー136人で北アルプス立山に登った。たった15cmを越えられない車イスが2800mへ。あらゆる状況の人たちが車イスを媒体に力を合わせる。雪渓を越え、岩をよじ登った。風と冷雨の中、意志と体力の限界に挑んだ。あわや遭難？ という危機もあった。登頂の瞬間、胸囲110cmの柔道家は泣いた。施設からでた事のない重度障害のSさんは感動で声が出ない。本当の心のつながりは、厳しい状況を共同作業で凌いでいく、そんな中でしか生まれないのでは？ 車イス登山に行くたびにそう思う。

●私達の運動「心のネット」とは……

右の二つが私たちの運動の一コマです。テーマは人間、特に「多様な人間の心のつながり」です。それをどのように深く広く創りあげていくのか、また、心のつながりによって生まれる連帯感、エネルギーをどうしたら「より厳しい状況にいる人」に向けることができるのか、そんな思いを込めて「あらゆるジャンルの人と、あらゆるジャンルの遊び・イバ

ントを通して友達になり、地球サイズの面白ボランティア活動をしよう！」と、楽しい活動を具体的に提示し、人の出会いのきっかけをつくります。普段は「心のつながり」など空気がみたくて意識しませんがそれを積極的にドンドン広げ、日常的に、社会的に活かすのです。一人ひとりつないでいく、遠回りのやり方です。しかし、私たちは、人の出会いの素晴らしさを、いつも味わっているのです、ひよっとしたら、地球をカバーできるのでは?! と秘かに思っています。

今、日本の選別・管理・組織社会の中で、自分の小さな領域だけに籠っている人が多い。新たな出会いが無い。私たちは自らの心を開き、宇宙大に広げれば、地球は自分の内部↓地球で出会うすべては自分、そんな視点で行動しています。運動の中で重視してきた、だれでもできる活動の一つ紹介します。新聞の片スミにある市民活動の催し案内。これに、ジャンルを問わず、「面白そうだな!」と感じたら、フラリと参加してみよう。頭を空っぽにして、二次会、三次会まで一生懸命楽しんでやおう! 新たな出会いが、きつとあります。頭で入らず、心から入る。人間を通して問題に触れる。自分の未知の領域に一歩足を踏み入れる。最初の一步、小さな行動が「地球市民」への鍵ではないでしょうか。

(ヒューマンネットワーカー)

〒232 横浜市内南区二葉町2-17-19 045-252-8177

発

言

いつも問題意識を持ち、「なぜ？」と考えられる大人へ



白井香里

ついこの間まで片親が韓国人だということを公表したがらない生徒がいたので変に氣を使ってしまったことがあったのに、今年の一年生ときたら、「お父さんはベトナム人。私はれっきとしたハーフです」なんて言ったりするものだから、びっくりしてしまいます。ユニセフからの依頼で、ユーゴスラビアの児童画展に出品するために南の国の話をしていった時だったので、これはチャンスと思ったのですが、「私は日本で生れたから何にも知らない」とのことです。「残念だなあ」で終わってしまいました。それにしても、本人も周りの子たちもあたりまえの雰囲気だったのには妙に感心してしまいました。これも時の流れなのでしょう。

今の生徒は、小学校の時にユニセフ募金に参加していたりして、結構、南の国のことは知っています。つい、五、六年前には、にこやかに笑うケニアの少年の写真を見せると「うそだ！ 笑えるはずがない」と拒否反応ばかり強くて、「飢え

と貧困のかわいそうなアフリカ」が本当のアフリカではないことを理解させるのに時間がかかったものでした。これは「かわいそうなアフリカ」をことさらあおっていたマスコミの影響も多分にあつたと思います。自分たちの出会った南の国々の子どもたちの生活をありのままに伝えたいと、青年海外協力隊に参加した仲間と声をかけて、「開発教育を考える会」を作ったのもこの時期です。それ以来ずっと、「南の国の人々の生活を知らせ、気候風土の違いが、いろいろな暮らし方、考え方を作っていくこと、今、争いをしている国の人々の、そしてアフリカなどにおける干ばつや飢えの状態が、あたりまえなのではなく異常なことであることに気付く眼、感覚を養い、地球上で起きているさまざまな問題を仲間として見つめ、共に考えていく心を育てていきたい」と、スライド教材を作るために会合を重ねてきました。一作目の「地球の仲間たち」は全国33か所の窓口を通して、地球も年齢層も幅広く利用さ

れています。学校では、文化祭や社会科ばかりでなく、家庭科や英語科などの普段の授業で使われる例が多くなってきました。開発教育が「南の国を知り、日常の自分の生活を見直すこと」を基本にしているという点では、文化祭といった単発的なものよりも、教科を通していろいろな方向から開発教育を日常化していくことの方が大事なことだと思います。

「地球の仲間たち」はいろいろな所へおじゃまして来ましたが、中にはインドの村を旅し、くたびれ果てて戻って来たものもあります。子どもの平和、開発、教育に関する活動をされているプレム・クマール氏が、新聞社と日本の友人を通して連絡してきたのです。一昨年暮れから新年にかけてのインドにおける子どものための国際行進の中で使いたいとのことと、七百人からの村人に見て貰えたようです。クマール氏は、村人たちに他の国の文化を知らせるためにと、ご自分の経験を盛り込んで話されたそうですが、「一枚のスライドは千の言葉を語るものです」と誉めて下さいました。以前には、婦人の自立に力を注いでおられるバングラデシュの方から、この教材の映像と編集のしかたを誉めて戴いたことがあります。もともとは、地球上にはいろいろな生活があることを、日本の子どもたちに知らせたいと生まれた「地球の仲間たち」ですが、そのスライドに出てくる国の人びとが利用してくれることは、予想もしていなかっただけに、自分の子がひとり歩

きを始めたようでも嬉しい出来事でした。

現在、開発教育を考える会では、利用者の声に答えて「地球の仲間たち Part II」を企画、編集しているところです。

一作目は衣食住を中心にした客観的な映像が主でしたが、「Part II」では、子どもたちの生の声を取材しています。経済大国の名のもと、物と情報に溢れた時代に育っている日本の子どもたちは、今の自分の生活があたりまえのことと思っています。島国日本に生きる子どもたちにとって、他の国、特に南の国々の子どもたちの生活、考え方、それらの背景にある伝統的な文化を体験することは、自分たちの暮らしを見つめ直すことであり、欠けていること、無駄にしている何かを発見することにもなります。さらにそこから、自分と南の国とのつながりや地球全体の問題が見えてくるでしょう。

最近、日本に対する批判や日本側の対応の鈍さを聞くことが多くなりましたが、子どもたちには、いつも問題意識を持ち「なぜ？」と考えられる大人になって欲しい、積極的に異質のものに触れ、自分の考え、見方をぶつけ合っているいろいろな見方のできる、そして行動できる大人になって欲しいと思うこの頃です。（開発教育を考える会・中学美術教諭）（スライドの貸出しは左記までご連絡下さい。

〒228

神奈川県相模原市相武台団地2-2-8-23

☎0462-55-1867 白井)

発

言

アジアからの就学生の相談から



酒井和子

この一カ月間、私たちは、新聞やテレビで報道される中国情勢を固唾をのんで注視してきた。それは隣国での出来事という以上に、私たち「ぐるーぷ赤かぶ」がこの一年間取り組んできた日本語学校の就学生に深く関わる問題だからである。

北京で戒厳令のしかれた直後に、東京で開かれた五月二十一日のデモ、天安門での無差別虐殺のあった六月四日のデモ、そして六月七日の山手教会での追悼集会と、たて続けに中国人留學生が呼びかけた一連の行動に、私たちも日本人の友人として参加してきた。どの会場も、東京にはこんなにもたくさん中国人留學生がいたのかと再認識させられる程の留學生でいっぱいだった。もちろんその中には、私たちの知り合いの留學生や日本語学校の就學生も大勢参加していた。

彼等の興奮ぶりは、言葉のわからない私にもビンビンと伝わってきて、中国の情勢に一喜一憂していたのだが、それと

同時に、私にはとても不安なことがあった。それは就學生や留學生のビザの問題である。外国人が日本に滞在する場合、その目的によって在留資格が細かく決められている。大学や専門学校に通う留學生は、一年毎にビザの更新ができるのだが、日本語学校の學生は「就學生」と呼ばれ、ビザの更新は半年毎で、二年間以上在籍することはできない。留學生は週二十時間以内のアルバイトが認められているが、就學生は許可制となっているし、政治活動に参加することは、もちろん資格外活動として処罰されるという、不安定な存在なのだ。

国に残してきた家族や友人のことを思い、何かしなければと集会に参加してきた彼等は、今、自分たちのビザがどうなるのかと不安にかられている。外国人相談にたずさわってきた私たちのところにも、きっとその相談がくるだろうと、弁護士や中国語の通訳のできる人にも応援を頼んでいるのだが、

既に予想通りビザの滞在延長ができないという相談がいくつ
か持ち込まれてきた。もとをたどれば、私たちと日本語学校
や就学生との関わりは、二、三年前から、私たちの住んでい
る地域に外国人、とりわけ日本語学校に通う中国人就学生が
急増し、アパートさがしや仕事さがしの相談にのつたことか
ら始まった。いい日本語学校を紹介してほしいという相談が
増えてきたのに、信頼に足るガイドブックが何一つなかった
ことから、では自分たちで調べてみようと思いつたのである
。ところが、シロウトが考えていた以上に、日本語学校のラ
ンクづけといったガイドブックはできないことがわかった。
むしろ、誇大広告で学生を集めている詐欺まがいの学校の実
態や、何の資格も経験も問わずに安い時間給で日本語教師を
雇い、非常勤として使い捨てている学校の実態、留学生十万
人計画をぶち上げておきながら、日本語教育、教師養成、日
本語学校の基準、奨学金や宿舍など、何の展望も持たない文
部省、問題が起ると書類審査だけ厳しくする法務省など、
あきれる話ばかりだった。

就学生に役に立つ日本語学校のガイドブックをつくるとい
う当初の目的を変更して、現状の告発とこれらの日本語学校
はどうあるべきかという提言、そして一年間の就学生相談日
記を『あぶない日本語学校——アジアからの就学生』（新泉

社刊 千七百三十円）にまとめた。

今年に入ってから、ぐるーぷ赤かぶへの相談件数は一層増
え、半年足らずで二百件を越している。アパートや仕事さが
しなどの比較的簡単な相談ではなく、最近では、学校に払い
込んだ授業料や保証人料の返済とか、アルバイト先での賃金
未払い、差別という問題が増えてきた。

アルバイト先の中華料理店で、従業員日本人に卵を投げ
つけられたという女性の場合、話し合いの中で店長が謝罪し
金銭で和解をした。別の飲食店で、やはり日本人の従業員に
何度も殴られ怪我をしたという中国人の男性の場合は、自分
の保証人がその店のオーナーであり、その店の寮に住み込ん
でいるため、結局泣き寝入りせざるを得なかった。彼が暴力
事件を問題にすれば、保証人も仕事も住居も失ってしまうと
いう、日本で生きることすらおびやかされる事態になってし
まうのではないかと、本人が恐れたからである。

日本社会の中に彼等が生活者として入り込んでいる現在、
これまで何度も繰り返されてきた外国人差別、排除の動き
が、「国際化」の心地よい響きの裏側で、深く進行している
という危惧を、特に最近、感じてならない。

（ぐるーぷ赤かぶ・豊島区議）

二つの国の学校に通って

◆フランスの学校から帰って

建部 和礼

「学校の給食とてもおいしかったよ」と、ぼくは初めて日本の学校の給食を食べて家に帰った時、お母さんにもわづいって。その理ゆうは、フランスの給食より何倍もおいしかったからだ。それからいく日かたつてまた、「学校の給食にシチューなどがでてくるよ」ともいった。フランスの給食はシチューなどでこなかった。

しかし、フランスでは、昼ご飯を食べに家に帰ってもよいので、昼休みはなんと二時間ある。それで、友達と昼ご飯をいっしょに食べるため、家によんだりしていた。

他にも、日本の学校の方がよいと思ったのは、勉強のし方、時間わり、建て物などだ。

勉強のし方のことでは、理科だ。フランスでは教科書を読んだりするだけだけれど、日本では、実さいに実験などもするので楽しい。

時間わりでよかったのは、体育、音楽が多く、家庭科、図工などがあり楽しいからだ。

フランスでは、体育、音楽、クラブは週に一度、家庭科、図工はなく、勉強をたくさんやっていた。クラブではコンピュータをやっている、それはとてもおもしろかった。

建て物でいいと思ったのは遊ぶ場所だ。屋上もあり体育館もあるからだ。

フランスにはそんな物はなかった。プールもなかったので室内プールに通っていた。

けれどフランスにいた方が良かった点もある。それはフランスがのんびりしていた点だ。日本みたいに受験、受験といそがしくないし、休みが多かった。夏休みが二ヵ月間、

そして、日本にはない秋休みとスキー休みもあった。毎週水曜日にも休みだった。スキーは思うぞんぶんできた。またテニスやサッカーで友だちとよく遊んだ。旅行もたくさんできた。

そしてりん海学校だ。このりん海学校は長くて、三週間もいって来た。三年生の時、六月に先生とクラスの友達と行った。

午前は、海の勉強をしたり、海の詩を覚えたりした。午後は、見学に行ったり、ヨットに乗るための訓練などをした。最後は少しあきてしまったけれどとてもおもしろかった。

けれど、のんびりばかりしていたわけではない。毎週土曜には国語と算数のテストがあったので、毎週土曜日になると、「ああ、またテストか」と思った。

通信ばは、テストなどの点がそのまま点数について、日本のように人と比べて点数を付けないので、フランスの方が良いと思った。日本の場合だと、自分がいくらがんばっても、他の人がもっとがんばっていれば、点数が下がってしまうからだ。

フランスにいけてうれしかった。友達に会いたい。(小学五年)

◆カナダの学校で

三崎真穂子

私は、一九八二年六月から一九八七年七月までカナダのバンクーバー市にいました。行きの飛行機の中ではずっと泣いていたのに、

飛行場に着くとけろっとしたのをおぼえています。何も知らない未知の世界に入りこんだようでわくわくしはじめたからです。新しい家に着いておどろいたのはだんながあつたことです。生まれて初めて見るだんなにとっても興味がわいて、父の友達が火をつけるのをおもしろそうに見ていました。

私が通ったキンダーガーデン(幼稚園)は家からすぐの所にありました。私は全然英語がしゃべれなかったけど、同じ日本人の子が通訳してくれました。私と数人の子は特別授業を受けて英語を習いました。先生のミセス・リーノは「日本人は口を大きく開かないから、鏡を見ながら練習しなさい」などといいアドバイスをくれて、エレメンタリスクール(小学校)になった時はすっかり上手になっていました。一年生での一番の思い出は、ミュージカルで「ピーターパン」をやったことです。私はゆかたを着て、ぞうりをはき、うちわを持って日本人形になり、「Wouldn't it be wonderful to meet and marry a prince!」と言いました。とてもいい経験だったと思います。

カナダの学校では二十分間リース(二十分休み)と一時間ランチ(昼休み)があります。

した。晴れた日にはよく外でお弁当を食べました。お菓子を自由に持ってこられるので自由にリースに食べました。私はたいていポテトチップを持っていてみんなと交かんしました。一昔前の商人みたいでした。日本に帰ってくる少し前にもとてもいい物ができました。フードテーブルといって、自分の好きな食べ物とそのテーブルに置いてほしい人が自由にとる仕組みです。こうすると食べ物にむだに捨てられないですみます。

私の学校は校則がほとんどなく、みんな自由でした。六年生や七年生の人達はけしゅうをしたり、ピアスをしたり、大たんな服を着たりして結構はででした。私はこのゆるい校則が好きでしたが、雨がふっていても雪がふっていても休み時間教室にいられないのがいやでした。みんな寒いのでお手洗いかくれたり、図書室ににげこんだりしました。私も、いけなしいと思いがらつみんなとお手洗いかくれてしまうことがあります。

いろいろあったけど、私はカナダでいくつも貴重な体験をして、たくさん宝物を得ました。私は五年と一カ月のこの短いような長いような「別世界」を大事にしっておきたいと思います。

(中学一年)

◆日独大学授業風景

小澤 淳

「ドイツ人は外国人に対し排他的で、ドイツ社会はファシズム的だ!」

「その言葉は聞き捨てなりません、撤回して下さい!」

私は'88年秋から'89年春まで、西ドイツのフライブルク大学の外国人のための語学コースでドイツ語を学んだ。右の会話はあるデイスカッションの授業での、イラン人学生と講師とのやりとりの一部であり、非常に印象的風景として記憶している。この授業は会話力をつけることを目的に毎週違ったテーマ——機械文明、中絶問題、環境汚染、中東問題、外国人労働者問題——などをとり上げ討論を進めるが、学生が持ち回りでプレゼンターを務め、講師は簡単な司会である。テーマによつては意見のぶつかり合いが激しく、外国人労働者問題をとり上げた時には遂に講師が討論に加わり激しく反論したというわけだ。

この授業に限らず、ドイツの大学での授業は学生主導で行われる。授業内容も講師と学生の話し合いで決められ、学生からの要望、意見、質問も非常に積極的である。また、講師があててくれるわけではないので、積極的

に参加しない学生の得るものは少ない。

これに対し、日本の場合は、講師主導型と言えると思う。授業では先生があててくれるし、たとえ授業に出ていなくても代返を頼んで、他人のノートのコピーでテストに備えれば単位はとれるのだから。

ある若いドイツ語教師が、「日本人は授業中いつも静かで、ノートばかり見て、授業中のコミュニケーションすらとうとうとしないのは何故か」と私に訊いたことがある。私はその理由として、①外国人コンプレックス ②日本では小学校から、授業では静かに先生の話を聴くという態度をたたき込まれているから——という二点を挙げたが、特に②に関しては全く理解して貰えなかった。彼らには質問や意見なしに成立する授業など想像できないらしい。彼らの反応を見ていて、果たして日本の授業が授業として成立してると言えるのかどうか、自信が無くなってしまった。それからこういった日本人の受動的態度が、「何を考えているかわからない」という日本人に対するイメージとしてかなり浸透していることを目の当たりにし——適当な表現が見当らないけれど——悲しくなったこともある（日本人留学生の皆さん、お喋りであれ！）。

しかし一方、ドイツの大学は驚くほど権威的体質も持っている。特に“Professor”の肩書きは学内のみならず、全社会的に一ランク上の重みを持つ。教授は週に一回、2時間程の「質問時間」を持っており、授業以外ではその時間にはのみ学生の質問に応じる。アメリカ人の友人は、廊下で教授に質問しようとしたところ、「ここでかね？ 質問時間に來たまえ」と露骨に嫌な顔をされ、憤慨していた。

語学コースで学ぶ学生は当然全員外国人であり、留学生としてフライブルクで暮らしている。たとえお隣りのフランス人であろうと、異文化の中で暮らすことを通してその文化を知っていく。私は、私の友人（留学生）の極めて多くが、ドイツでの生活を通して、ドイツ人に少なからぬ反感を抱くようになっていたことがショックだった。曰く、排他的である。服装がダサい。不親切である。

確かに、ドイツの場合、外国人労働者の流入とその扱いが社会問題となっており、外国人に対する反感も少なくない。しかし、これは大きな落とし穴である。人間どこで生きようが楽しいことも嫌なこともある。今の世の中嫌なことなんていくらでもある。その文化

の持つ良い面、そこで出会った良い人を見つけていきたいと思うのだ。イタリアに留学した者はイタリア人ののんびり（いい加減）なところに苛立つだろうし、イギリスでは天気の悪さに嫌になり、フランス人の優越意識が鼻につくだろう。そんなこと言ったらきりがないのだ。若い頃の貴重な時間と金を費して留学して、その国が嫌いになって帰って來たなんて、悲劇でしかないと思うが、こういうパターンが意外に多いように思える。また、その国に対してブツブツ不平不満を言う人に限って、本人の性格的問題からまわりとうまくいっていない。かなりキツイ言い方だけれど、これについては私は確信している。自文化圏の外で暮らすのだからトラブルは当たり前で、自分の姿勢次第で乗り越え得ると信じていることが、異文化で暮らすコツではないだろうか（留学生の皆さん、極楽トンボであれ！）。

冒頭に引用した台詞を吐いたイラン人の友人は、授業後に私と一緒に昼飯を食いながらこう言った。

「ボクの母国イラン（彼は母国を捨て、亡命して來た）はもっとひどい。ボクはこの国を通して自分の国を知ったよ。ボクはあんなことを言う資格なんか無かった」（大学四年）

▲私のすすめる一冊▼

写真集

『地球／母なる星』

内山 裕子

「想像してごらん 国境がないことを
そうむずかしいことでもないさ
殺しあいも むだ死にもない 宗教もない
想像してごらんよ ねえみんな
そんな平和に生きることをさ」

ハーイ みなさん お元気ですか？ ジョ
ン・レノンのイマジンの曲にのって 今月の
御紹介は、写真集『地球／母なる星』小学館
¥58000です。

これは宇宙に飛び立っていったロケットか
ら写した地球の写真、そして宇宙ではノルマ
をこなすために大忙しの技術者―宇宙飛行士
たちのコメントですが、19カ国95人、人種・
国籍を超えて、語ることは不思議なほど同
じ、そしてどれも詩のようです。

宇宙から眺めた地球は、それほどまでに美
しくはかなげ。人類のほんの一握りの人間の
経験が、この写真集から体験できます。地球
の薄皮まんじゅうのような大気圏はハラハラ
ものだし、アンデス山中のベルデ湖の秘めら
れた青さ、イラン・カビール砂漠のキラキラ
文様は、木星と姉妹のようだし。一ページ一
ページが驚きの連続です。

「宇宙から眺めた地球は、たとえようもなく
美しかった。国境の傷跡などはどこにも見当
たらなかった」ムハメット・ファリス シ
リア

他の本のエピソードによれば、ロケットの
中で地球と宇宙ホテルの美しさに心奪われ、
大気圏突入の角度をまちがえちやった人もい
るとか。通信基地では焼け死んだと思っ
ていたら無事海上着水。一同大喜びしてヘ
リコプターで救助に行ったら、その人が、う
るさい、瞑想を妨げたとえらくおこったそ
うです。

「月へ向かう時は技術者だったが、帰って来
たら人道主義者になっていた」エドガー・
ミッチェル アメリカ

エリート技術者が、平和主義者・宣教師・
詩人となって地球に帰って来ます。

この短期間コペルニクスの転回(●)よ！
ラブレターがうまく書けないで悩んでいる
あなた

管理主義にバイバイできないあなたも
カモメ汁のやめられないあなたも
すっぴんの人民に銃をつきつける、年とつ
たあなたも

あなたの軍隊が殺した六歳の子供も、あな
たも

この薄皮まんじゅうの大気圏に生きる地球
号の同志であることが、すぐわかる。

さあ、いますぐ宇宙に飛び立つか、この本
を読もう！！

*宇宙ホテルについて、ラッセル・シユワイ
カートという宇宙飛行士さんが、こんな表現
をしています。「宇宙船からの眺めの中で、
最も美しい眺めの一つが、日暮れ時の小便だ。
一回の小便で、一千万個くらいの微小な氷の
結晶ができる。それが太陽の光をうけてキラ
キラ七色に輝き、えもいわれず美しい。信じ
がたいほど美しい」。最初は正体がわからず
未知の宇宙現象といわれたそうです。最初に
見た飛行士が「ホテルのような」その存在を
主張して「宇宙ホテル」と名付けられたそう
ですよ！

新 し い 家 庭 科 を 創 る た め に

はたらく おかあさん

●熊本県家庭科サークル

入 家 君 子

一、はじめに——働きつつけて来てよかった
今春、末の息子が社会人になり、二十九年間におよんだ
私の子育てもほとんど終わった。

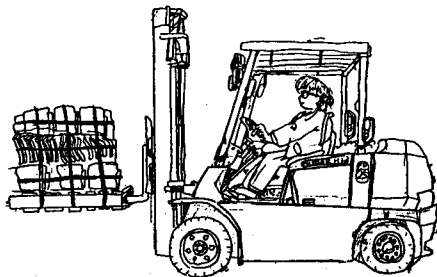
家庭と仕事との両立を考えながらがむしやらにやってきたことをふり返る時、働き続けてきてよかったなという実感をかみしめている。単なる子育てのみだったら、生きてきた喜びも半分しかなかっただろうと思うからである。

若い頃は、働くことで、嫁として、妻として、母としてのつとめがおろそかにならないようにと本当に身を粉にしてがんばったものである。働いていても、家事も育児も女のつとめだと思ってやってきた。忙しくて、仕事がおろそかになったり、つれあいのシャツのボタンのはずれに気づかなかったりして、なじられても、ただくやしい思いで涙

を流すだけだった。おかしいとも思わなかった。

しかし、女の特性が作られたものであることか、家事・育

児は、女の仕事と固定的に決めつけた考え方こそ女性差別の根源であるとか学習していく中で、一人で背負いこむ義務はないのだとわかってきた。しかし、自分がわかっただけで周りの者にはわからない。そのギャップに今は歯ぎしりをしている。働く女性が多くなった今日でも、「男は社会、女は家庭」という伝統的役割分担の意識は根強い。そのために、どんなに働く女性がきつい思いをさせられているかに気づくこともしない。女性差別の最たるものであるのに、この考えはなかなか変わりそうにない。女性解放の前に立ちほだかる大



きな壁である。これをどうにかしてくずしていかななくてはならない。小さな実践しかできないが、まず自分にできることからやってみようということできるとりくんだ。二年生の社会科「はたらく人」の中で扱ったものである。

二、校内研修の中で

二年ぐらい前に「性教育を通して女子教育をやるう」ということで、サークルで、目標や年間計画を検討した。そして校内の研究授業などを進んで引き受け、授業実践でその必要性を訴えていった。二年後に「一人ひとりを大切にする性の教育」というテーマを人権教育の中に位置づけることができた。小学級（二二一名）の各担任がそれぞれ授業をやり、みんな考えていくようにした。このテーマにとりくんでは今年で四年目になり、ブロックで公開授業もした。

テーマ「一人ひとりの命を大切にする性の教育」

目標——人間として一人ひとりが個性豊かに生きぬく力を育てる

努力目標①体についての科学的認識を育てる

（男女の体は、どちらも大切な存在であり生命を生み出すことに関わるものである）

②男女の人間としての対等な関わりを考えさせ

る（性による役割分担の見直しと学校・家庭・社会における民主的な人間関係を理解させる）

③豊かな個性を伸ばす

（らしさにこだわらず一人ひとりの個性を伸ばした生き方を求めさせる）

三、私の実践——「はたらく おかあさん」

人間の自立の第一歩は、自分で働いて生活することである。そのためには、小さい時から労働の意義や大切さを教えるなければならない。二年生の社会科では、働く人というところでいろいろな職業で働いている人が出てきている。しかし、その中に出てくる人は、バスの運転手とか、工場で働く人とか、郵便配達夫とかほとんど男性である。女性性は、スーパーのレジとか、農作業で働く姿が少しは出ているが、男性に比べて影がうすい。このままにしては、役割分担の考えを肯定し、性差別を拡大してしまふ。

女も働き、働くことで生活を支え、生き生きと豊かな生き方をしていることを学ばせたい。そのことを一番身近な母親の労働をとり上げて見つけ考えさせていきたいと思った。

①アンケートのおねがいと回答

「男の子の血洗いも性教育の一つです」

戦後、民主的な家庭や社会の建設を目ざして四十年を経たが、男性の中には今日もお、男尊女卑の意識をもち続けている人がいるし、妻の中にも妻は夫に奉仕するものという考え方を持ち続けている人が少なくない。西ドイツに留学して、西ドイツの男性が、料理を運んだり、皿洗いを家族一緒にやって、後にみんなで楽しむという生活をしているのを見て、自分もやるようになった。又、自分の息子達も家事の負担が妻にのみかかることがないようにしている。——平井信義著『心にひびく語りかけ』から

この資料をつけて次のアンケートをお願いした。

私たちの学校では、「いのちを大切にする性の教育」ということで、ここ数年研究を進めています。性教育といっても、「男女の体」の理解だけにとどまらず男女の平等な人間関係のあり方等を考えさせていっています。そのためには、人にたよった生き方ではなく、一人一人がお互いを尊重しあい、自立して生活していける力が大切になります。そこで働くことも問題にしていっています。先日、PTAで紹介いただいた平井先生の『心にひびく語りかけ』の中に、「男の子の皿洗いも性教育の一

つです」という私達の学校で目ざしているのと同じものに出会いました。男の子やお父さん方の家事参加について、お宅ではどんなようすでしょうか。又そのことについてどう思われますか。ご意見をお聞かせ下さい。

回答 ④

子どもの頃から「男は台所に立つものではない」と母がよく言っていたので、大人になってもそういうものだと思っていました。結婚した頃、共稼ぎで仕事に家事にと忙しく、子どもが生れれば、毎日毎日大変でした。しかし、主人が台所へ行って皿洗いするのは、どうしても抵抗がありました。親を見ているので当然だと思えないのです。でも最近の若い夫婦は二人でよく協力して仲良くやっていますね。そんな家庭の子ども達は、それが当たり前になり男の子もやるようになるでしょう。私には、男の子がいまませんのでピンとくるものがないのですが、「皿洗い」が性教育につながるというのは、わかります。家族の和になり、両親の理解にもつながるのですね。

回答 ⑤

私の家族は、夫婦と小五、小二の兄妹の核家族で共働きをしています。私は、男の子も女の子も自分の事は自分でやるのが当然という考えで、食事が終われば汚した食器は自分で

流し台にかたづけの様にさせています。しかし、夫は、自分でやらないので、子どもから「お父さんはズルイ」と不平がでます。しかしそれ以外の面では、夫は、家事・育児・教育と全部を私に協力してくれます。勤務の都合上昼間家にいる事の多い夫は、洗濯などもやってくれます。料理なども気軽に作ります。男女差にこだわらず、できる状態の者がやればよいという考えのようです。働いている妻への思いやりだと思います。子ども達も父親のように思いやりのある人間に育ち、温かい家庭を築いていってほしいと願っています。

②学級のお母さんの働くようす (二年 38名)

農業 (みかん・米作り、ごさうち) 19名
外のつとめ (かわらや、かんごふ、生命保険会社ほか) 10名

自営 (スレートやお店) 2名

専業主婦 7名 (そのうち、内職しているもの4名)

ほとんどの母親が家事以外のところで働いている。農村地帯で母親も働き手の一人として働くことが当たり前になっている。にもかかわらず、お母さんの仕事は、「炊事・洗濯・子育て」という考え方が根強い。その考えの不合理さに少しでも気づかせたいと思った。

③絵と作文を使って

見たり、聞いたりしたことを絵と作文に書かせた。それを使って一人ひとりの母親の仕事のようすや、喜び、つらさなどを一緒に考えていった。

◆がんばる おかあさん のぶゆき

ぼくのおかあさんは、朝六時ごろ、しんぶんはいたつに行きます。八代とかみやのはらのほうをくばります。ぜんぶで五十けんぐらいくばります。⑦冬は、さむいけど、春とか夏とかはとても気持ちがいいといいます。

七時半ごろかえって来て、あさごはんを作ります。ぼくたちが学校へ行ってからあさ日せいめいの会社にいきます。いつか、ぼくは、ニチイのちかくの会社に、おかあさんといきました。大きな会社でした。夕方は、四時ごろかえります。でもいそがしいときは、おそくなります。①おかあさんがおそくかえるときは、おねえちゃんがおはんを作ります。

まず一人で四人の子どもの育てているのぶゆきの母のがんばりをとらえさせた。次に⑦のところでは仕事の喜びにふれ、①のところでは「どうして、兄ちゃんやぼくはしないで姉ちゃんがしているのか」を問題にしていいた。

子ども達のやりとりから

P 「ごはん作っとは、姉ちゃんが上手だもん」

T 「そうね、上手かもしれない。だけど姉ちゃんも中学校の

勉強をせなんよ。姉ちゃんだけにやらせていいのかな」

P 「でけん。ずるーい」

P 「のぶゆきくんもかせした方がよか」

P 「みんなでしたら、はやか」

P 「兄ちゃんと姉ちゃんが交代交代にしたらよか」

T 「のぶちゃんにできるしごとはないのかな」

P 「ある、ある、皿はこびや、はしならべ」

T 「そうね、みんなですると早くすむね。皿はこべるかな」

T 「のぶゆき「うん、がんばる」

T 「おかあさんのがんばりとのぶゆきちゃんのこれからのがんばりに拍手」パチパチ……」

◆ はたらく おかあさん

たかゆき

ぼくのおかあさんは、かわらやにとめています。⑦かわらをリフトで車につんだり、かたづけたりします。かわらをいくつうったかを計算します。おひるは、べんとうやさんからかってたべます。そして、①おばあちゃんが、いもうとをつれておちちをのませにいきます。夕方は、六時半ごろかえって来ます。そして⑦夕ごはんのよいやそうじをします。おばあちゃんやお兄ちゃんやお父さんも手伝います。ぼくは、妹とあそびます。おかあさんは、⑤きゅうりようをもらってからは、おごちそうとかをかってき

ます。ぼくは、おかあさんがかわらやでがんばっているのうれいいです。

たかゆきの作文では、⑦①⑦⑤の四点について家事分担、

給料をもらうよろこびなどについて考えさせた。特に⑦では、リフトをうごかしている絵(44頁参照)を見せながら、

T 「この絵はじょうずね。何をしているところかな」

P 「かわらをのせよんなる」

P 「よう、お母さんな、うんでんしきんなるね」

たかゆき「うん、じょうずばい」

T 「仕事ばすると何でんしきるごつなるね。すごかね」

と、仕事をする事でいろんな事ができるようになることにふれていった。

ここでは、二人のお母さんしか紹介できなかったが、三八人のお母さんにふれていったら、仕事の喜び、つらさ、何のために働くかななどいろいろと話題にすることができた。

四、おわりに——いつも足もとから

この実践で親や子どもの考えがどう変わったかはよくわからないが、教師の考えは少し変わった。学校長自ら職員にお茶をくみながら、「わしや初めてふとんを上げてきた。先生たちに茶など初めてくんだ」と言われたことがあった。いつも、足もとの小さな差別を見逃さないようにしなければと思った。

新しい家庭科を創るために

家庭科教師の発想の転換を図るために

— 英語によるのり巻きずしの調理実習の試み —

●三重大教育学部附属中学校

土川 礼子

一、はじめに

家庭科というといまだに何かを作る教科という受け止め方が強く、生活を見直し切り開いていく力を身につけるために、男女共に必要な教科であるという認識はまだまだの感がします。共学で学んでいる生徒たちにはかなりその意識は薄くなってきたようですが、それでも中学生は心のどこかで、受験教科の方が大切と思っていると感じざるを得ません。

私は'87年度まで県の総合教育センターに勤務していましたが、これからの時代にも生かせる魅力ある授業はできないものかと研修講座や研究の内容を考える段階で常に気にかけてきました。ここに紹介するのはその一つで、'86年度に当時の英語科の研修主事と共同研究で試みたものです。

「新しい家庭科を創るために」というテーマに果たして添っているかどうかわかりませんが、現場にもどって二年目、技術・家庭科の授業の持ち時間も少ないために、最新の実践から報告できないことをお許しいただきたいと思います。

二、英語による「のり巻きずしの調理実習」を考えた動機

「食物」領域といえは調理実習が浮かんできると、相変わらず作って食べることの楽しみが先にあるように思えてなりません。興味・関心の高い調理実習を、単にお料理の作り方を教えるだけにとどまらず、別の要素と関連づけたとらえ方はできないだろうかということから思いついた試みです。

直接の動機は、文部省の海外研修でヨーロッパを訪問したことにあります。学校訪問中、尋ねたいことがあっても、適切なことばが英語で出てこないのです。もっと私たちの日

図1 テキスト「のり巻きずしの作り方」例)

Norimakizushi	のり巻きずし
Ingredients: <ul style="list-style-type: none"> • dried seaweed(1sheet per person) • 2 blocks instant freeze-dried tofu • 1 carrot • 1 cucumber • 150cc(3/4cup) vinegar • dash sugar and salt • steamed rice 	材 料 <ul style="list-style-type: none"> • のり (1人1枚) • こうや豆腐2こ • にんじん1本 • きゅうり1本 • 酢 150 cc (3/4 カップ) • さとう、塩 • 炊いたご飯
Sushi rice <ul style="list-style-type: none"> • Use steamed rice that has been standing for about ten minutes (Use 10% less water than usual when cooking rice) • Turn into a wooden bowl. • Pour mixture of vinegar, sugar and salt over hot rice. • While fluffing rice with a wooden spatula using cutting strokes, fan rice to cool it. 	ずしご飯の合わせ方 <ul style="list-style-type: none"> • 約10分間きましたご飯を使う。(ご飯は通常より水10% ひかえて炊く。) • おひつに移す。 • 酢、さとう、塩の合わせたものを熱いご飯にかける。 • 切るように、しゃもじを使ってご飯をかきまぜながら、うねわを使ってさます。
Freeze-dried tofu <ul style="list-style-type: none"> • Follow directions on package. • Squeeze out excess liquid. • Cut into strips. 	こうや豆腐 <ul style="list-style-type: none"> • 箱に書かれた指示に従う。 • 余分な水をしぼり出す。 • 細長く切る。

常生活の場で英語を使う機会があったらいいな。そうすれば自然に話すことに対する抵抗も少なくなるのにと考えるうちに「そうだ、食べるといふことにはどこの国の人にも共通の話題があるはず。しかも、一緒に作りながらだったら、その動作が媒体となつてことばも身につくはず。調理実習をしながら英語も話せるようになるなんてちよつとしたアイデアだわ」と思いつきました。「のり巻きずし」を

選んだ理由は、外国の人に日本の伝統的な食事を紹介する場合にも「すし」は効果的だからです。生徒が将来外国に行つたときにも、外国の人を招いたときにも、一緒に台所に立つて作りながらそれぞれの国の文化にも触れられるのではないか。そんなことが次々と浮かんできて、この試みへと私を駆り立てていったのです。英語科担当の研修主事に話しますと「英語科でも同じことが言える。生きた場面で英語を学ぶということは素晴らしいことですね。ぜひやりましょう」と賛成して下さいました。

以下、どのように教材化したのか、そして授業の実践結果について述べたいと思います。

三、英語によるのり巻きずしの調理実習への取り組み

まず二つの教科に共通する課題を確認し、「のり巻きずし」の調理実習を英語を用いて学習する手だてとなるテキストを作成するとともに、ビデオの制作に取り組みました。

(一) テキストの作成

私がのり巻きずしを作りながら日本語で説明するのをテープレコーダーにとり、それをAET(英語指導主事助手)の方が英訳していくという方法をとりました。AETのジェニファーさんは二世の日系アメリカ人の女性で、日本語も話せます。私の説明で不足している部分や調理用具の名前などは、英語調理事典などを参考に英語科担当の先生が平易な英

語にして下さいました。

テキストの一部を図1に紹介します。

(二) ビデオによる教材の制作

この題材は教育センターの英語科の講座でも取り上げることにしました。英語を使つての調理という未知の試みですから、生徒のためにも、調理経験の乏しい男子教員のためにも必要であると考え、ビデオの制作を行いました。

まず、のり巻きずしを私が実演しながら日本語をまじえてAETに教えているところを撮影しました。撮影担当は英語科担当の研修主事で、ビデオ制作の腕前は抜群です。

AETは、のり巻きずしを作るといふのは全く初めての経験ですから、こうや豆腐の扱い方やのりの裏表の見分け方などに驚いたり興味を示し、教材としての効果を高めました。さらに、AETが英語で英語科の先生に教える場面もビデオに収めました。主な会話や用具、材料の名前を英語で入れて、生徒にもわかりやすく編集しました。映写時間は20分ぐらいです。

(三) 英語科教師の体験学習を通して検証

中学生に授業する前に、英語科の研修講座でのり巻きずしの調理実習を英語でやってもらいました。そして、英語科の方からこれが中学生の教材として成り立つかどうかの検証をしました。すると大変好評で、来年もまたやって欲

しいという声が上がったのです。講座終了後の感想には、次のようなものがありました。

●高校でも生徒に家庭科の先生と協力してやりたいと思いました。言いたいことがうまく英語で言えなくても、身振り手振りで何とか通じるものだということも再確認しました。生徒も英語で話すことに興味を示してくれると思いました。

●実生活の様々な側面で英語を使ってみるという意味からも、すばらしいアイデアだと思います。「ご飯がはみ出す」とか「のりがしめる」など生きた日常の言葉の勉強にもなると思いました。

四、中学校技術・家庭科での授業実践とその結果

この題材が果たして中学校の技術・家庭科の教材になるかどうか確かめるために、三重大学教育学部附属中学校に授業をお願いしました。現任校であるこの学校は、私が教育センターに勤務する前に十五年以上いたので、生徒たちの英語への関心が強く、父親の仕事の關係で外国の生活を経験している生徒も何人かいることを知っており、条件がよいと思つたからです。

技術・家庭科担当の先生も英語科担当の先生も快く引き受けて下さり、ちようどのり巻きずしをする予定だったということで、二年生を対象学年に選びました。

図 2

(1) 授業の構想

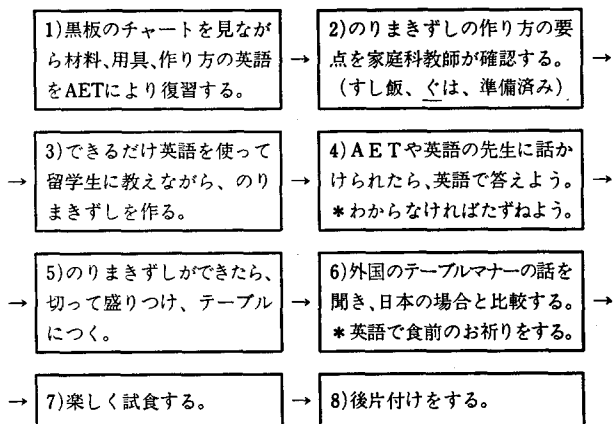
『のり巻きずし』の調理実習をするのに、英語を話す必要性を持たせるために、『外国からの留学生と一緒に、のり巻きずしを作ろう』という場面を設定し、各班に一名ずつ留学生役を置くことにした。そして、知っている英語はできるだけ使うよう指示した。

授業は2年A、B組の女生徒44人と家庭科、英語科担当教師各1名、AET1名、総合教育センターの家庭科、英語科担当研修主事の計5名が参加して実施することにした。

(2) 指導計画

- * 『のり巻きずし』の英語による作り方——〔英語科〕
 - ・ センター制作のビデオを見る。 (2時間)
 - ・ 材料、用具の英語を知る。
 - ・ 作り方の簡単な英語による話し方の練習。
- * 『のり巻きずし』の作り方の要点の学習——〔家庭科〕
 - ・ ご飯の炊き方、合わせ酢のまぜ方 (2時間)
 - ・ ご飯のおき方、ぐのおき方
 - ・ 巻き方、切り方
- * 留学生と一緒に『のり巻きずし』を作る——〔家庭科・英語科〕
 - ・ 板書にチャートを取り入れて、 (2時間)
 - よく出てくる英単語や短文を記述する。 本時
 - ・ AET、英語科教師は英語で話しかける。
 - ・ 家庭科教師は正しい作り方を指示し、英語を使わせるように配慮する。

(3) 授業の主な流れ



(一) 授業の構想と指導計画(図2参照)
(二) 実践結果から
授業中の生徒は、いつもより生き生きとした態度で準備

も早くとりかかり、「留学生の人、英語で質問して」とか「のりは何と言うのやった」などと言いながら始めています。時々作ることに追われて日本語ばかりになったり、英語で

話すことに熱中して作ることを忘れたり、なかなか両方同時とはいかない様子でした。しかし、試食のころになると、各テーブルで短い英会話が交わされるようになり、終わりのあいさつも自然に英語で言うようになってました。そして、生徒たちの授業後の感想は、「いつもの調理実習よりずっと楽しかった」と答えた者が44名中36名、「英語と両方なのでいつもより真剣に取り組んだ」が27名で、意義のある授業になったように思います。

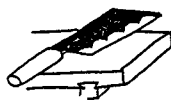
問題点としては、留学生役の生徒が日本語が使えないという意識が強すぎて、つい話しかけることをためらってしまふということや、用具や材料名を英語ですぐに言えない場合、黒板を見てしゃべると実習が中断されるということもありました。留学生という設定を別のことにするなど指導方法を工夫すれば、十分教材として活用できることを確認できました。生徒たちの「将来に役立つと思った」「今度アメリカの料理を同じ方法で覚えたい」とか「家庭科は大切な教科だと思った」「こんな調理実習をもっとしたい」など、家庭科に対する前向きな感想が目立ったこともつけ加えておきたいと思います。

五、おわりに

この授業は、英語科、家庭科の両方から新鮮さや意義が認められました。家庭科の授業の位置づけとしては、必ず

しも食物領域でなくても、家庭生活と結びつけて学習させることもできると思います。アメリカの食事作法やお祈りに対する感想の中に、「アメリカは日本よりしつけなんかしていない」と思っていたのに、ずいぶん厳しく、日本よりも礼儀を重んじ、感謝の気持ちを大切にすると国だと思いました」というのが何人かありました。客観的に自国や他国を見、家庭生活のあり方へと発展させていくこともできると思います。

今、私は三年生に、男女共学で「家族と家庭生活」の授業をしています。今度は私の手でこの授業をやらうと思っているとところです。家庭科を見直す一つの試みとして、ここに報告させていただきます。先生方のご意見がいただければ幸いです。



新しい家庭科を創るために

消費者教育の試み

(その2)

●山形県立新庄南高等学校

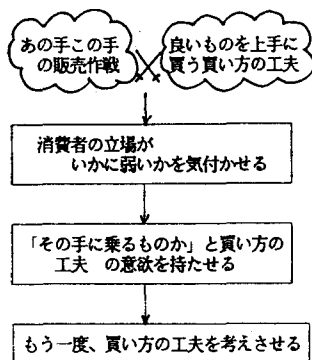
田村より子

一、あの手この手の販売作戦から

合理的な買い方を授業で取り上げる際、ストリートに入り過ぎて岩礁に乗り上げてしまった苦い経験をお持ちの方はいらつしやらないでしょうか。日頃何げなく過ごしているため、物やサービスの購入に不都合を感じていない生徒たちにとっては、「合理的な買い物をするためにはどうすればよいか、考えなさい」と言っても、なかなか乗ってはきません。あれやこれやヒントを与えながら発問しても期待する答えが返ってこないのです。結局は教師が答えを与えてただそれを丸暗記してテストに向かうという、上面だけの学習に終わってしまうことがあります。そんな時は自分の至らなさに深く反省をさせられます。そこで、与える授業

ではなく、少しでも生徒たちが主体的にかかわり、気付いていける授業にできないかと思い、次のような授業を試みました。

まず、クラスを物やサービスの買い手と売り手に分け、前者は良い物をより安く買う買い方の工夫を、後者にはあの手の手の販売作戦を練らせました。その結果、さすが商業科の生徒たちです。あの手この手の販売作戦は、私もすっかり感心させられるアイディア商法と、笑ってはいられないが笑ってしまうほど滑稽な悪徳商法で黒板が埋められ、活発な意見のやりとりがありました。しかし、買い手の工夫はさっぱりです。クラスの半数が頭を悩まして考えたにしては、余りに弱い攻防戦になってしまいました。これでは悪徳商法にまんまと乗せられてしまうと全員が納得。そこで、黒板に勢揃



付を見て買うと言つても、黒板を見てごらん。あの手の手の販売作戦では、古いものでも日付を新しく貼り替えて売るとありますよ。また、よく調べて買

いた売り方のあれこれをヒントに、良い品をより安く買う買い方の工夫をクラス全員で考えることにしました。「品質表示を見る」「日付を見る」「どの店が安くて良い品があるか数店比べて買う」は前に出ていましたが、黒板を埋めたあくどい商法が効果をあげ、包装や銘柄にとらわれやすい自分たちの買い方を反省する意見や、性能をよく見ないで色や柄等の見た目で買いがちな今までの買い方の反省を含んだ意見が多く出て、自らの生活を問う姿勢が出てきたことは大きな収穫でした。

まとめは、山形県消費生活センターが進めている、買い物十原則に合わせて、空欄に適語を埋めていくことで確認しました。一から九は無難に埋めることができたのですが、十番目の、不当なものは苦情を言うが出てきませんでした。そこで、「日

付を見て買うと言つても、黒板を見てごらん。あの手の手の販売作戦では、古いものでも日付を新しく貼り替えて売るとありますよ。また、よく調べて買

うと思っても、見ただけでは分からないように上手にだます売り方をされたらどうしますか」と、少し意地悪い質問をしました。すると、「店を信用するしかない」等と人のよいことを言うではありませんか。だから東北人はだまされやすいんだよ、と思いつながら「それでは、この九つのことを守ってさえいれば絶対損をすることはないかな？」と聞くと、「隣のばんちゃん健康布団を三十万円で買わされたんだって」、「日付を見て買ったのに、十個入りパックに二個も古くなった卵が入っていたよ」、「私なんか、次の日の日付が着いている牛乳パックを見たよ」とワイワイガヤガヤしめたと思ひ、「その時あなたたちはどうしたの？」と質問をしました。すると、誰一人としてそれに対して苦情を言ったり、返品したと言う人はいませんでした。

その時、突然一人が手を挙げて、「先生、これは市役所の

合理的な買いもののポイント (買いもの10原則)

1. **目的** に合わせて **計画的** に買う。
2. よく調べて **研究** して買う。
3. **季節** の商品は **買いどき** をえらぶ。
4. **店** をいくつか廻って **比較** してえらぶ。
5. なるべく **現金** 買いをする。
6. **包装** や **銘柄** だけにとらわれない。
7. **表示** や **保証** 内容をよく見る。
8. **量目** や **規格** に注意する。
9. **ラベル** や **マーク** などをよく見る。
10. 不当なものは、苦情を言いましょう。

人が警察に取り締ってもらわないとだめだと思えます」、「んだんだ」。クラス中皆納得顔です。そこで私、「なかなかよい考えですね。でも、何十何百もある店の商品一つ一つを全部調べて回ること、現実問題としてできるかな?」「そんな暇ないかな」と生徒たち。「それでは、物を作ったり売ったりする人たちに、ごまかさずによい物を適正な売り方で売ってもらうための方法ってないかな?」「モヤモヤガヤガヤ。ここでチャイムが鳴り、残念ながら時間切れです。法律を作り、それを守らせようとする意見や、悪い物を買わされたらそれをきちんと店に言い交換してもらうなどの意見を期待していた私は大いにがっかりしましたが、次の消費者問題の動機づけになればと、また期待しています。

二、消費者問題の公開授業

いよいよ公開授業の日です。生徒たちには「たくさんの先生方が見にいられしやるけれども、普段通りでいいからね」と言っておいたのに、あっちの顔もこっちの顔も相当の緊張です。ずらり取り囲まれますのでから無理ありません。ところで、私の授業では、その日必要な調査を輪番で担当班が調べておくことにしています。この日も新庄市役所で消費者を守るためにどんなことをしているかを聞い

て来ることと、我が町唯一の生活協同組合の活動を調べて来ることを頼んでおきました。いつもならほぼ期待どおりの発表があるので、そう気にもなりませんでしたが、これほどの緊張ですから心配です。つい「事前に確かめておけばよかったかな」と弱腰になってしまいました。しかし、「いつも通りでいいという筋はやはり通さなければ」と、迷いを打ち消しながら大きく深呼吸をして職員室を出ました。

チャイムが鳴り、さあスタートです。前時学習の確認は買い物十原則の穴あきシートをOHPで写し、空欄を埋めることで始めました。前の時間、あれだけ活発な発言があり、私に「これならいけるぞ」と大いに期待を持たせただけに、買い物十原則の穴埋め作業でのつまづきには、見事に出鼻をくじかれました。しかし、さもあらんと気を取り直して、忘却の早さに少々皮肉を返しながら、もう一度復習し直した結果、導入部で計画時間をはるかにオーバーしてしまいました。

次に、消費者の権利にはどんなものがあるかを導き出すために、前回好評だったあの手のの販売作戦で出てきた悪徳商法を手掛りに、次頁上図のような道筋で進めようと思いました。

ところが、消費者問題を課題化させる所で、またまた足止めをくってしまいました。班討論にも慣れ、分析したりまとめたりする学習法も身についてきたので、それ程大きなつま

あの手この手の販売作戦

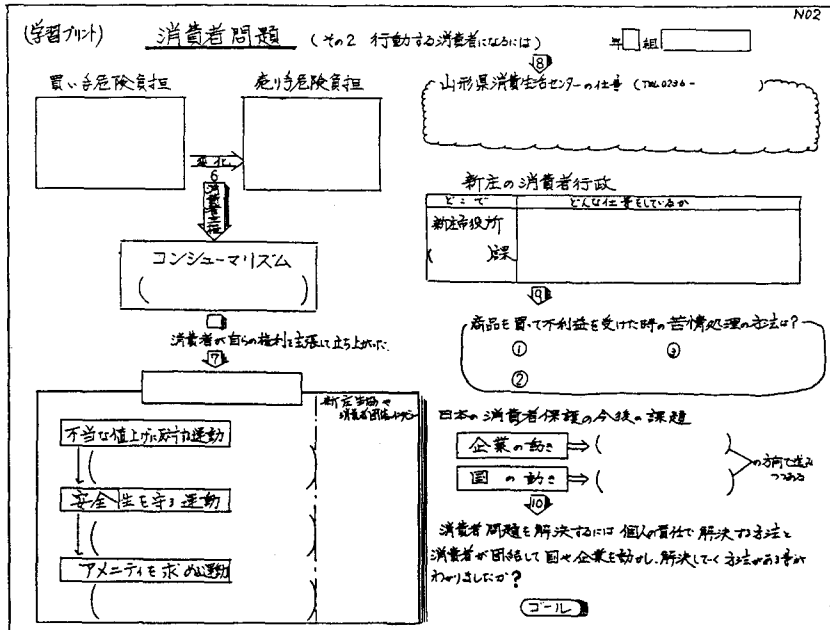
問題となる商品や売り方を
分析しまとめてみよう

消費者問題を課題化させる

そうした商品や売り方によって
私達のどんな権利が奪われるか
考えてみよう

消費者の守るべき4つの権利

づきはないだろ
うと推測した私
の考えが甘かつ
たのです。発問
のしかたが不適
切なせいもあり、生徒たちは
すっかり戸惑っ
てしまい、どうまとめてよいかわからず班討論がさっぱり
です。期待したものの半分ほどしかまとめられず、私もす
っかり焦ってしまいました。しかし、彼女たちの戸惑いに
気付いた以上、この戸惑いに目をつむり、準備した答えを
与えて次に進むことはできません。しかし時間もないので
す。与えて進むか、よく考えさせて進むかの選択を迫られ
た私は、ここで大きく指導案を変更し、よく考えさせて進
む道を選びました。計画では、消費者運動の例として合成
洗剤追放のスライドを五分間見せることにしていたのです
が、ここをカットすることになりました。また、消費者運動
の対象が単なる物の価格や安全性にとどまらず、私たちの
生活のすべてを包む住環境のアメニティにまで広がってい
ることを認識させたいと思ったので、森の中の小川のせせ
こぎと工場やバイパスの騒音を聞かせ、その音の比較から



住み心地よい住環境を守る運動の重要性とその活動例に触れたいと思ったのですが、これも時間の関係で無理のようです。これらを次の時間にまわすことにして、かろうじて次の事を消費者問題として引き出すことができました。

●消費者問題として取り上げたもの

- 1 不当な価格 2 農薬、食品添加物 3 欠陥商品 4 悪徳商法
- 5 過大広告 6 過大包装 7 不当表示 8 その他

あれこれ難産の末ここまでくると、後は消費者の守られるべき四つの権利は容易に出てきました。それらの権利を保障するために定められた消費者保護基本法を取り上げ、合理的な購入法と無駄のない消費の姿勢を身につけた、賢い消費者になるための啓発を終えました。後半は行動する消費者になるためにどうすればよいかを柱とし、担当班の調査発表中心の展開になりました。市役所の商工観光課で消費者行政を行っていることや、生協の無農薬野菜や添加物を最少限に抑えた加工食品の存在や灯油価格などの生協運動も含むもので、生徒のみならず私も大いに勉強させられました。

こんなわけで、反省点が多く心残りの授業でしたが、授業の主人公はやはり生徒なのだ、改めて考えさせられた授業でもありました。

編集室からあなたに I

◆特に家庭科にかかわっている方に

We のこれまでをふり返る時、このささやかな雑誌を媒体に、実に豊かな人と人の出会いがあったと思うのです。でも、どうしてでしょう。彩り豊かなその人間模様の中に、家庭科の先生の影が薄いのです。家庭科の可能性を広げ、家庭科を開き、生きている・くらしている人から家庭科への注文や希望をどんどん受け入れ、家庭科がたくましく太るようにと願ってきました。家庭科の外からは新鮮な風が吹き込みました。それを家庭科の創造に生かした方たちも、いらっしゃいます。内山裕子さんの「よそおい」をヒントにした方、原発を授業に取り入れた方、「家族—どう変える、どう変わる」からコピーして、生徒と共に考えた方……。

でも、どうしてでしょう。家庭科の先生からの反響が、あまり活発でないの

す。

あれこれ思案して、We の本誌では、テーマが広がりすぎるのかと、ネットワークを出発させました。夏増刊号は家庭科を中心に上げることになりました。この号と共にお届けする夏増刊号は「家庭科の可能性を探る」です。増刊号だけでも一人歩きできるように、と願って編みました。感想をお寄せ下さい。例月号のみを契約していられっしやる方も、We を読んでいられっしやらない方にも、おすすめしたい内容です。切手で721円お送り下されば、すぐお届けします。

家庭科の先生方、あなたの出番です。どうぞ、もっと声を挙げて下さい。ここ2～3年の間に、仲間をつくり、ホンネで語り合い、お互いに力をつけましょう。家庭科の先生が、ご自分を出して誌上で活躍して下さいを願っています。

「シャプラニール」

―市民による海外協力の会―

〈手嶋 明美〉

シャプラニールは、一九七二年設立以来、バングラデシュの農村で活動している民間海外協力団体です。

現在は農村の貧困層によるシヨミティ（相互扶助組合）作りを軸にした、養蜂、養蚕、植樹、予防接種普及事業などの草の根開発プロジェクトを実施しています。

ダッカにフィールドオフィスをもち、日本人駐在員一名とバングラデシュ人スタッフ六名が、協力を続けている地域へのアドバイスやトレーニングを適宜行っています。

東京事務所では、10名のスタッフを中心に、会報（隔月・年間講読料二千円）発行、国内での開発教育、現地の団体のプロジェクトで作られた手工芸品の販売協力、会計などの幅広い活動を展開しています。また、全国の会員との交流を深めるため、各種学習会、合宿、スタディツアー、全国研究会など、年間を通して様々な企画があります。

シャプラニールでは、このような活動のお手伝いをして下さるボランティアの方々を募集しています。学習会や集会準備、会報編集、お出かけバザーなど、何でも結構です。会員、非会員、年齢、経験を問いませんので、どなたでもご参加下さい。もちろん、会員も募集しています。

連絡先 〒169 東京都新宿区西早稲田2-3-11 早稲田

奉仕園スコットホール気付 ☎ 03-202-7363

自己紹介 一ふぐりぐりイキイ

「アフリカ行動委員会」

〈高柳美奈子〉

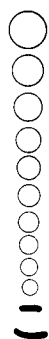
この会の特徴は、個人の自発性が行動の基準になっていて、集団としての拘束がほとんどないことです。つまり、毎週火曜日七時から行われるミーティングで承認されれば、やりたいことができます。「こんなことをしたい」と提案した人を中心に結成された小委員会が、昨年は四つでしたが、今年は七つにふえました。たとえば、アパルトヘイトをなくするために経済面から迫りたいと考える人たちが作っている『南ア商品ボイコット小委員会』、南アの庶民と直接つながりを持ちたいという『南アに手紙を書く会』、苛酷な歴史の中で生きつづけて来た黒人女性たちの叡知と力から学ぼうとしている『女性ぐるーぶ』等々。

これ等の活動をとおして、「反アパルトヘイトの活動をすることは黒人のためだけではない。アパルトヘイトを止めさせることは、日本の社会の体質を変え、我々自身が自由になり人間的になっていくことだ」と気づかされます。

今夏、『女性ぐるーぶ』が中心になって、南アの黒人女性を招き集会やコンサートを開きます。人権を大切にしないう政府や企業、それを許している庶民の意識に波紋を投げかけ、日本の社会の体質を変えるきっかけにしたいと思っています。

連絡先 〒150 東京都渋谷区恵比寿4-5-23-306

☎ 03-443-9775 （会報年間講読料：二千円）



だま

「評価」をめぐる

竹見智恵子

五月号、六月号を拝見し、思わず「うーん」とうなずいてしまいました。

やはり、評価というものが、隠然とした力を持って今の教育全体を支配しているのだと思わずにいられません。それと、これほどみんなが気にしていながら、その実態がよくわかっていないというものも少ないのではないのでしょうか。特に五月号では、「内申書」という巨大な化物を取り巻いて、先生も生徒も親も、手も足も出せずにいるという印象をうけました。

その点、六月号では、家庭科という教科にしばってあるので評価の問題点が見えやすく、書かれた人たちのそれぞれの受け止め方がじかに伝わってきました。

その中で、ひとつとても気になった文章がありました。それは、柴崎和恵さんの書かれた「評価―私の試行錯誤の一面」という文

章です。

この中で柴崎さんは、学校の評価の方針と共にご自身がどのように評価について考え、実行されているかを述べられています。それはすっきりとマニュアル化され、(教師から生徒へ)一方通行の評価にならないような配慮もちゃんとされています。これは有無を言わせぬ強圧的な評価が横行する中で稀有なことでしょう。『波』欄で半田さんが「見事!」と感心されていましたがつともなことです。

でも、生徒の身になってみたら、そんなに感心してはいられません。というのも、掲載された資料を見ると、柴崎さんは愛や性、生命の誕生、家族の問題など、深くこころの内側に触れる問題を授業の主題にされているようです。このような、人類として普遍的なテーマであり、それでいて問題はまったく個人の心性に属するようなテーマでは「正解」はありませんからテストにもなじまないでしょうし、生徒からすると、A、B、C、Dとランクづけすること自体に不自然さを感じてしまわないでしょうか。

それに、授業をうける生徒たちは生身ですから、さまざまな体験、さまざまな状況を引きずって教室に足を運んでいることでしょう。その中に、たとえば現在親や異性との愛の葛藤に悩む生徒がいたとして(高校二・三年生という年頃ならこうした悩みを持たない生徒の方が少なくらいでしょう)、そういう立場にある生徒が愛についてレポートを書く「気の重さ」を生徒ならずとも思わずにはいられません。だいたい人間というのは、こころの内側までは、よほどの関係でないかぎり晒したくないものです。まして評価の対象にされることには大きな抵抗があるでしょう。柴崎さんは、「私が評価できるのは生徒の学習だけ、人格や人間は評価できない」とおっしゃっていますが、テーマを見るかぎり、人格や人間性抜きに、『人間生活科』の学習が成立するとは思えません。

愛や性の問題は、彼等にとって、そのまま生きることに重なっていることでしょう。ですから逆に、愛や性について具体的な悩みや問題をかかえていれば、授業を受ける中で、天啓を受けたように、一瞬にして「愛とは何か」を理解するということもあるのではないのでしょうか。でも、そうした深い学びが、か

ならずしもいいヘレポート」になって教師の目に触れるとはかぎりません。それよりもこちらの内に問題を抱え、むしろ、ほんとうにしんげんに学んだ生徒が「出席日数不足」であったり、「課題取り組み不足」ということも多いにあると思います。たとえば、両親が離婚の渦中にあるとしたら、家族について語る言葉を失っているでしようし、講義を聞くことさえ疎ましいと感じるかもしれません。

「コンピューターと暮らし」の碧海西葵さん。日本の「ヒープ」の草分け的存在。十五、六年前、企業を回って、消費者とのパイプ役の女性が必要と説得。77年電通、続いてハウス食品から依頼があり、今にいたる。

大学院在学中、本業そっちのけで通ったアルバイトが縁でTBSに入社。当時は、新入社員は、アシスタントディレクターとして何でも一人でこなさねばならず、それがあとで活きることに。

67年に夫の転勤でやむなく退職し渡米。幼い下の子二人を連れてスーパーに行っては、隅から隅まで商品を丹念に調べ、食べ歩きの会に入り、ひたすら調査。三年後に帰国し、

そうした生徒を「単位取得不可」として切り捨ててしまうあやうさを『人間生活科』や『家庭科』ははらんでいませんか。

申し出があれば生徒の話も聞くし、学籍簿も時には訂正するというのですが、はたしてどれくらい生徒が話し合い、訂正を申しでることでしょうか。それというのも、点数評価ならいざ知らず、基準のあいまいな評定では、それをくつがえす根拠もあいまいにな

海外駐在員の夫人対象の講座の講師を。

三人姉妹のまん中、お人形遊びよりも竹馬を奨励されて育つ。何でも自分で作ったり修理したりなさったお父様譲りで、ものを作る

〈コンピューターと暮らし〉の 碧海 西葵 さん



こと、新しいことへの挑戦は苦にならない。

小学校二年まで毎朝、学校へは遅刻。空き教室で先生と話しながら一時間めの終了を待つ。四年で転校。変わった子だと、一年間クラ

らざるを得ないでしょう。

どんなかたちの評価であれ、評価をされる側のものには重圧となっているものです。こちらの中にまで届く授業をして、その後で「評価の目」に晒され、ランクづけされるということは、私にはいたたまれないことに思えるのですが、みなさんはどうお感じでしょうか。

ス中から無視される。自分を十分表現できるようにになったのは、中二から高校にかけて、演劇への熱中の時期を経て。東大美術史学科に進んだのちも演劇への熱はさめやらない。

十一～二年前、三百人劇場で、大学のクラブの同窓会公演でブレヒトのミュージカル「ハッピーエンド」を上演、主役の若い娘の役を。夜稽古のため二週間ほどヒマをくれと家族に申し出て呆れられたという。三年前に「旅路の果て」を上演。またそろそろ血が騒いできて、と碧海さん。

飄々、淡々とした、周りに惑わされないマイペース。それでいて、クレージーな部分をどこか抱えていて、ハツと目のさめるようなことをなさるのがまた魅力です。（稲昌）

家 族 と 家 庭 科

酒井はるみ

47年学習指導要領家庭科編（試案）と

新旧家族観

新教育制度のもとで発足した家庭科は新時代の要請にこたえようとした新教科であった。一九四七年四月に公表された学習指導要領家庭科編（試案）の内容は、家庭的教科の過去を知る者には衝撃的であった。一部を紹介しよう。

はじめのことは

家庭科すなわち家庭建設の教育は、各人が家庭の有能な一員となり、自分の能力にしたがって、家庭に、社会に貢献できるようにする全教育の一分野である。

この教育は家庭内の仕事や、家族関係に中心を置き、各

人が家庭建設に責任をとることができるようにするのである。（中略）

小学校においては、家庭建設という生活経験は、教科課程のうちに必要欠くべからざるものとして取り扱われるべきで、家庭生活の重要さを認識するために、第五、第六学年において男女共に家庭科を学ぶべきである。（中略）

家庭は社会の基礎単位である……（中略）……人々の性格は家族のうちのおの異なる個人個人が、家族という関係において、一般的な（平生の、日常の）家族生活のうちに、互に刺激し合い、反応し合いながら行動して行くうちに、発達するのである。

「家」制度の時代には「家」の伝統を守ることが重要視されていたが、家庭の仕事と家族関係を二つの柱とする家庭建設という表現に、新しい家庭づくりをめざす意味がこめられているのは疑う余地がない。だが、おかしいのである。ここには個人の尊厳とか民主主義、自由・平等などという民主化を表現するキイタームが盛りこまれていないのだ。そのような概念や言葉がとびかっていた時代に、これはどうしたことだろう。そこで関連教科として、学習指導要領社会科編（Ⅱ）（47・6）をみたところ、次のような表記がみられた。

各家族の人格の独立の尊重と、その独立をもととした相互扶助の精神と、生活を科学的に改善してゆく努力によって家庭生活が建設されなくてはならない。

われわれは家庭の制度を(一)社会の健全な基礎を供する面をすべて保存するという観点から検討し、またそれと同時に(二)民主的社會の基礎として家庭生活を改善することが必要である。

社会科には盛りこまれていたのだ。このことから、家庭科は民主化がすすんでいなかった、という結論を出すのは性急である。家庭科と社会科との間になにか分担のようなものがあつたのかもしれないからである。しかし、結果的には、のちに公刊された教科書が民主的家族をどう描いたかをみると、家庭科におけるあいまいな記述と、社会科における明快さに決定的な差異を認めることになるのである。

さて、指導要領(試案)作成の際、憲法24条に基づく家族観が貫かれていたのだろうか。実はそうすんなりとはゆかず、新旧二つの家族観が存在したのである。一つはCIEの大森松代(現山本松代)の家族観で、新憲法をふまえた「民主家庭」を強調した。それは平等な男女が協力して建設するものだから、男性も家庭について学ぶ必要があるし、女性も無給女中ではなく、独立した社会人として社会に責任を持つ

必要があるとした。家庭では家族員が子どもにいたるまで一人一人固有の位置を占め、人格が尊重される。そしてよい隣人関係をもつ開かれた家庭が民主社会につながるなどが考えられていた。

この新しい家族観は伝統的な家族観とぶつかり、戦後すぐの不安定な家族が安心して受け入れるには異質すぎる家族観であつたのかもしれない。文部省の家族観は、家族員一人一人を尊重するとか、人格の独立を示すよりも、家族が仲よくまとまることを強調した結果、「家庭の楽しいひと時」にみられるように、家族の団欒が中心的内容となり、団欒をもつて家族の和を強調した。子どもも「多忙な母への感謝」の例にみられるように、親と同じ一個の人格というよりも、親の子どもという位置づけられ方で、社会に開かれた家庭も描ききれなかった。

旧い家族観は国家主義につながるものとして排除されねばならないが、さりとて、CIE・大森の家族観をそのまま受け入れることもできず、文部省は、平等な家族に似ている家族の和を強調することで、権威と恭順の旧家族観とは一線を画し、新しい家族観に橋をかけたことにした。CIEの「検閲」下にあつたが、旧家族観を脱し切れず、民主主義の家族観の核心部分も描けず、新旧二つの家族観が重層したのである。

親子論と心理学

心の数量化——

心理テスト



小沢牧子

(カット・井田裕子)

●心理テストの二つの顔

心理学と言えば、心理テストを連想する人が多い。前回紹介した「親子関係診断テスト」は、子ども相談・教育相談の場で使われる代表的な心理テストのひとつである。

今回は、心理テストの役割についてもう一步考え深めてみたい。週刊誌のうしろの方のページなどによく載っているゲーム風のたのしげな心理テストの顔。一方、ひとりの人間の身の置き方に大きな影響をもたらすことのある、いかめしい顔。心理テストは、「おもしろい」と言われたり「こわい」「ぶきみ」と言われたりする。ゲームとしての心理テストは、やるかやらないかを自分で決め、その結果を信ずるか信じない

いかは本人に任されている。一方、専門家が来談者・患者におこなう心理テストの結果は、「する側」から「される側」へ一方的に告げられる。それはいわば秘技である。

心理テストのこの二つの顔をどうとらえたらよいのだろう。そしてゲーム風心理テストが雑誌に載っていると、思わずやってみたくなる私たちの気分は何を映しているのだろうか。

●数値のもつ効力

「性格にも偏差値!?」 広がる性格テストの波紋」と題する番組が、過日TV放映された。五月二十三日の「おはようジャーナル」である。例の「親子関係診断テスト」が、「登校拒否」だったWくん親子をめぐって登場していた。Wくんのご両親は、相談機関でそれぞれこのテストを受けるよう指示される。結果は夫が八十七点で子どもに甘すぎ、妻が六十点で厳しすぎると指摘され、両親のこの態度の差が子ども「問題」をひき起こしていると告げられる。Wくんはその後、半年間、自分の意志に反して精神病院へ入院させられてしまう。

画面に登場したWくんのお父さんが、息子を入院させてしまった行為をふり返って、「詫びても詫びきれものではない」と語っておられたのが心に残った。「専門家」が数字を示して「問題」について解釈し、子どもを親から離すことが必要であるとして入院を勧めたとき、それをやすやすとうのみにしてしまったことへの後悔が、そのことばにこめられている

ようであつた。

Wくんの「強制入院」をめぐるのは、「専門家」する側」からは、おそらくいろいろ言い分があるのだろう。しかしここでもっとも注目すべきことは、心理テストの結果とされる「数値」をWくんのお父さんがいまもよく覚えていられるという事実である。数値などはテストの本質ではない、それにふり廻される素人の意識が問題なのだ、と「する側」は言うかもしれない。けれども、心理テストを使いたいと考える側にとって、その利用価値のもっとも大きなものは、目には見えない心とか能力とかよばれるものを、ともかく、数値化するという側面なのだと思ふ。

●許される個性、許されない個性

心理テストは、知能テストと性格テストの二本柱で成り立っているが、知能テストについて考えてみると、ことはもつとはつきりする。「あなたのお子さんのIQは72でした。この指数では、普通学級でみんなと一緒にやってゆくのは無理です。特殊学級のようなお子さんに適したところで、ていねいな指導を受けられた方が……」というおきまりの表現があるが、このとき普通学級からの排除の根拠として数値が活用される。さらに、「境界線児」、「自我の未成熟」などの専門用語とともに、「科学的・客観的」という表現が非常にしばしば用いられる。「心理テストは人がみずからの手を汚すこ

となしに排除の役割を果たしうる貴重な道具だ」という意味のことを言つて心理テストを擁護した心理学者がかつていたことを思いだす。「科学的・客観的にみて」という言葉と数字に、しろうと・親は弱い。

最近、小・中学校に性格テストがこれまで以上に積極的に導入されていることが問題になっている。導入・使用する側の言い分は、「問題の早期発見・治療に役立つ」、である。日頃問題視している子どもを封じこめたり排除する口実として、コンピューターによつてはじき出された数値が便利に「活用」されていくことがあつてはたまらない。

心理テストによつて身の置きどころが変わるほどの決定的な影響を蒙るのは、いつもひとにぎりの人びとである。「問題」、「障害」、「異常」などの名のもとに。心理テストは個性を測定するということになっているが、この人びとは、共存したいほど問題の大きい（許されない）個性の持ち主だと診断されてしまうのだ。そのひとにぎりの群に入ることはおそらくあるまいと安心してゐる多数の人びとは、それでもかすかな不安にかられるがゆえに、安全圏にある自分の個性や指針を確かめなくなる。そして雑誌の心理テストを見ると、ついやってみようと思ふ心が動く。

「こわい」と「おもしろい」の裏表は、こんなふうに私には見えてくる。

海の輝く日

多く朝の歌

(その1)

佐藤通雅

(カットも)



宮柊二に『多く夜の歌』という歌集があります。人の寝静まった深夜に作品を作ることが多いので、この題がつきまじった。その本を手にしたとき、「あ、自分なら『多く朝の歌』とするところだな、いや厳密に言えば『全て朝の歌』だ」と思いました。夜型、朝型とありますが、私は徹底した朝型で、親・兄弟からはじめ、友人・知人にもあきらめられているぐらいです。なにしろ九時には就寝して、朝四時起床なのですから。「九時なんて宵の口だぞ」と彼らはいいます。友人・知人には文学をやっている人、出版・マスコミをやっている人がけっこう多いので、一時二時が普通の夜という感じなのでしょう。

いつ頃からこうなったかといえば、幼年時ですね。気がつ

いたときは早起きでした。なぜ早く起きるかといえば、夕方七時頃になると、もう眠くてたまらなくなります。それで早寝しているうちに、必然的に早起きになってしまいました。親も兄弟も夜ふかしなのに、どうして自分だけこうなったのか不思議です。ところで早く起きて誰も遊ぶ相手がいません。幼少年時代は岩手県の前沢という山沿いの町に住んでいましたから、山の散歩に行きました。帰ってきてはまだ誰も起きていません。なにしろ四時ですから、暇つぶしに何をしようかと考えてはじめてのが、ご飯炊きです。当時はガス釜も電気釜もありませんから、まともに薪で炊くのです。マツチで紙に火をつけ、薪をその上に乗せて燃え上がらせました。重いふたからグツグツと泡がこぼれ、少し引いたなと思うタイミングを見はからって薪を抜き、残り火にします。はじめは何回か失敗しました。しかしやがてこの呼吸をすっかり体得し、ほとんど名人になりました。幼稚園児の頃です。そういえばこの四月、ウイ書房におうかがいしたとき(五月号「ひと」参照)、今の時代グルメグルメっていうけど、ご飯を炊きあげたあとの香ほどすぐれたグルメはないって話しました。ふたを取ったとき、湯気がフウツツと立って、顔をおおうんですね。そのときの香、最高のグルメだと思ってきました。稲作民族として生まれ合わせた幸福をつくづくと感じる瞬間です。

ところでその後、燃料が石油やガス・電気になり、私の〈名人芸〉は全然役に立たなくなりました。木で炊いたご飯と機械で炊いたご飯じゃ、まるで味がちがうんだよなんていったって、誰も聞いてくれません。そういうとき私は新美南吉の「おじいさんのランプ」を思いました。電気が入ってきたので、ランプがいらなくなる、ランプ屋のおじいさんは木に吊るし、美しく輝くランプをこわしていきます。考えてみればいつの時代でもその道の名人がいたんです。狩猟時代には弓の名人。ワナ作りの名人。土器を作る名人。デザインの名人。汽車で走る頃は石炭を投げ入れる名人。そしてつい最近までいたのが米作りの名人ですね。

もちろん現代も新しい名人が生まれています。しかし、やがてこういう熟練工は不要になっていく。長い歳月を費して、体で覚えた腕なんて、かえって非能率的だと。そのとき技術者は自分の半生を否定されたという、どこにも持って行き場のない悲しみを覚えるにちがいありません。もちろん新しい時代に合った技術をもう一度身につければ問題はありません。でも、もういいかげん歳で、心身ともに柔軟性を失っていることが多いんです。それに新しい技術というものは突然出てくるのではなく、長い間の助走があつて可能になります。子どもたちがテレビゲームに興じるでしょう。あの指の反射的な動きは、コンピューター社会を生きるための訓練でもあり

ます。ほら、ワープロだつて「あはどこだっけ」なんて頭で探す人はもう失格なんですね。戦争だつてこれからはコンピュータ戦争でしょう。「あはどこだっけ」ではもうやられてしまいます。0・001秒が運命を決める時代です。

燃料としての木や木炭が石油にかわっていったのは、私が小学六年頃からでした。ご飯炊きの〈名人芸〉がいらなくなったので、はつきり覚えていきます。早起きにはじまったこういう体験が自分に何を残したのかといえます（その後少しづつ時間をかけながら考えたことなんですけど）、第一に人間の進歩の過程では次々と〈腕〉を捨てていったということです。もしこの腕を惜しむあまり、現代にも残そうなんていうと、必ず觀光化してしまいます。手造りの味、手造りの里とかいうように、それはあまりにわびしいことです。しかし第二にかつて自分の手で何ごとかをやったということが、人間の原点への糸口になるということです。生活への直接性といつてもいいでしょう。そして第三には便利さをいつでも相対化していけるということです。便利になることは現代では〈善〉です。しかし実際はその度合いだけ私たちは何もものを失つてきているんですね。失いながらも疾走していかなければならないのが現代ですが、手ばなしで酔う気にはなれません。かくしていつでも数歩遅れて歩くことになります。この遅れもまた人間への懐しさの糸口だという気がします。

どんな相手とも

対応していける力が

もう少し欲しいな

——中嶋里美さんへの

インタビュー——

NETWORKNETWORKNE

広がる ネットワーク 〔V〕 平井 雷太

NETWORKNETWORKNETWORK

過労の末に網膜剝離になった」

*

平井…今、一番関心があることはどんなことですか？

中嶋…コミュニケーションです。私は今まで自分が感じたことや怒りをもったことなどを、事実を通じて自分のことを隠さず語ってきました。それによってネットワークは広がってきました。でも、今はどんな相手とも応対していける力がもう少し欲しいなと思っています。

平井…今まで、相手によつては一緒にやれな

かった？

中嶋…この一年体の具合が悪くて休職していたでしょ。近所の人に来て夫婦喧嘩の相談とか聞いていたのだけど、何かズルズル引きずられてしまう部分があつた。

平井…どういうことですか？

中嶋里美さんは「交流 186号」（増野潔発行）に、「仕事をやめたいこといっぱい」という一文を寄せていました。その一部を紹介します。「二十五年間教師をする中でやれることはみなやってきてしまったし、あまりよく知らないことも知っているように言わなくてはならない底の浅さをこれ以上見続けたくはなかった。何よりも、もっと自分が豊かになることを優先したく思った。十八歳から働き、その間ずっと夜は洋裁学校、司書になるための学校、大学と転々とし、教師になってからは、昼は仕事、夜は大体男女平等の運動にとびまわっていた。体が頑丈ならその状態も続くかもしれないが、胃潰瘍や十二指腸潰瘍を何回も繰り返してきた。そして

中嶋…話を聞いているとおもしろくなっちゃうのね。なんでこの人はこんな話をしているのだろう。それを言っていけばいいのだろうけど、そのところを切り込まないで関係を続けているとイヤになってしまつて。私は運動しているから一分でも時間が惜しい、そういう私が時間のたつぷりある人とどう接点を持っていくな。ナアナアじゃだめ。そう

いう時に、一步問いこんだ形だね。こっちも言葉を出す、向こうも言葉を出して、いろいろな人と対話をしていくには、やはり自分の立場をもう少しはつきり出していかないとダメだなと思っただけです。

Weの会とか仲間うちで言い合うのとは違うと思うのね。

平井..そうですね。塾やPTAにはいろいろな考えの親がいますから、ものすごく刺激的。だから、Weの会の危険性っていうのは、一見同じ考えで集まっているように見えるから、向き合って話をしなくても、一緒にいるだけで話が通じているような錯覚に陥ってしまうところにあるんですね。話してみると、本当は全然違う考えの人が隣にいるのかもしれないんですから。

中嶋..それはそうですね。

平井..自分にとって苦手な人と出会うのはいいですよ。そこにはズレがありますから、問題が絶えず起こる。同じ考えの人ばかり集まっていると問題が起きない、刺激にならない。だから、PTAなんて最高におもしろい。そこで何ができるかこちらが問われるわけです。

中嶋..そうですね。それが、最終的には力量みたいなことになる。自分を高める最高の訓練になる。

平井..だから、自分と違う人、近所のおばさんやPTAで出会うお母さん方は神様ですよ。言いたいことを言っている

だけでは関係は切れるだけです。

中嶋..私は運動体の中で、素直な自分を出してはいられないなという場面があって、そこで一言どう発言しようか、もし言わないで帰ったらこの次の会には来たくないな、でも来たくないということはどういうことだろう、とかね。

ですから、そこで自分をどのくらい主張できたかどうかということが、活動を続けていけるかどうか、快くやっつけられるかどうかの判断になりますね。だから、その一言が出ない時ってあるでしょ。言ったばかりに、相手にガツとやられてしまったらいやだな、と思うのは自分の体との関係があるような気がするんですね。

平井..でも、体が丈夫になればいいということではないんですよ？

中嶋..そうかしら？ 私の中では、自分が弱くから自分に負けてしまうというところがあるのかなと、私の中にパターン化していることがあるの。

平井..だからって、元氣になってね、力強くなるとなんかヤバイ気がしますけどね。弱い体を受け入れて、その体でできることをしていればいいと思いますけどね。

中嶋..いつからそう思うようになったんですか？

平井..僕は以前、躁鬱がひどくて、一年のうち半分は人にかえない、そんな状態を四、五年繰り返していました。精神

科にも行ってもなんの効き目なし。ここから抜け出れたのは治すことをやめたからだと思っています。ジタバタしても始まらないと躁鬱と仲良くした。鬱の時には今はエネルギーが溜まっている時期なんだ、悩んでも仕方ない、あせってもしょうがない、自分の体のことは自分ではどうにもならない、そのまま受け入れて経過するしかないと考えたんです。

中嶋..それはすごく大事なことですよね。私はどうしても早く元の状態にもどらなくちゃ、弱い状態を克服しなくちゃというところがありましてね。

平井..玄米を食べて元気になる？

中嶋..そうね、玄米正食の本ずいぶんもっているけど、玄米正食で元氣ハツラツとか、そんな本。玄米を食べていて、やるぞーっていう感じ。そう思っているのよね、自分も。

でも、何か自分の中に元氣はつらつにしたい、それはあるんです。なかなか病氣とか弱い状態を認めていく訓練はできていないというか、そういうところはありますね。

平井..それだと玄米でやることも、薬で補強するのも、基本的には変わらないと思うんですね。淡々と食べたいから食べるっていうのと、これを食べると栄養になると思って頑張って食べるのは違うでしょ。

中嶋..頑張って元氣な体になると、また同じかしらね。

平井..自分が頑張っていれば、その存在そのものが頑張っ

ていない人を責める結果になりますから、そんな人たちのコミュニケーションは相変わらずむずかしいです。

頑張って病氣の原因探しをしても、ほとんど意味がない。その人がたまたまそうなったに過ぎないね。

中嶋..でも、次にはこういうことはしないようにしようとか思いますが。

平井..しないようにしようと氣にかけると、そうなる。失敗をイメージするとそうなるっていうのもあるでしょ。

病氣になったらもう感謝。今までの生き方に警告をくれただけで、何をやったからそうなったということではないと。

中嶋..その考え方というのは、まずリラックスしますね。

平井..自分を追い詰めないですからね。

中嶋..原因を探すのに時間をかけても、同じ状態をいつも繰り返すだけなんですけどね。他のことは柔軟にできて、体のことになると一本調子になってしまふ。

平井..初めの段階で思いわずらうからですよ。

中嶋..そうは言っても、また考えないといけない。

平井..自分の命だから、多分大丈夫だと。

中嶋..体を信用する？

平井..体に任せることだと思いますね。人にも自分にもどこまで任せられるか、そのことと誰とでもコミュニケーションができることとつながりがあるような氣がしますけどね。

(5) 学校氏の欲望 (二)

まず前回の「六つの大切」を列記するネ。①同年齢によるクラス編成②教室③時間割④カリキュラム⑤教科書⑥試験・成績です。

これは何をインプリントしようとするのか。

①効率的な平等と均質を叩きこむ ②生徒の座る向きや姿勢の均質化により上下関係に親しませる ③社会は時計時間によって人間を効率的に支配することを示す ④学校主体での知識の分断と統合を宣言する ⑤学校は知識の独占支配をすると示す ⑥序列化の正当性を叩きこむことと、評価・認知の独占を示す、です。

①②③と⑥の前半が学校氏が社会からの要請に答えたことがらで、④⑤と⑥の後半が、その見返りに学校氏が社会から得た権力なのね。その権力の維持が学校氏の欲望。

初めて学校氏に接した時から、的確に授業内容を伝え、評価すると言う名の元に、実はこれらを体で教えこまれ、これらに慣れて行くのやね。学校での授業内容の総てとは言わへんまでも、多く

あっちゃ、こっちゃ、フッフ

田中正彦

が卒業後の生活に具体的に役に立たないと、時に私達が思うのは、その辺りと関係しているんやね。つまり具体的に役に立つこと位だけだと、別に学校へ行かなくても私達は学ぶことができる。だから、学校氏がその器で私達に叩きこみたいことを正当化するには中身の特殊化・特権化は必要なの。よって、学校氏を変えようとする試みは必ず「六つの大切」のどれかをいじる動作となる訳。

①に対しては異年齢集団 ②にはオープン・スペース ③には各教科を横断する授業 ④には手作り教科書 ⑤⑥には、試験や成績表の廃止。

ただし、氏はいつも逸脱することを恐れている。逸脱すればする程氏は自分やなくなるから。これらが全くない学校。それはもう学校やなくて、ただの日常生活でしょ。と言うことは、「六つの大切」のうちの幾つかを変えたとしても氏が常にこの逸脱から本来の姿に戻ろうとするのは当然の欲望。もし私達が、氏を殺すことなく、とりあえずは氏の振る舞いにクレームを付けようとするなら、その行為は永続的になされる必要がある理由は、そこにあるのネ。

「ほっとくとすぐ調子に乗るんだからあ」

パリのブルボン宮（国民議会）の入口には、正面に「鏡に蛇」、その両脇には「正義の天秤を見つめる理性の眼」と、「栄光の月桂樹に飾られる破邪の剣」のレリーフが刻まれている。

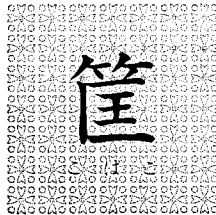
鏡は、自由・平等・友愛の理念をはじめ人民の諸要求をうつしだす真理のうつわ、蛇は、暗闇の中から確かなものを捉える知的探求心を表わしている。三つの造形は一体となって、民主主義の権力の最高機関の役割を象徴する。代表の原理の実現には理性的審議の原理が不可欠なのだ。

フランス人権宣言も、「鎖を解き放つ自由の女神」や「闇を破る理性の眼の輝き」で飾られた。私たちはフランス革命の成りゆきに眼を奪われがちだが、革命の情熱は啓蒙の時代を貫く理性的批判の精神につき動かされていたことと同時に、その精神は、右のような伝統的・感性的表現によって共感されていたことにも注目したい。私は、人権宣言末尾のプロプリエテ神聖化条項を、こうした状況にたち返って理解したいと思う。

プロプリエテは英語のプロパティで、この時期よりも百年も前から、ライフ・リパティおよびレジスタンスの諸権利と共に、不可譲・不可侵の基

革命

二百年



■村田直文

本的人権とされていた。しかし、時代を主導したブルジョアの生産財がそのプロパティとされ、不可譲でもないのに不可侵として主張されるようになると、これが人民の生存権を脅かす社会問題の種子ともなる。だからアメリカ独立宣言では、それは「幸福追求の権利」と言いかえられ、日本国憲法第13条もその軌をふんでいる。

プロパティ神聖不可侵の条項は、こうした状況の中で再確認された。それは本来プロパーなるものの意で、各人の個性によって築かれた固有のもの、かけがえないもの、計量的比較を許さないもののことだ。氏名・肖像・言語・服飾・髪型・指紋等々、個性的感受性によって評価される人格的財産権の諸要求がそれにあたる。それは「このるの財産」ともよばれ、憲法第29条の財産権とは区別されてきた。搾取や公害等の元凶として無資産の人民を苦しめたのは、プロパティ条項に関するブルジョアの曲解ではなかったか。

神聖不可侵のプロパティとは何か。人民は常に新たに、感性和理性をときずましてその創造に努めることを迫られている。フランス革命二百年の歴史は、私たちの生き方を問いたただすものだ。

幼児クラブ やってみる?

「こんな子どもに育ててね」

佐多和子

新しいことを始めるとなると、その是非をめぐる周囲の論議も盛んになります。水をさすような批判や軽蔑もあります。が、私達が会として考えていかななくてはいけない視点を教えられることも多々あります。幼児クラブを最初から創ろうとしてきた家族の父親からの発言はその後の会の方向を決める大事なきっかけとなりました。「二、三軒の母親・子どもの仲よしクラブに終わってしまうのではないの?」——いえ、そんなことはありません。友達になりましょうと、みんなで集まって親子一緒に弁当を持ち、どこかへ出かけたり、遊んだりするグループもあります。そんなグループの意義も良さも認めるけれど、でもそういう会を目指すつもりはないのです。私達は母親が自分の子どもにべったりとつくわけではなく、交替で保育しようとしているのです。自分の子だけでなく、よその子も一緒に保育をするのです。でも、母親一人一人が自分の判断だけで子ども達に接したら、子ども達は保育者ごとに違う基準に迷います。そうです、みんなに共通する基準、こんなことだけはして欲しくないとか、こんなことを考えて

欲しいというものを決めましょう。母親達みんなで、こんな子どもに育てたいという子ども像を描いてみましょう。

そんな基準がないと、どんなことを注意していいのか、どんなことを大切に保育するかがはつきりしません。さあ、話し合いです。いろいろな意見がでてきました。元気な子、意欲ある子、のびのびとした子、やさしい子、自分のことは自分でやる子、思いやりのある子、明るい子……

いろいろ話しあった末に、みんなが共通して望む三つの目標を決めました。"おひさまのもとで遊ぶ子ども・できることは自分の力でやろうとする子ども・生き生きとした子ども"

とは言うものの保育が始まった当初は泣き騒ぐ子ども達はどうするかで大わらわ、とても目標だの、子ども像などを考える余裕はありませんでした。それでも、メンバーが入れ替わり、活動が長くなると、会の中で揺れがあるたびに立ち戻るところはこの目標でした。新しく会に入ろうとする人にも、興味をもって会のことを尋ねる人にも、会の趣旨を説明するときに一番初めにこの目標について話します。

(カッター・加藤友子)



高遠高校での共学

その 4

男子の中にはマツカサやクマザサをとってきたのもいた。野草は、種類分けし、メインのヨモギは草餅にした。ノビルやノカンゾウは酢みそあえに、タンポポの花や葉は天ぷらに、ノミツバやナズナはおひたしにした。マツカサとクマザサの班には、ふき出しそうになるのをこらえて、「食べられるものにしてごらん」と言っておく。

香りのよい、美しい色の草餅もおいしくできた。酢みそあえや天ぷらもおいしくでき、大体のものは、天ぷらにすれば食べられることを知ったようだった。ノカンゾウは、「こんな草が食べられるなんて知らなんだヨ」と、平和な時代に育った生徒たちは口々に言った。第二次大戦後の食糧難のときには、今、田んぼの土手で青々と繁っているこのノカンゾウが絶えるほど、せつせと食べた、私の叔母は語った。

マツカサやクマザサに挑戦した生徒たちは、両方とも衣をつけて天ぷらにしたものの「固くて食えなかった」と言う。私もクマザサを食べてみた。クマザサのてっぺんに、まっすぐのびている

新芽は柔かだったが、あとの広い葉は、繊維が多く、口の中にゴソゴソと残って、とても食べられるものではなかった。「これが食べられたらパンダだよ」と生徒たちは笑いこけていた。

この場合、女子だけだったら、マツカサやクマザサをとってやることはないだろう。彼女たちは、事前に食べられないと判断すれば、「ためし」ということは、まずしない。しかし、男子には、こういうトライのしかたをする生徒が多い。かなり前に、家教連の和田典子先生のお書きになったものだったと記憶しているが、男子は、大根の天ぷらをこしらえたりするとおっしゃっていた。うなずけることであつた。また、この実習で、私は春先のヨモギがおひたしで食べられることを、生徒に教わった。これは全くの偶然だったのだが、ヨモギを摘みすぎて、草餅にしてもなお余ったのを、捨てるのがもったいないと（この頃の生徒はもったいないということを知っていた）、皿にアク抜きを済んだヨモギを盛り、上からかつお節としょうゆをかけて食べたのである。やわらかで味もよく、カロチンの豊富な料理になった。きまりきった材料で作る実習では味わえない楽しさがあつた。

湯 沢 静 江

渤海^{バルヘ}（ぼっかい）と日本

毎日、テレビの天気予報で朝鮮半島を見る。その兎のように姿の先にある遼東半島と、南の山東半島の間の深いきれこみが渤海湾である。湾の名は知っていても、そのもとになった渤海国について、わたしたちはあまり知らない。日本史でも、ごくかんたんにふれるだけだ。

渤海は、六九八年から九二六年まで、中国東北地方南東部から朝鮮半島北部にかけて存在した国である。唐と新羅の連合によって滅ぼされた高句麗の遺民が、その地にいたツングース系の遊牧民靺鞨とくんで建国した。高句麗の復活と称したので、朝鮮の歴史家の中には、統一新羅を南朝、渤海を北朝、南北朝時代として朝鮮史に位置づける人もいる。

七二七年、日本にはじめて渤海使がきた、高句麗の継承と主張したので、唐や新羅と緊張関係にあった渤海は、日本と結んで背後から新羅を牽制しようとしたようである。

だがまもなく渤海は、唐と外交関係を結ぶようになる。それでも日本との交流をやめなかったのは、貿易が目的だったからだ。渤海が、熊、虎、貂などの毛皮や、人參や蜂蜜、水産物など、主として天然の品をさしだすと、日本からは答礼品として、絹の糸、織物などの繊維や、工芸品をわたすとい

う朝貢貿易形式だったが、それらの繊維製品がめあてだったらしい。

この貿易自体は、日本にとってそれほど有利なものではなかったが、それでも交流を続けたのは、遣唐使の往来や海外情報への入手に、渤海の力を借りることが多かったからだ。

この当時の唐文化の受容は、遣唐使によるのみでなく、渤海使を通してのものも多い。たとえば八六二年から日本で採用され、十七世紀末まで使われた唐の宣明暦も、渤海使がもたらしたものである。

三十五回にも及んだ渤海使は、朝鮮半島北部の港から船出し、日本海の季節風やリマン海流にのって来航した。したがって到着地はすべて、出羽、能登、越前など、日本海沿岸各地である。私たちはいままで、日本海側を「裏日本」などとよんできたが、北方文化受容の表玄関であった北陸や山陰を見なおすとき、「表日本」中心の日本史認識が、いかに底の浅いものであったかを、悟るのである。このようなとらえ直しがなされるとき、渤海も又、日本史、アジア史の中で正当に位置づけられるのであらうと思う。

私の朝鮮史

岡百合子

食 べもの 文 化 史

石川 尚子

みそとみそ汁

日本人の食生活の基本は、米とみそであると言ってもいいほど、みそは私たちの生活に深く根を下している。

米の生産開始は必然的に塩づくりを発達させ、ついで、食塩そのものと食品との保存を合せ持つ醬の類を発達させた。

米・小麦・豆などを塩とともに発酵させた穀醬は、みその前身と考えてよい。手前みそということばに象徴されるようにみそは造り手により、あるいは地方地方によって独特な風味と色あいを醸し、我が家の、また、郷土の食文化を形づけてきたといえる。みそがこれほど日本人の食生活に大きな影響を与えたのはなぜだろうか。その理由を考えてみると、①身近かな食品を材料としていて、身分や貧富の差なく誰もが加工し利用できた ②応用範囲が広く、加工用に、調理用に、多様に用いられた ③不足しがちなたんぱく質を補うなど栄養的価値がある ④食欲をそそる風味がある ⑤保存性にすぐれ、いつでも、どんな時にでも利用できる、ことなどが挙げられる。

みそそのものの起源は古いが、みそ汁の常食は鎌倉時代に

始まったといわれる。それが全国的に広がるのは、室町時代からで、米食の普及、仏教の影響による精進食の普及によつたのであろう。また、一般庶民とくに農民の食生活の貧しさがみそ汁の普及と消費を高めたとの指摘もある。(川村渉著『みその本』柴田書店) 貧しさの象徴としてのみそ汁は、飢饉の記憶や食糧難時代の体験などによって証明されているが、みそ汁にはもうひとつの側面がある。

江戸時代には、日本料理の献立形式が整ってくるが、家庭における正式な供応食である本膳料理の本膳、一の汁はみそ汁であり、これは豊かさの象徴と言ってもいいであろう。

今日でもみそ汁は日本人の食生活に欠かせない。一汁三菜の献立に生きているばかりでなく、パン食にみそ汁、ファーストフードにみそ汁という新しいパターンも生まれつつある。おいしいみそ汁で食欲をそそり、海藻や豆製品・野菜・いも類・魚貝類など摂取しにくい食品をたっぷり摂れるという利点を生かすためにも、しっかり食物教育のなかにみそとみそ汁を位置づけてゆきたいものである。

よそおい

文と絵 内山裕子

先生と呼ぶとこまった顔

で「先生じゃないの、なおみさんと呼んで」。宮本なおみさん(52)、目黒区議会

議員。福島県、自由民権運動縁りの地、三春出身。Weでも

「政治の目」の連載でお馴染みです。パンツ歴13年。県立高

校時代、鍋底景気で就職口がなくクラスの半分が郡山の洋裁

学校に行く。そこで魅力的な先生に出会い「シックな服」を

教わる。グレイ系のブリーツスカートとブラウスの地味な服

を着、おしやれどころではなかったが、先生が各自にデザイ

ンしてくれたオーバーコートの製作は楽しい思い出。現在で

も服はなんでも縫える。卒業後上京しお針子さんに。越路吹

雪の衣装作りなど徹夜で働いた。パンツをはき始めたのは二

度目の選挙前後、40歳で次女を出産した時期と重なる。当時

パンタロンが流行したが、絶対似合わないかと敬遠していた。

しかし選挙、出産と動き回らなくてはいけない必然からパン

ツにトライ、これがグッドですよ。颯爽として気分はいい

し、すっかりパンツが楽しくなる。パンタロン時代は長く続



ハロニツオヤジさん 宮本なおみさん

き、その後Gパンもはくが、きっちりしてきつい形はなじまない。二、三年前から柔らかな素材のジョパーズをはき、とても気に入っている。区議会にもパンタロン、Gパン、ジョパーズとその他の愛用の日常着でかけている。最初は「議会はスーツ」と思っている人ばかりで大騒ぎになる。年輩女性議員にトイレに呼び出され「スーツを買うお金もないのか」とお叱りをうける。しかし最近では、1言いわたたら3言い返すなおみさんのパワーに恐れをなして、誰もいわなくなる。たまには土井さんのようにスーツにハイヒールで、とリクエストも受けるが、私のカラーじゃないものね、と。議員のイスはゆったり坐り易い。この上であぐらをかいたり、立て膝で野次を飛ばすなおみさんにはパンツは必需品です。足場の悪い工事現場、学校建設の現場視察にもパンツは大活躍。議員生活18年、活動を共にする女性達も変った。40代の主婦も夜間外出し、集会に若い人達と集まる。ここ10年、パンツスタイルも圧倒的に多くな

った。服飾関係に勤める長女は、辛口アドバイザー。でもパンツはいつも誉めてくれる。夏は白・ピンク・黄と明るく、冬は黒・紺・茶と渋くきめてるが、昭和末の自粛ムードに抗議して赤も着た。今日も真紅のバラのブラウスに、なおみさんの心意気が、夏の光にキリッとあざやか！

コンピューターと暮らし

前回少々尻切れとんぼに「コンピューターと教育」の問題を仄めかしたままアメリカ映画の話を終わらせてしまったところ、さすが編集者、しっかりと宿題を頂戴してしまった。4月7日付け朝日新聞の「コンピューターに揺れる教育現場」の記事に意見を求められたのである（朝日がコンピューターと語尾をのぼしていることは嬉しい）。教育の専門家ではない上に、コンピューターの活用を打ち出したという新しい学習指導要領の内容を詳しく知るわけではないからもしかすると的はずれになるかもしれないが、「揺れなくてもいいのに」という私見を二回に分けて述べよう。

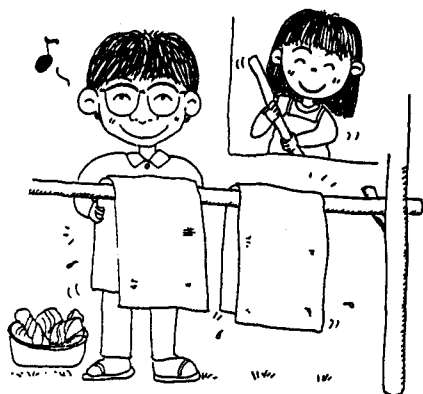
勿論記事が触れている「教材作りが教師の負担になるのでは。かといって授業を市販のソフトを利用したパソコン先生に任せていいのか。パソコンを充分に設置できる予算が自治体で計上されていないのでは」といった基本的な疑問は私にもあるがまず現状指摘をひとつ。郵政省のパソコン通信普及の検討会で学校教育への導入が議論された時、この情報化時代、一般家庭でさえファックス用に二口の契約をする時代に公立校の多くは電話回線が一本しか引かれてないという話があった。教育の現場で情報の送受信の体験的な実習を含め、コンピューター利用の指導をするつもりなら当然

複数の回線が必要となる。アメリカの消費者教育のモデル校のように教室で株式投資を実際にやらせる程の勇氣は教育者にも親にも欠けていようが、学校内に電話が何本もあつては管理面で問題がなどと言いかねない旧弊な体質だけはまず改善しなければならぬ。

コンピューターは何度も述べているように、誰でもがその働きを目で見て理解し得るようなガラス張りの箱ではない。調理や工作や算盤のように因果関係が誰が見ても明らかなのとはまったく異質な教科だと思う。コンピューターという機械を解剖して、生徒にその働きを説明して見せることもできない。だからこそキーボード操作は徹底して慣れさせるべきだ。値段の高いパソコンより、最近の多才なワープロをできるだけ多数設置し、ワープロによる記録・整理・表現・推敲・印刷といった生活知識と技術を中途半端でなく実習させ、道具として使いこなせる自信を育てたらよい。タイプライターを日常的な道具として実感する欧米諸国の生徒と比べれば日本の子供たちはもともとハンディを背負っている。コンピューターを畏れ敬うのでなく、自己実現のまことに便利な手段として親しませることを第一段階と考えるなら、費用と機種選択にだけ議論を集中させればよいではないか。（続）

その5

碧海西葵（あおみ ゆき）



「僕は洗濯をしてふたりの暮らし」

よしだあきひろ

(イラスト 十倉ゆかり)

連絡先：〒665 兵庫県宝塚市亀井町5-8

石けんコンサート通信 <5>

晴れわたった空の下でふたりの暮らし
僕は洗濯をして

彼女は掃除をしている

僕がオムツを干している

彼女は窓から微笑んでみていたよ

いっしょに語ろう 毎日の暮らし

いっしょにつくろう 毎日の暮らし

(詩 吉田明弘 曲 山本謙吉)

高校時代からの親友が結婚をしました。それで披露宴に出かけてきたのですが、会場に着くと「桶谷家・白坂家」なんていう案内がたつていて、なんだか不思議な気分になってしまいます。だって僕は親友のことをそんな視点で見たことがないですから。

披露宴がはじまって、会社の上司や親戚に友達、そんな人たちのスピーチを聞いていると「彼女に家庭を守ってもらい、仕事に励んでください」とか「頼られる夫になってね」なんて、僕の思っている夫婦生活とはどうもイメージが違ふようです。それで僕はやっぱり「石けん」の話をしながら「男も暮らしを担おう」とメッセージして、粉石けん石けんシャンプー、無螢光タオルをプレゼントし

たのですが、さて彼はどう思っているのでしょうか。

詩人の川崎洋さんは、同人誌の仲間世話をしてもらって、初めて彼女を誘った喫茶店で結婚式をしたそうです。式次第はガリで刷って、大岡信さんが詩をプレゼントしてくれたりして。貧しかったけど今も誇りに思うと言われています。(岩波ジュニア新書『ことばの力』より)

こんな話を聞くと僕はうらやましくなっています。きっと川崎さんだって費用がなくて、苦心した結婚式だったのでしょう。でもいまの結婚式、ごちそうはたくさんあっても何だがおいしくないし、ふたりさておいてのカラオケにスピーチ。ちっとも楽しくないのです。ほんとうはふたりを囲んで、これからの暮らしのことを語り合い、心をこめて歌ったり、踊ったり。別に賑やかに騒がなくても、ふたりがいて僕たちがいて。それでいいではありませんか。料理だって、ふたりで打ったソパでもふるまえば、それがふたりの味になっていくのです。

ふたりの暮らしが静かにはじまってくような、そんな結婚に憧れるな、僕は。

波

地球市民として生きる力

半田たつ子

“自立した女と男を 人間らしい生活を差別のない社会を 育み創り出す”新しい家庭科では、国際結婚は教材としてどのように料理される（されている）のであろうか”

大津和子さんの問い（本号27頁）が目飛び込んで、弾かれたように起ち上がった私。大津さんに答え得る家庭科でありたい。そのために、私にできることは何？

民主化運動を弾圧し、粉砕する中国当局に日々憂慮し、心を痛めながら、実は私も思っていた。この生きた教材を、「現代社会」の授業は取り上げるのだろうか、と。

学生や市民は、なぜ民主化を叫んで起ち上がったのか。中国政府は、なぜ武力で弾圧したのか。列車焼き打ち事件の死刑判決と性急な執行に、国際世論が反発する中で、なぜ続々と極刑に処していくのか。一連の行為をど

う見るか、隣人として私たちに何ができるのか——高校生は先生に問い、先生は答えているのだろうか、と。

家庭科も、社会科も、原理原則や定説を十年一日のように語ってすむ教科ではない。生きた現実と切り結ぶ授業は、生徒の眼を覚まし、揺さぶり、心を耕す。教師の側が、なまの材料を教材化する経験を積み重ね、自らの力量を高めているならば。大津和子さんのように。

◆
四十万人を収容できるという天安門広場は、中国近現代史の生き証人として、歴史の節目節目に登場してきた。

一九九一年五月四日、北京の大学生五千人が、反封建・反帝国主義を掲げて請願デモ。中国近代史の夜明けである。

一九四九年十月一日、毛沢東は門の襖を開か

ら「中国人民在此站起来了！」（中国人民はここに立ちあがった）と、新中国の誕生を全世界に宣言、この日、中国現代史は始まった。一九七六年四月四日、故周恩来を偲ぶ数十万の民衆の花輪で広場が埋めつくされた。深夜、当局が花輪を撤回したため、翌五日民衆が警官と衝突して、双方に多数の負傷者が出た。世に言う天安門事件である。

九月、毛沢東が死に、華国鋒が台頭、四人組は打倒され、中国は装いを新たにする。

◆
そして、一九八九年六月四日、広場を埋めた学生・市民の「自明と民主」「腐敗一掃」「官側懲罰」との喚声、あふれる熱気。しかし、流血と徹底した摘発、見せしめの処刑によって、今そこは重苦しい沈黙に覆われている。これは、どんな時代の前ぶれなのだろうか。

華奢で楚々とした柴玲の悲痛な、だが凛とした声を聞き、テレビの映像に胸塞がれつつ私は、樺美智子さんを思っていた。一九六〇年六月十五日、「アンボ・フンサイ」のシェンデモの波、これを抑え込もうとする警官隊との激しいもみ合いの中で、一人の女子学

生が庄死した。東大生、樺美智子さんである。

連日デモに出かける娘に、その日の朝、母親は、「また、デモに行くの？」と声をかけた。娘はキッと向き直り、「お母さんも、理想を持って生きてちょうだい」と言った。そして、娘は遂に帰らなかつた。——新聞で読み、私は四歳の娘を見て思つた。この子も成人後「お母さんも、理想を持って生きてちょうだい」と言うのだろうか。この言葉をくり返し自分につきつけながら、娘を育ててきた。



立教大学で講座を持った最初の年、一九七六年、中国の留学生が十人余り聴講していた。第一回の講義が終わるとすぐ、数人が教卓に近づいて「先生の言葉は大変美しい。日本語の勉強になるので、録音してもいいですか？」と流暢な日本語で尋ねた。ある時、私は「朝鮮動乱のころ」と言ってしまった。「動乱ではありません。戦争です」とビシヤリと抗議した優秀な人たち。中国のリーダーとして、彼らは今どんな立場にいるのだろうか。彼らに出会って、私は『中国——生活の質』（W・バーチェット著、杉山市平訳、筑摩書房）を読んだ。中国の市民が「生活の質」という言葉で互いに励まし合っていると知って、日高六

郎氏を招き、「生活の質」のタイトルで講演をしていただいたこともあった。

この春、妹がある大学で、留学生のカウンセラーをかねた仕事に就いた。中国人留学生の祖国を憂う姿が痛々しい。英文の原書を日本語に訳すのだが「一時間かけて五行しかできなかつた」と呟く学生に、「持っていらいっしやい。一緒にやりましよう」と声をかけ、二人で四頁訳せた時、「日本へ来てから、こんなに励まされたことはない」と言つたそうだ。

中国政府に、欧米諸国は厳しく非難しているが、日本政府の態度は齒がゆい。でも国と隣の危機に、何かしたい、何がやれる？こんな問いを、生徒が発するような授業ができたなら素敵だ。「国際化」は、世界史を学べば身につくものではないのだから。



山本美知子著『女ひとり中国を行く』北斗出版を読んだ。山本さんは全共闘世代。中国で文化大革命が吹き荒れていたころ、大学の現代中国研究会に属していた。宿願だった中国への旅を、三十代後半で決意する。仕事をやめ、夫を残し、たった一人で。約七か月で費用は三十七万円という貧乏旅行。だからこ

そ、素顔の中国をよく見る事ができた。

それまでに訪れた国は、ソ連、東ドイツ、ユーゴスラビア、西ヨーロッパ諸国、アメリカ、ネパール、トルコなど24に及ぶ。旅によって自分に出会つた、という山本さんは、私には子どもがなけれど、もし子どもをどんな人間に育てたいか、と問われたら、「自分で計画をたてリユックをかついで、世界をひとりで歩けるような自立した人間に」と答えるだろう、と書いている。「好き嫌いなく何でも食べられる強じんな胃袋、栄養に気がつけながら体をコントロールする自己管理能力、洗濯や縫物など身の回りのことをやりぬく自主性、情報を得たり他国の人とコミュニケーションする語学力、誰とも仲よくなれる社交性。自分で計画を立て実行していく行動力。少々いやなことが起こつても、めげないネアカな気質、未知のものを見たいという旺盛な好奇心、他国の文化、習慣、価値観を認める柔軟性、他国を馬鹿にせず、あなどらない草の根的視点」だど。百パーセント共感する。地球市民として生きる力を育てるために、得難い素材が今、身の周りにあふれている。教師が、それを教材として生かす力量を、自ら育てるなら、授業は輝きを放つだろう。

読書から

● ● ● 今月の



稲 邑 恭 子

『死を招く援助』

ブリギッテ・エルラー著 伊藤明子訳

◆'85年、西独で出版され、その「開発援助を全面的に中止せよ」との厳しい告発が大きな論争を巻き起こしたという話題の本。著者は元社民党議員であり、西独の経済協力省で十年間援助担当官を勤めた。'83年秋バングラデシユの現地視察により、「援助」のもたらす悪しき実態に衝撃を受け、帰国後直ちに職を退き、内部告発である本書を著す。巻末に、松井やより氏、大橋正明氏の対談（日本の援助は誰のために？）もあり、「援助」を考えてみたい方には是非お薦めしたい本。

（亜紀書房 一五〇〇円）

『暮らしのなかの第三世界』

北沢洋子著

◆'59年から'67年まで、アジア・アフリカ人民連帯機構カイロ事務局に勤務、北京の書記局を経て帰国後、日本企業の南ア進出の実態調査を行い、'74年国連総会で日本の国連決議破りを証言、その後も「南北問題」を一貫して告発してきた著者が、砂糖、とうもろこし、空缶公害、熱帯雨林、金、石油、原発、粉ミルクなど身近な「モノ」を通して私たちの暮らしがどのように第三世界に関わりを持っているかを解き明かしてゆく。

第三世界の累積債務、「援助」の実態にもふれながら「南北問題の真の解決は私たちがまずこの贅沢な生活を捨てることであり、誰も犠牲にすることのない、結果的には（自分の身の丈並みの生活）をすることである」と。

（聖文社 一二〇〇円）

『女・開発・第三世界』

フー・ガイク・スィム／トルース・ウェルズ著 ヤンソン由実子訳

◆今まで重なることのなかった消費者運動と女性解放運動の二つの流れの共通の基盤をみ

いだすための第一歩としてつくられた本。

行政者や開発コンサルタント立案の開発プログラムのはずれ、無駄、現地の人々への抑圧を批判しつつ、ほんとうに貧しい人に届く開発をするには、貧しい人々を男も女も一括りにするのではなく、最もしわ寄せの行く女たちにターゲットを絞ったものが必要と訴える。（協同図書サービス 一五〇〇円）

『ストリートチルドレン』

国際人道問題独立委員会報告

日本ユニセフ協会訳 緒方貞子監修

◆世界的に進む都市化に伴い、開発途上国の都市を中心に、街頭で働いたり暮らす子どもが増えているが、本書は今まで進められてきた開発の中身、先進国の責任を問いつつ、各国の状況、取り組みを紹介し、具体的行動への方策を探る。

あまりにも非人間的な管理社会ゆえに、街頭に住む自由さえ奪われている日本の「隠れストリートチルドレン」たちにふれ、堂本曉子氏は、「逆説的ではあるが、いまや一般社会がうかつにも失おうとしている価値を創造し、保存している」ストリートチルドレンと共通する、彼らの持つ人間的な社会の再生に

むけての可能性に希望を託している。

(草土文化 一五〇〇円)

『世界経済入門』

西川 潤著

◆国際経済が大きく揺れる今、通貨体制は、経済摩擦は、あるいは食糧、資源はどうなるのか。「国民にとっての真の豊かさとは何か」に、常にたちかえりながら、世界経済の構造をわかりやすく解説し、日本の進むべき道を探る、「地球的視野で考え、地域的次元で行動する」ための国際経済の入門書。

(岩波新書 五五〇円)

『貧困』／『人口』／『食糧』

西川 潤著(岩波ブックレット№18・22・27)

『誰のための援助?』

村井吉敏・甲斐田万智子共著(同№77)

◆四冊とも岩波ブックレットのシリーズ。中身の濃い、わかりやすい小冊子(各三一〇円)

『東南アジア通信』

◆誌面の三分の一を占めると思われる写真は、活字の限界を思い知らされるほどに説得力があり、そして限りなくやさしい。辛口の内容であるのに、現地で活躍しているボラン

ティア、フォト・ジャーナリストたちの、実感に裏打ちされた淡々とした記事は清々しく、現地に住み、あるいは日本を往復し取材やインタビューに飛び回る編集者たちの、ホットだが囚われのない眼差しはやさしい。子ども対象に、こういう雑誌があればと願う。

3号「東北タイ」4号「タイの学校」5号「日本の戦争」(各四百円) 6号「山岳民族」7号「タイ・カンボジア国境の一〇年」(各五百円)、年間購読料(年四回) 二五〇〇円(青山社 東京都品川区西五反田2-26-7)

『地球環境報告』

石 弘之著

◆北極から南極、成層圏から深海底まで、広範囲に加速度的に進行する生態系の破壊。十数年間、八十カ国以上を踏破調査した筆者が、最新のデータを折り込み、様々な角度から警鐘を鳴らす。環境破壊には、先進国の「裕福な国の浪費」、新興工業国の「経済発展優先の環境軽視」、そして天然の資源を食い潰さねば生きて行けぬ「貧しい国の貧困」と三つのタイプがあり、「今、緊急に求められているのは、この富める国のぜい肉部分をどう貧しい国の荒廃した自然の回復に振り向けるか。そして、

新興工業国は、先進国の古い環境破壊の教訓をどう学ぶかである」と。そして何よりも先に手をつけなければならぬのは、緑の保護と再生であると。(岩波新書 五五〇円)

『アジアと女性解放』11号・19号

——暮らしの中のアジア——

「アジアの女たちの会」主催の「女大学講座」の記録集。私たちの暮らしの中に入ってくるアジアからの商品が、アジアの女たちの可憐な労働に支えられていること、また、一方では、日本が輸出した商品が、彼女たちの暮らしを脅かしていることを考える手がかりに。11号では、化学調味料、粉ミルク、化粧品、えび、バナナなどをとりあげています。(各四百円、申し込みは「アジアの女たちの会」〒150 渋谷区桜ヶ丘14-10 渋谷コープ21号)

『アバルトヘイトとニッポン』

アフリカ行動委員会

◆アバルトヘイトに関するQ&Aが、日本語と英語で併記され、南アの状況、日本と南アの関係、私たちに何ができるか、を考えてゆく小冊子。高校生の英語教材として最適。

(三〇〇円 渋谷区恵比寿4-5-23 1306)

わたくしからあなたに



◆「野越え山越え『国』を越えて」——このすてきなフレーズは、実は借りものです。『風

は国境を知らない』（河出書房新社）という爽やかな本の著者でもある、私の若い友人の斎藤ゆかりさんが、イタリヤ統一国家形成期の思想について書いた修士論文の結びの章に、こんな魅力的な章名をつけたのでした。人びとの感覚・考え方の中の「くにざかい」の容易ならぬ越え難さを思うとき、私はいつもこの語句を思い出して、長い野道山道をさあ行こう、とみずからを励ますというわけです。

もうひとつのエピソード。大学時代、クラス一の美人をもって自他ともに任じるA子さんについて（こんな話題が成立しえたのも「女の園」なるがゆえ？）伝説的に語られていた笑い話がありました。小さい頃から彼女は、「あなた、何人？」という問いに「わたし、美人！」と答えた、というものです。この話が「笑い話」であるためのひとつの要因として、「何人？」という問いには（彼女および私たちの場合は）「日本人」と答えるの

が当然である、という前提があったと言えましょう。

現在小学校二年生になる私の娘も、幼稚園のときどこで聞いてきたのか「わたし、日本人なんでしょ？」と言いだしました。「そうね。でも、ほかにいろいろな言い方できるわよ。地球人とかアジア人とか、東京人、東久留米人、滝山（住んでいる町の名です）人でもいいわけじゃない？（本当は、通常使われているのとは違う意味での「宇宙人」を入れたかったですね）」「ふうん、そうかあ……」というわけで、さっそく「国」の相対化に取りかかったものでした。

単一民族国家なる神話がしつこく生きのびているせいもあって、この日本では特に、民族と国家とが感覚レベルできちんと分離されないきらいがあり、「国」やら「国民」やらをめぐる諸問題に余計な混乱を生じているという事情をふまえて、足もとに用心しながら歩くつもりであります。

ともあれ、Weの特集テーマが「国際化」か

ら「地球市民として生きる」へと発展したことをうれしく思います。昔から、インターナショナルイズムとコスモポリタニズム（『地球市民として生きること』の違いを言い立ててナショナルな土台を持たない地球市民主義はダメだと言う「国・際」主義者の言説には、だんぜん反発してきましたので。

（東久留米・瀬戸井厚子）

◆地球市民として生きる——テーマは、何を求めようとしているのか。市民ということばは、都市国家を形成していた古代ギリシャのアテネで、その都市の完全な資格のある一員として、アテネの民主政治に参画した人に対して名づけられた名称であったはずだということをお思い出しながら考えた。私たちは、地球社会の完全な資格をもっている成員であるかどうかを問われねばなるまい。

私はいま、国際化という時、地球環境の課題として存在している酸性雨、温暖化、オゾン層破壊、砂漠化、熱帯林減少、廃棄物越

境 海洋汚染などのことが頭に浮ぶ。

今年の三月に「いま、アジアが見えますか」という朝日新聞編集委員松井やよりさんの講演を聞いた。経済大国の日本の豊かさは、アジアの人たちの貧しさや厳しい労働と密接な関係があるということを生々しく取材経験を通して話された。大規模な森林破壊という問題についてもふれ、熱帯林を守る運動に極めて不熱心で関心を示さない日本人のことも指摘された。五月十八日の朝日新聞では、地球環境問題についての日米欧共同調査質問と回答が取りあげられた。それによっても日本人のもつ地球規模の環境保護に対する関心度の低さを示すものであった。

それらのことは、裏を返せば地球市民としての市民性がいかに欠如しているかということではない。

同和問題にしても長年その解決のために取り組まれてはいるが未解決である。そのことは、人類普遍の原理である人間の自由と平等のことである。

オゾン層が壊されるとマスコミが叫んでもその朝も整髪料のスプレーが平気で使われる。森林破壊がすすんでいるといっても、紙の消費には無関心。海や川、湖沼が汚される

というキャンペーンがあっても、米のとぎ汁は雑排水として流される。一体地球市民としての市民性はどうなっているのか。地球市民として国際化の問題を考えようとする時、地球上の多くの課題の解決のために健全な世論形成の主体者であるかどうか。国際化ということは、自分の好き勝手なことをしたいということではない。

ODAも年間百億ドルを越え、一二八カ国に援助している。しかし、「世界全体への貢献か、日本の利益か」という昨年十二月の総理府の世論調査では、日本の利益のためにが四二・五％、世界に貢献することを第一にが三八・二％である。

地球市民としての国際化に必要なことは、Weの表紙に書いてある「自立した女と男を」「人間らしい生活を」「差別のない社会を」「育み創り出す」という実践テーマが私たちの生理的なものになっているかということである。そのことは市民性の内容として、「自我の確立」「人権の尊重」「合理的な生活態度」「科学的精神」「社会連帯意識」があるということである。

私は地球市民としての国際化ということ、は、まず自分の足元が、その市民性を自分の

ものになっているかということであると考える。上すべりでない地球市民としての国際化とは、地球の痛みを自分の痛みとできる皮膚感覚をもっているものだと思える。常に相手（地球上に住んでいる市民）の立場に立つて、ものごとを考えることができるということであろう。そこには地球上の多様な民族の文化も等価値として尊重できる人間性があるというものである。

（北九州市・前田紀道）

編集室からあなたに II

◆夏季フォーラムの申し込み、いますぐどうぞ

参加したいなあ、でも遠いなあ、と諦めてこられた九州の方たち。今年こそチャンスです。水俣に関心を持ち環境問題を授業にどう取り入れるか考えている方、女性史や差別について学び語りたい方、さあどうぞ！

◆宮坂広作著『消費者教育の創造』できました

消費者教育は、新しい家庭科の重要な柱です。教育学者としての見解から、消費者のものの見方、考え方の枠組み、様式の自己変革を援助することを追求し、提案した本著は、消費者教育を語る人必読の書です。直接ウィ書房にご注文下さい。

Weの 読者会だより



〈We兵庫の会〉

◆五月十四日、神戸市立勤労会館で。テーマは「しなやかな女と男の関係Ⅲ、結婚改姓を考える——」でした。遠く福知山から村岡さんがおつれあいもごいっしょに今回も顔を出してくれました。「結婚改姓を考える会」から四人の若い方の参加があり、総勢二十名で活気のある会でした。

・小川かおりさん——学校事務職、自ら結婚予備軍を名のる。日本の法律婚で九七・八%が「夫の姓」を選択しているといわれているが、この数字には旧姓を通称として使用する場合や届けを出さない事実婚を含んでいない。各国の姓の事情も紹介しながら、最近の長男長女時代の「墓」の継承から新家意識派の台頭など、「別姓」問題は女と男の関係、社会・国家と個人の関係を問い直すこと。

・松井史子さん——結婚で姓をかえたくないと考えている時、新聞の投書で夫婦別姓について知り、勉強しながら、親、彼、自分を丸くおさめる方法をとった。実生活編(表札・手紙・通帳・キャッシュカード・パスポート等)・会社編(給与明細・保険証・社内文書・名刺等)を紹介、一つ一つ便法を効果的に使いながら柔軟に対処、上司にも理解者が。

・栗本裕子さん——別姓結婚一年八ヵ月、結婚改姓、通称使用、ベーパー離婚、転職という道をたどる。改姓によって相手のイメージの中に取りこまれたくなかった。苦しい時期の体重が大幅に減少、今はほんとうに明るい。広瀬正彦さん——養護学校勤務。Weのメンバーと話していると将来は家庭科の先生になりたいと思う。彼女との性格・考え方の違いをどのように克服していったか、百組の男女のくらし方は百通りあるはずと。

四人とも重い問題をかかえながら、明るい話しぶりでした。この後高校に勤める二人の姓にかかわるおつれあいとの問題、親、職場での問題が出ました。管理職は上向き保身の対処で、個人の考え抜いた思いへの配慮はおろか悪質な干渉もあったとのこと。転勤した新しい職場で、旧姓を用いようとしたもう一

人も、押しきられてしまったが、職場には理解者もあるとのことでした。

若い人たちの報告に対し「姓が変わることによって一人前になる」と考えていた人、夫の姓に早くなりたくて、それが「幸福になる」とだと信じていた若い日を述懐する人。戸籍が人間をしばっている現状から解放されること、意味がなくなってきたという戸籍をなぜ後生大事に残そうとしているのか——更に突込んで話し合いたいと思いました(入江一恵)

〈We大阪の会〉

◆五月二十一日(月)。場所は千里の公民館。参加者十三名。府立高校の教師を辞め、二年間タンザニアで夫婦で生活し、二月に帰国された高崎和美さんに来ていただき「タンザニアの田舎で見た男女の役割」ということで、スライドを映しながら話してもらいました。

「人々は生活していける最低限の労働をし、後は暑さで何もできないということもあるが何もしない。生活に余裕のある者はない者を受け入れ一緒に生活する。日本の企業が進出し、その家族が雇うメイドたちが、その家の物を何でも持ち出すので、すべての引き出しに鍵をしなければならぬ」という話を聞いたことがあった。私は人々が貧しいからだろう

と思っていた。しかし、そうではなく、持てる者が持たない者に与えるのがあたり前の彼等には、罪悪感がほとんどないのだということを知った。鍵の束を持ち、一向に働こうとしないメイドや、工場の労働者たちにイライラする我々日本人の豊かさって何だろう。そして発展途上にある国々に対して、資源の有限を理由に人口抑制が唱えられる。しかし彼らの生活ぶりは質素で資源の無駄使いをしていないのは我々なのだ。自分たちの生活を変えようとせず、資源問題、原発問題……を論ずるのは空しい」と高崎さんは指摘する。

キャツサバというイモを主食にする彼らの生活は食のみではなく、住も衣も貧しい。しかし赤ん坊や子供たちが泣いているのを見たことがないという。忙しさの中で、子供が泣きわめいている我々の日常の光景。しっかりと子供を抱いてやる余裕がない。「貧しいから、かわいそうなのではない」という高崎さんの言葉を私は忘れないだろう。他にも男と女のくらしぶりも興味深かった。教育やお金の普及が生活を破壊している様子等、わかりやすく報告された。

次回は九月十日(月)。中央青年センターにて。「フィリピン女性の就業」について志方

順子さんに話してもらおう予定。(北川好美)

〈We 東久留米の会〉

◆五月二十七日(土)、団地の集会所で。東久留米の会には、読者会のメンバーになった方が先で、しばらくしてからWeを読むようになった人がいます。私もその一人です。数年前、半田さんがこの地に播いた種が、ゆっくりと一粒ずつ芽を出しているのです。毎回Weの感想のほか、メンバーがいま問題にしていることを何でもかんでも話しています。今回は人数こそ片手で足りる淋しさでしたが、いつもどおり本音のひとつになりました。母子保健法改悪、就学時検診、親子給食、原発、障害者差別、管理教育、日の丸・君が代など「ノー」と言いたいことがいっぱいです。納豆のねばねばのごとく問題は糸を引いて相互に繋がっています。思考はアメーバ状に増殖して伸び広がり、考えている私を押し潰しそうな勢いです。いま何が一番気になる？ いま私に出来るのは何？ いま私はどこにいます？ 私は誰？ 会に出るとき私は、人を通して自分を探していくような気がします。自分でも捉えがたい未確認思考物体、それが私、それがひとだと思ふのです。ひとは評価を越えてひとですひとは、まるごと、ひとです。

七月は二十八日(金)の午後七時から、滝山団地一街区の第一集会所で。(木村美実子)

(問合せ先) ☎ 03(34)72-6206 瀬戸井厚子

We 夏季フォーラムへのお誘い (No.4)

田中裕一氏をご紹介します。

田中先生は、熊本市の中学校で社会科を教えておられます。ニーチェの「足元を掘れ。そこに泉が湧く」という言葉を口にされませんが、先生の前にあつては、何もかもがほんものの教材として、素晴らしい意味を持つてしまふのです。例えば、校舎建築の時のボーリングから地層の歴史的成り立ちを検証したり、大洋デパートの火災の時には、燃えてグニャグニャになった製品を授業に使われるなど。また、便所で貴重な歴史的資料を見つけられたというのも有名な話です。このように、常に複眼的思考で、構造的に本質をとらえて授業を創っておられます。

国が水俣病の原因を塩化水銀と認める前に、いろいろな資料を集め、初めて授業で水俣病を扱われました。資本主義の利潤追求という構造の中で行政とチツソの責任や患者を取り巻く差別の構図を明らかにし、民衆の生命の尊厳を訴えられました。詳しくは、フォーラムの中で。お楽しみに。(二見妙子)

Weに なんでも言おう なんでも聞こう



◆昨年九月初めより、私と息子（以下「彼」とします）は機会があるたびに、新聞・雑誌などに、「性格テスト」への疑問や私たちが体験したことを話してきました。そして四月のある日、NHKに電話をしたのです。電話は総合テレビの「おはようジャーナル」に回され、若い女性が「とにかくお会いしてから聞きましょう」と言って下さいました。この時のこと、決して忘れません。

数日後、新宿で会い、私は薬をもつかむ気持で、業者テストをお見せしながら、次から次へ、私たちが体験したこと、知り得たことを話しました。夜、自宅にその女性ディレクターKさんから電話があったのです。

「番組にできるようなので、協力します」

私はほっとし、さっそく彼に報告しました。「えっ、本当なの。NHKが、信じられない気持ちだよ」と彼は笑顔を見せました。彼は自分の仕事ぶりや、仲間達のたまり場などでインタビューに応じたようです。

放映は五月二十三日に決定。千秋の思いでカレンダーを見る毎日でした。当日の朝、いの一番に妻がテレビの前に座り、続いて私。彼は「友人たちと見るから」といって、外出してしまいました。照れ隠しでしょうか。

番組の中ごろになって、彼の姿、そして私が登場しました。彼の証言は重大でした。それにしても、彼がよく、まっ正面から顔を撮らせたものと驚くと共に、屈託なく質問に応じてくれたと、感謝をし、彼の自立した姿を見て素直に喜びました。

彼が以前から言い続けてきたことは「僕と同じ生活を強要させられている子ども達を救ってあげたい。親や教師を反省させるために真実を語るしかない。自分のプライバシーを護ることも大切だけれど、役に立つことなら証言や告発をする覚悟はできている」です。やっと今回、身をもって実行したのだと思います。

ともあれ、やっと世間の目に触れることが

NHKテレビ放映後の視聴者の反響

電話で

・お母さんと思われる方から	28名	励まし、感激、お礼、参考になった等
・お父さんと思われる方から	1名	同上
・子どもと思われる方から	4名	同上
・教師と思われる方から	4名	批判の立場で
・コンピュータ関係の仕事をしている方から	2名	うち1名、励まし うち1名 批判的

総数

39名

手紙で

4通（再放送後の反響は含まれていません）

東京23区 性格テスト実施状況（中学校のみ、回答・各区教育委員会）

足立区	全39校で実施、2年生対象、2種類のテスト使用。
新宿区	実施校あり。数不明。予算化していない。
世田谷区	実施校あり。数不明。予算額200万円。
目黒区	12校中11校で実施（昨年度）、1年生対象。予算計上、額不明。
千代田区	5校で実施。1年生対象。予算60万円以上（小学校分も含む）
渋谷区	全校で実施。1年生対象。予算計上、額不明。
板橋区	各中学が独自に実施。予算計上、額不明。
中野区	各中学が独自に実施。数など不明。予算化はしていない。
港区	全11校で実施。予算計上、額不明。
練馬区	全34校中31校で実施（昨年は全校で実施）、1年生対象、予算99万7千円
豊島区	全13校中4校で実施予定（本年度）、予算化していない。
江戸川区	職業適正テストを全校で実施。予算化していない。
荒川区	実施していない（進路テストは実施）
大田区 文京区 杉並区 墨田区	未調査、不明。予算化していない。
北区 江東区 中央区 葛飾区 品川区 台東区	予算化していない。

NHK調べ

を防ぐことができる。

- ・コンピュータ処理は便利で正確だ
- ・科学的であり、判定する専門家は信頼できる
- ・テスト業者は信用できる企業だ
- ・生徒理解に役立つ
- ・プライバシー保護のため、生徒本人はもちろん親にも開示しない、などです。

業者、それに結びつく専門家と称する方々は、現実の生徒を知らずに、「問題児」を発見しようというのです。それも性格を数値化するという、およそ人間の発想とは思えないことまでしています。つまるところ「人間鑑定」ではありません。公の機関が堂々としているのです。

教師は、生徒とじかに触れ合いながら、相互理解と信頼が生まれるのが基本です。このあたりまえのことが、性格テストなるものによって阻害されてしまうのです。テストの結果により、常に生徒に対し、予断と偏見をもつて接することになるからです。

人間は十人いれば十通りの考えや生き方があることを大人達、特に教師、心理判定の専門家は認めるべきなのです。

（東京・和氣 昭）

できました。

テレビ局への反響も別表のように、かなりものがありました。おかげで、六月三日には再放送もされたのです。私のかけた一本の電話がこのような形で実を結んだことに、感

慨ひとしおでした。

テレビを見て、改めて確認できたことは、テストをする側（特に学校）の論理です。

。問題生徒の早期発見になり、対応し易い。こじれると長期化する傾向があるが、それ

泉

この頁は、あなたと私の情報交換の場。小さなスペースですが、ご利用ください

◆「ちっちゃなラミ中」入会案内

五月号で内容をお知らせしましたが、費用は、入会金 五千元。設備費 五千元（年一回）。授業料 五千元（月額）
授業は月二回・日曜日です。

。問合先 「ラミ、中学校ほしいねん！ 設立委員会」（〒652 神戸市兵庫区松原通4-4-7ちびくろ保育園内 ☎078-651-6151）

◆山形市女性のための計画策定委員会調査書

。「女性の生活と意識に関する調査」'88年三月発行 B5判 百三十一頁
。「中学生の生活観と男女平等に関する調査」'88年十二月発行 B5判 四十六頁
。「男女平等と家庭生活に関する意識調査」'89年三月発行 B5判 百十八頁
調査・分析は、山形大学教育学部佐藤慶子研究室です。

。問合先 山形市福祉部婦人青少年課（〒980 山形市旅籠町2-3-25 ☎0236-41-1212）

◆冊子「ホテルイカ通信」

珠洲市の、原発誘致計画を阻止しようと立上った市民の情報誌です。珠洲の海を、土を守ろうとする人達の、熱い思いが伝わってきます。

。発行 グループあかりを消して
（〒927-12 石川県珠洲市小杉町戸破1364-34 ☎076-56-6808 和田方） 一部 三十円

◆子どもとつくる生活文化研究会全国大会

みつけるーよろこびをとりもどすためにー
。日時 八月十一日（金）～十三日（日）
。場所 八王子・大学セミナーハウス
（東京都八王子市柚木1887）

。参加費 八千円
。宿泊費 一万四千五百円（二泊六食・他）
。申込・締切 七月二十日。先着 百名
。問合先 （〒229 神奈川県相模原市陽光台3-3-2 桜野方）

◆第一回読書フォーラム

津島佑子さんを囲んでー作家が語る作品の

世界

。日時 七月二十五日（火）一時半～三時半
。場所 神奈川県立婦人総合センター第一研修室（小学生のために視聴覚室で、ビデオ「モモ・MOMO」を上映します）
。参加費 無料

。定員 八十名（託児の用意があります）
。申込先 神奈川県立婦人総合センター生涯学習部（〒251 藤沢市江の島1-11-1 ☎0466-27-2111内線562）

◆朗読劇「この子たちの夏 1945・ヒロシマ ナガサキ」 地人会

被爆した母たちを中心テーマにして、多岐にわたる手記・記録・詩歌の中から、演出家木村光一が構成・演出し、女優たちが朗読します。

。日時 八月六日（日）～九日（火）
。場所 有楽町朝日ホール
。入場料 二千元（全席指定）
。問合先 地人会（〒160 東京都新宿区新宿2-8-18マルキビル7F ☎03-354-1279）

◆神奈川県第三十二回勤労婦人大学講座

「均等法を育てよう」

テーマ 働き続けるための労働環境再点検

日時 八月二十一日(月)～十月二日(月)

週二回(月・水)

場所 神奈川県立勤労婦人会館

対象 県内在住または在勤の男女 六十人

受講料 二千五百七十五円

内容 八月二十一日(月)アグネス論争の問題点から

八月二十三日(水)こまできた育児休業制度

駒野陽子(日本婦人問題懇話会)

問合先 県立勤労婦人会館 ☎045-511-0451

県庁労働福祉課 ☎045-201-1111

県内各労働センター

◆ミズ・オーブンスクール開校案内

ミズ・クレヨンハウスでは、女性の視点で

開かれた学校を意味して「ミズ・オーブンス

クール」を企画しました。

開校日 九月十一日(月)

受講料 一人一講座 二万円(十二回を原則とします)

問合先 ミズ・オーブンスクール事務局

(〒107 東京都港区北青山3-8-15 ミズ・

クレヨンハウス内 ☎03-406-6492

Fax: 03-407-9568 広報担当 高谷みち子)

内容につきましては、We七月号落合恵子さ

んの文を参照して下さい。

◆女性学国際セミナー

性役割を変えるー地球的視点から

日時 十一月二十三日(水)～二十六日(日)

場所 国立婦人教育会館

第一日 ①開会 ②シンポジウム「性役割

を変えるー地球的視点から」司会 原ひろ子

(お茶の水女子大) ③懇親会

第二日 ④セッションI(全体会)テーマ

「家族」司会 加藤春恵子(東京女子大)

⑤セッションII(全体会)テーマ「労働」

司会 久場嬉子(東京学芸大)

第三日 ⑥セッションIII(全体会)テーマ

「セクシュアリティ」司会 藤枝澤子(京都

精華大) ⑦セッションIV(全体会)テーマ

「教育」司会 天野正子(千葉大)

第四日 ⑧ワークショップ(分科会)テ

マ「家族」「労働」「セクシュアリティ」

「教育」⑨スピークアウトセッション(全

体会)司会 原ひろ子(お茶の水女子大)

上村千賀子(国立婦人教育会館事業課専門職

員) ⑩開会

参加対象者 女性学に関心のある成人男女

募集内容等

①女性学国際セミナーの参加者一百名

申込期間 七月一日～九月二十日

定員を超えた場合は抽選

②公開シンポジウム(国際セミナー一日目)

のみの参加者一百名

申込期間 七月一日～十月三十一日

定員になり次第締め切り

幼児同伴の場合、保母が別室で保育を行います(先着十名まで)

費用 参加費ー無料。宿泊費ー11/23・24・

25日は一泊八百二十円、11/22・26日は一泊

千三百円。公開シンポジウムのみの参加費は

一律一泊千三百円。食費ー一日三食で二千五

百円～三千円くらい。懇親会費ー三千円

問合先 国立婦人教育会館事業課(〒355-1

02 埼玉県比企郡嵐山町菅谷728

☎0493-62-6711 Fax: 0493-62-6720)

◆「おだズなよ 原発増設」女川現地行動

日時 七月二十三日(日) a.m.十一時～

場所 女川町海岸広場(宮城県牡鹿郡女川

町)

問合先 現地行動実行委員会

☎0235-53-2725 (阿部)

十字路

〈北海道〉玉入れ用の詰めものに米（北海道5／20）

札幌市内の伏見小（高桑章校長）で、一年生百七十九人の家庭に配った学年通信に、運動会の紅白玉入れの玉に、米を入れて作るよう「お願い」したところ、父母の間から「主食を粗末にすることにならないか」という声が上がリ、生産者側は、「初めて聞く話だ。米が安くて、食糧に対する感覚が希薄になったあらわれなのか」と嘆いている。高桑校長は来年は『やむを得ない場合は』という断り書きを入れたいと言っている。（高橋芳恵）

〈新潟〉にいがた女性会議——家庭科の男女共学などたす（新潟日報6／7）

新潟市が策定した市女性行動計画は、二〇〇〇年までに男女共同参加の社会をつくるため、行政はなにをするかを示したもので、これを市民の側からバックアップする「にいがた女性会議」は昨年十月結成された。同会議では具体活動の第一歩として六月六日、同計画の推進状況を聞くとともに、懇親会を開い

た。この日は教育について懇談し、同会議の教育研究部会は「家庭科の男女共学を進めるため中学校、高校はなにをしているか」「家庭教育学級に男女平等教育の視点をどう取り入れているか」などの質問をし、市側も答弁に懸命だった。（山口久子）

〈神奈川〉米空母核疑惑——不安切々と横須賀市長ら国に要請（朝日5／17）

二十四年前、沖縄近海で水爆搭載機を水没させた米空母タイコンデロガが、その二日後米海軍横須賀港に直行していたとされる問題で、「核持ち込み疑惑」が極めて濃くなっている。五月十六日、横須賀市の横山和夫市長は旧軍港三市の代表とともに宇野外相と直接会見。外相に非核三原則の厳守を訴えるのは、米海軍の艦船に、核巡航ミサイル・トマホークの配備が始まった84年以来二回目。今回は「持ち込みの絶対にならないことを示す措置を新たに要請書に盛り込んだ。（渋谷裕子）

〈埼玉〉45人学級待って！「生徒の減少率は

地区によって差」（毎日5／27）

県教委は、中学卒業者数の増加が'88年度をピークに減少に転じることから、'89年度からの県立高校の一学級の定員を四十八人から四十五人に、臨時学級増を四十八クラスから二十二クラスに削減することを決定した。坂戸市内の主婦らで作っている「高校入学を考える坂戸親の会」（中村久美子代表）は「坂戸・鶴ヶ島地区は、生徒数が減少する率が少ないのに、定員削減が一律に行われては、受験競争がより激化する」と危機感を抱き、見直しを求める署名運動を始めた。問合先（☎083-851514 中村）（脇美智子）

〈静岡〉大胆方針で生き生き授業（中日5／15）

島田市でこの四月、ミニスクール「島田実業高等専修学校」（森下龍一校長）がスタートした。新入生は中卒者の五十五人。同校は島田経理専門学校として三十年以上続いてきたが、校名変更とともに、登校拒否など学校不適応の子どもも受け入れると宣言。規模の小さを逆手に取って、制服廃止、アルパイトの奨励、バイク通学OKなど大胆な教育を始めている。

高等専修学校は教育の見直しのひとつとして制度化され、'85年以降、修了者には大学入学資格が与えられている。（平野利依）

〈奈良〉西名阪自動車道路低周波訴訟記録を出版（朝日5/17）

北葛城郡香芝町の西名阪自動車沿線の住民が、高架橋から発生する超低周波と騒音の差し止めなどを求め、日本道路公団を相手取って奈良地裁に提訴。去年十二月、八年二ヵ月ぶりに住民側に有利な形で和解が成立した超低周波訴訟の綿密な記録がこのほど、同訴訟弁護団の手で出版された。タイトルは『静かな夜をかえせ 低周波公害裁判の記録』。公害として認知されていなかった超低周波の人体への悪影響を訴えた日本初の裁判だった。清風堂書店刊、価三八〇〇円。一般書店または奈良合同法律事務所 ☎0742-26-2157（乾 庸子）

〈大阪〉暮らしの中の「国際化」考えよう（朝日5/21）

「暮らしの国際化」をテーマに第六回吹田市消費生活展が、五月二十二日から市役所玄關ロビーで開かれる。千里山生活協同組合など十機関が協力して、「バナナを通して見える

フィリピンと第三世界」「世界の水・日本の水」などのタイトルで、日常生活の中に潜む「問題点」を考えさせる。（大江美香子）

〈同〉職場・地域の活動を記録『私たちの戦後史刊行（赤旗5/23）』

大阪の戦後の婦人運動の歴史が本になった。『知りたい 知らせたい 女たちの戦後史―大阪からのレポート』。柴田悦子さん（大阪市立大学教授）が中心となっている大阪婦人問題研究会で「いまのうちに」と声があがり、以来二年間の成果。内容は近江絹糸の女子工員たちのスト、大阪証券取引所の女性組合員の「ハイヒールストライキ」。民間放送局のたたかい等々。本書の執筆者四十一人のほとんどはごく普通の女性たちだが、「運動によつてしか前進はないということがよくわかった」と口をそろえる。創元社（☎06-263-2531）刊、価一三〇〇円。（由良サダユ）

〈同〉女性向けの電話相談に中・高の男子生徒が6割占める（毎日6/14）

里親探しの「愛の手」運動を続ける社団法人家庭養護促進協会大阪事務所（天王寺区）は、十代の「未婚の母」のケースが増えている

ことから少女や子供たちの不幸を未然に防ぐと昨年一月、APCC（思春期妊娠危機センター）電話相談を始めたが、相談件数の約六割を中・高校生を中心とした男の子が占めていることがわかった。初歩的な「性の悩み」のほか、交際女性の妊娠や近親相姦など深刻な相談もある。（安東尚美）

〈福岡〉教員採用受験拒否―「国籍条項は違法」在日韓国人三世訴え（西日本6/14）

昨年夏の福岡県小学校教員採用試験の受験を拒否された在日韓国人三世が「日本国籍がないのを理由に受験できないのは違憲、違法」として、福岡県と同県教育長を相手に受験願書の受理と百万円の損害賠償を求めた訴訟の第一回口頭弁論が十四日午前十時から、福岡地裁で開かれた。原告は春日市上白水の周人植（チュ・インシク）さん。教員資格を日本国籍に限った「国籍条項」の適否が法廷で問われるのは初めて。国籍条項は、教育職員免許法などには盛り込まれていないが、文部省の指導で、福岡県をはじめ三十三道県と三政令市で採用資格に定めている。しかし、都府県・政令市教委の独自の判断で外国籍の教員を採用したケースもある。（安部宣人）

アンテナ・アンテナ・アンテナ・アンテナ・アンテナ・

これまで国会の政府答弁などで一定の見解が出されているが、指導書の中で「君が代」などの公定解釈が明記されるのは、今回がはじめて。来春から入学式・卒業式で君が代斉唱などの「義務化」が実施されることから、今後論議を呼びそうだ。(6.8日付朝日)

★自衛隊の憲法判断回避

航空自衛隊百里基地（茨城県東茨城郡小川町）の用地売買をめぐる争いから憲法九条論争に発展、自衛隊の場合、違憲が問われた「百里基地訴訟」の上告審判決で、最高裁第三小法廷（伊藤正己裁判長）は、最大の争点とされた自衛隊の憲法判断は回避し「自衛隊は法律に基づいて設置された。本件売買が民法の公序良俗に反して無効だとはいえない」と述べ、国側勝訴とした一、二審判決を支持、基地反対派住民の上告を棄却した。

自衛隊発足後間もない昭和30、40年代に相次いで起きた「憲法九条裁判」が次々に終結する中で、最後まで残り、しかも自衛隊の場合、違憲論を初めて正面から最高裁に持ち込んだ点で注目された裁判だったが、司法の判断回避姿勢を改めて確認する結果となった。(6.21日付朝日)

★がん告知、積極検討促す

がん告知や末期医療のあり方が国民的な論議を呼んでいるが、厚生省の「末期医療に関するケアのあり方の検討会」（座長・森岡恭彦東大教授）は16日、①がん告知は有益な点も多く、積極的に取り組むべきだ②末期患者に対する単なる延命治療は再考が必要③医療機関で末期患者を扱うのは不適切な面が多く、ホスピスや在宅治療の推進が望ましい——などを骨子とする報告書をまとめた。報告書は極めて慎重な言い回ししながら、本人への告知を避け、ひたすら延命治療に多大なエネルギーと費用を費やしているわが国医療の現状に、強い疑問を投げかけたものといえる。

厚生省、日本医師会はこのを受けてすで

に医師向けのマニュアルを作成し、全国の医療現場などに配布する予定で、今後、わが国の末期医療は、この報告の内容を軸に展開されていく。(6.17日付朝日・読売)

★国会で首相の性モラル問う

リクルート事件で、政治不信を引き起こし、竹下首相の退陣、中曽根前首相の離党などに追い込まれた自民党は、2日、党本部で両院議員総会を開き、新総裁に宇野宗佑氏を選出し、新内閣が発足した。5日政治に対する信頼を回復するため、政治改革を「内閣の最重要課題」と位置づけ「不退転の決意」で取り組むと、所信を表明。(6月2～6日付各紙)

9日、参院本会議の代表質問に立った社会党の久保田真苗氏は、7日付米ワシントンポスト紙の記事を示し、首相の「女性問題報道」を取り上げ、「事実でないなら(報道機関に)抗議すべきだ」と迫ったが、首相が「公の場でお答えするのは差し控えたい」と回答を避けた(10日付)。これに対し、全国52の女性団体が組織する「国際婦人年連絡会(世話人・中村紀伊主婦連副会長)」は、19日、公開質問状を出して、性の商品化についての首相の見解をただすしたり、「アジアの買売春に反対する男たちの会」は「男の性意識の改革」を求める抗議書簡を送るなど、抗議が相次いでいる。(19日付朝日)

★難民、ベトナムから漂着

5月29日、長崎県五島列島・小値賀(おじか)町の離島、美良島((びろうじま)南端の海岸に、小型木造船が座礁しているのを、漁船が見つけた。佐世保海上保安部の巡視艇が急行、調べたところ、ベトナム難民の男性77人、女性30人の計107人(内子ども14人)で、4月20日、23トンの船でベトナムを出港、全員無事漂着したという(5.29日付読売)。これに引きつづき6月16日105人のベトナム難民が、また五島に流れ着き、地元では極東の「経済大国」を目指す人々に当惑気味という。(6.16日付朝日)

アンテナ・アンテナ・アンテナ・アンテナ・アンテナ・

★北京—民主化運動を武力制圧

戒厳令下の北京で、4日未明、中国人民解放軍の戒厳部隊は、民主化を求める学生が座り込んでいた天安門広場を戦車と装甲車で制圧、死者2000人、負傷者5000人を出す(中国筋情報)流血惨事を引き起こした。これらの武力鎮圧に抗議し、上海では列車焼き打ち事件がおこる等、抗議行動が全国に広がる一方、戒厳軍内部の武力衝突が引きおこり、北京は一時内戦の危機をはらむ様相を帯びた。

こうした中で政府内部の動静についても様々な憶測が飛び交ったが、9日になり重病説の流れていた最高実力者の鄧小平中央軍事委主席、李鵬首相らが戒厳部隊幹部と接見、健在ぶりを示すとともに、保守、強硬派が権力掌握したことを内外に示し、10日から民主化運動関係者の一斉摘発を強化、全国で700人を逮捕。15日、列車焼き打ち事件で上海市中級人民法院は被告3人に死刑判決、21日に公開処刑、さらに翌22日北京でも7人、山東省でも17人の処刑を行なった。

すでに死刑判決に抗議している米国、フランス、西独など海外からの非難が高まっている。(6.5〜23日付各紙より)

★革命イラン指導者ホメイニ氏、死去

イラン国営放送は同国の最高指導者ルホラ・ムサビ・ホメイニ師が3日死去したと発表した。師は、'79年、パーレビ王制を倒したイスラム教シーア派革命を指揮し、絶対的な指導者として、宗教と政治を一体化させる特異な体制を現代史の一角に築いた。同師の死は、対イラク戦争の後遺症が根強く残るイランの今後に大きな混乱を招く可能性をはらむ。(6.5日付各紙)

★住民投票で原発停止へ——米加州

米カリフォルニア州サクラメント市一帯で、6月実施されたランチョセコ原発(加圧水型、出力91万キロワット)の存続の是非を問う住民投票は、運転継続を否とする票が53.4%と過半数を占め、原発管理者で

あるサクラメント市公共事業体(SMUD)は住民の意見を尊重すると言明しており、直ちに運転停止の作業に入るものとみられる。(6.8日付朝日)

★ソ連、ウラル核事故を32年ぶりに公表

タス通信は16日、ウラル地方の核兵器製造工場で、'57年、大爆発があり、放射性物質が105キロにわたって流出、当時1万人以上が避難した事実を明らかにした。放射能の総流出量は200万キュリー(チェルノブイリ事故—5000万キュリー)。このため周辺地域では現在も水の汚染が続いており、地元住民の間で原子力発電所の建設計画をめぐる激しい議論が起きているという。(6.17日付読売)

★泊原発、稼働

北海道電力泊原発一号機(出力57万9千キロワット)が、通産省によるチェックに合格、北海道初の原発が営業運転を開始。チェルノブイリ原発事故後、新設では初の稼働。(6.22日付読売)

★国旗・国歌の解釈を明記

新指導要領にもとづき、文部省が作成した小学校教師用の指導書のなかで、「我が国の国旗と国歌の意義を理解させる」とし、国旗などの「意義」を教えるにあたっては①国旗・国歌は、いずれの国も持っていること ②いずれの国でも象徴として大切にされており、互いに尊重し合うことが必要なこと ③我が国の国旗・国歌は、長年の慣行によって「日の丸」が国旗であり、「君が代」が国歌であることが、広く国民の認識として定着していること——の3点を児童に理解させるよう求めている。

そのうえで指導書は特に、「国歌の意義」を教える際に配慮すべき点に言及。「憲法に定められた天皇の地位についての指導との関連を図りながら、国歌『君が代』は、我が国が繁栄するようにとの願いをこめた歌であることを理解させる」と記述、「君」は「象徴としての天皇」を意味するという。

●くらし・環境

- 83/2.3 住むということ (¥500)
 85/11 みのりの秋に (¥530)
 85/12 人間と土を生かす (¥530)
 86/1 くらしの文化を探る (¥530)
 86/2.3 水はいのちの泉 (¥530)
 87/8.9 「原発」知らなくていいのか (¥530)
 87/12 国際居住年って何だった (¥530)
 88/10 食と環境といのち (¥550)
 89/1 くらしの論理を創る (¥550)
- 世界・社会
- 84/1 「1984年」
 86/12 平和—今年を顧みる (¥530)
 87/1 女性—世界を変えようか (¥530)

- 87/5 情報化社会の光と影 (¥530)
 88/7 なぜ、家庭科にコンピューター (¥550)
 88/8.9 コンピューター、何をどう変える (¥550)
 88/12 マスコミと文化の変容 (¥550)
 89/2.3 上すべりの国際化 (¥550)

◆単行本

- 「子ども発、大人へ」学習の主人公&小沢牧子
 —いま生まれる新しい関係— (1300円 千250)
 「らくだが廻んだ」平井雷太 (1200円 千250)
 —教育の常識の非常識—
 「若いいのちの像」児玉澄子 (1300円 千250)
 —私のカウンセリング入門—

★バックナンバーのご案内★
 ご注文は、最寄りの書店(地方小扱い)または、料金をおそえの上、振替で直接ウィ書房へ。

WE EDITOR'S NOTE

◆梅雨の激しい雨降りの土曜の午後、首都圏Weの会主催の「We誌合評会」に出かけました。今回は、四月号で執筆いただいた関千恵子さんを迎えて、札幌の母親餓死事件の取材を通してのお話や、「この国は恐ろしい国」の出版後の反響を通して、やっぱり日本は豊かでなかった」にたどりつくお話など、地球市民として生きる「テーマも遠のく。」 (青木)

◆中学のPTAの役員を二年間。公立中学にしては管理のゆるやかな学校。かしこい」お母さんたちが多いゆえ、教師は遠慮がちに。一億総評論家の時代だからおっしゃることはごもつともなのだが、我が子が生きやすいようにと、ひたすら「障害物」を取り除く。行く処

行く処、「教育」が「子ども」が語られる。その袋小路から出なくてこの号を担当しました。 (稲色)

◆フオーラムまで秒読みの段階になりました。大らかな阿蘇の懷で、ゆったりしてみませんか。青い空、白い雲、緑の草原、今は想像だけです。すぐには体験できません。内容はとも充実しています。お早めにお申し込み下さい。 ◆金子静枝さんのきり絵「四季の詩」が淡い五色の絵はがきになりました。五枚一組300円。送料は一組62円。二組72円。十組以上は送料不要(中野)

♥同じ地球市民として、お隣の国、中国北京の惨事は、胸が痛みます。市中を戦車が走り回り、広場に死体が折重なるテレビニュースの映像は、映画の世界で

ないだけに背ずじが寒くなります。「一日も早く、もっとも良い方法で解決を」と祈っているのですが、だんだん民主化とは程遠くなつてゆくようです。当分の間、目が離せない隣国です。 (柳田)

★NHKスペシャルが三夜連続で放映した「南米・失楽の500年」は、興味あふれる番組でした。「白人は自然を徹底的にしぼり取るが、インディオは自然との調和を考える。人間は、仲間と共に向上するために生き、食うために働き、死ぬために生きてる」と、立花隆氏に語った會長ベンジャミンの思想は深いものでした。★一月お休みし、十月号は「食べものから地球を見る」です。お楽しみに。(半田)

新しい家庭科—

Vol.8 No5 1989年7月20日発行
 定価567円(本体550円+税17円)送料共
 年間購読料・定価7107円(本体6900円+税207円)
 編集兼発行人/半田たつ子

発行所/(有)ウィ書房

〒182 東京都調布市西つつじヶ丘2-25-14
 ☎03(326)1380 郵便振替 東京6-59867
 第一勧業銀行 調布仙川支店 普預1075292
 印刷所/(有)若佐印刷所 〒112文京区春日1-6-7

新しい家政学を学ぶために

日本女子大学の大学通信教育

4月入学 受付期間 2月1日～3月20日(1990年度) (当部必着)
10月入学 受付期間 8月1日～9月20日(1989年度)

家政学部 { 児童学科 幼・小教員免許状取得
食物学科 } 中・高(保健) (家庭)
生活芸術学科 } 教員免許状取得

学士入学
編入学
制度あり

＜正科生のほか、下記のコースがあります＞

聴講生——教員免許状に必要な一部の科目を履修するコース

科目別履修生——希望する一部の科目を自由に選択、履修するコース

〒112 東京都文京区目白台1-18-14W

入学案内

送料共 710 円 切手
同封の上右記へ

日本女子大学通信教育部

Tel 03 (943) 3131 (代)

新しい家庭科の重要な柱、消費者教育を、教育学者としての
独自の見地から追求し、提案する待望の著、いよいよ刊行!!

宮坂広作著

消費者教育の創造

価2000円・税60円・〒310円

「消費者教育というのは、単に知識を伝達するだけではだめで、消費者のものの見方、考え方の枠組み・様式の自己変革を援助するのだからなければならない」(はしがきより)
教育学者としての立場から、20年をかけた研究、ついに一冊の本に結実!

- 序章 消費者教育の風景
I 消費者問題と消費者教育
II 消費者教育の概念・理念と実践
III 学校教育における消費者教育
IV 社会教育における消費者教育
V 消費者教育における自治体の役割
終章 現代消費社会と消費者教育

—課題と展望—

■直接小社にご注文の場合は、書名、冊数および住所・氏名を明記の上、代金に送料を加えた金額をお送り下さい。
■二冊以上の場合の送料は、実費をこ請求いたします。
■電話、はがきでも申し込みの際は、代金、送料を記入した振替用紙を同封いたしますので、到着次第お支払い下さい。
〒112 東京都文京区目白台1-18-14W
振替 口座 03・3322・6159
東京 615988704

ウイ書房